

# 宿屍遺跡

— 久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅰ —



2022

常陸大宮市教育委員会

# 宿屍遺跡

— 久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅰ —



2022

常陸大宮市教育委員会





1. 第1号土坑の土器群 (北方向から)

図版 2



1. 調査区遠景（東方向から）



2. 調査区全景（南方向から）



1. 第1号土坑検出状況(東方向から)



2. 第1号土坑遺物出土状況(北方向から)



3. 第1号土坑遺物出土状況(東方向から)



4. 第1号土坑管玉出土状況(東方向から)



5. 第1号土坑サメ歯出土状況(東方向から)

図版 4



1. 第1号土坑土器群出土状況（東方向から）



2. 第1号土坑土器群出土状況（南方向から）



3. 第1号土坑土器群出土状況（北方向から）



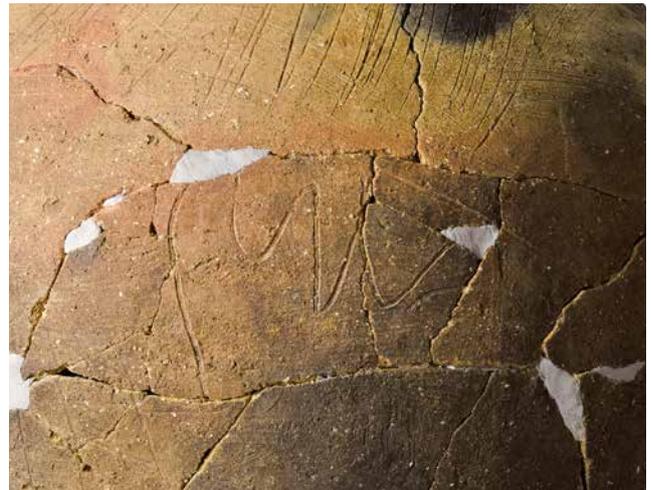
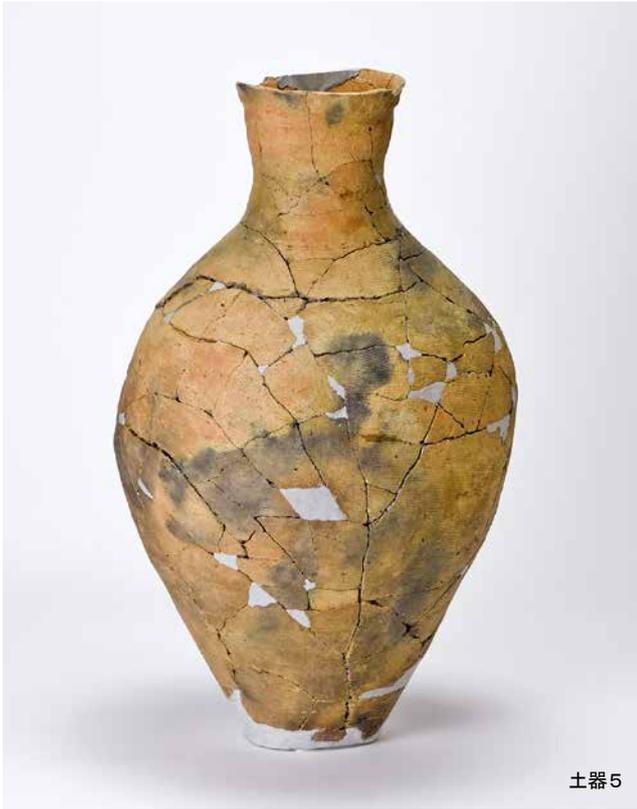
4. 第1号土坑土器群出土状況（西方向から）



5. 第1号土坑完掘状況（東方向から）

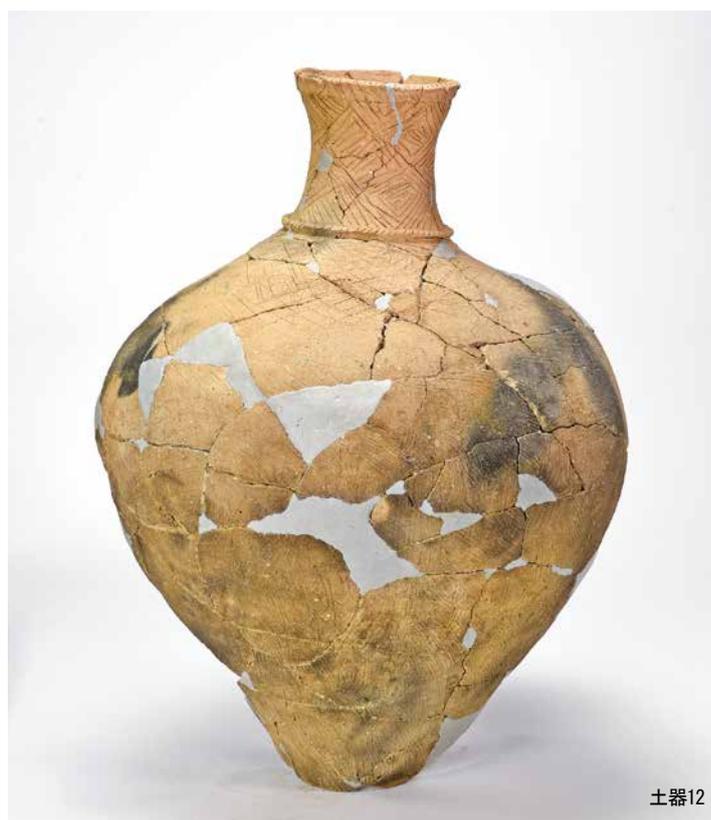


1. 第1号土坑の土器(1) (縮尺約1/6)



1. 第1号土坑の土器(2) (縮尺約1/6)

土器13の線描部



1. 第1号土坑の土器(3) (縮尺約1/6)

図版 8



土器 8



土器 9



土器 14



土器 17

土器 18

土器 19

1. 第1号土坑の土器(4) (縮尺約1/6)

(縮尺約1/3)



2. 土器7の沈線文



3. 土器13の沈線文と赤茶色付着



土器 2



土器 13



土器 6

4. 底面の木葉痕



1. 第1号土坑の管玉 (倍率×2)

図版 10



1. 第1号土坑の管玉・小玉・翡翠玉 (倍率×2)



2. 第1号土坑のサメ歯 (倍率×2)



3. 第1号土坑のメノウ磔 (縮尺1/2)



4. 第2号土坑完掘状況 (東方向から)



5. 第2号土坑堆積土層断面 (南方向から)



6. 第2号土坑磔群検出状況 (東方向から)



7. 第2号土坑磔群検出状況 (西方向から)



1. 調査区出土石鏃の石材

(原寸)

図版 12



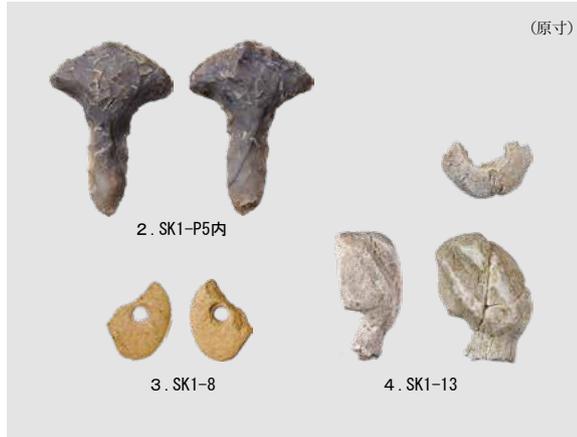
1. 調査区出土の土偶

(縮尺1/2)



2. 調査区出土の石匙・石錐・  
垂飾・弭形製品

(縮尺1/2)



3. 石鏃付着物拡大  
(図版11-1-6)



4. 第2号住居跡遺物出土状況



1. S12-2



2. S12-6

5. 第2号住居跡の須恵器 (縮尺約1/4)



6. 試掘第1トレンチ (北方向から)



7. 試掘第2トレンチ (西方向から)

## 序 文

常陸大宮市は茨城県北西部に位置し、県都水戸市から北へ約20kmの、人口約3万9千人の市です。

市域の北側には八溝・久慈山系からなる山地が連なり、南西端を那珂川が、東側を南北に縦断する久慈川が流れる景勝の地です。また、市域の中央には久慈川支流の玉川と那珂川支流の緒川が南北に流れ、高度に応じた緑豊かな丘陵・台地・低地を形成し、原始・古代からの重要な遺跡が多く残されています。特に、久慈川右岸の地区字坂下に所在する泉坂下遺跡は、平成29年に再葬墓遺跡としては日本で初めて国史跡に指定されました。

今回の調査は、太陽光発電施設整備事業に伴い実施した試掘調査で、その泉坂下遺跡と同様の弥生時代の再葬墓の遺構が確認されたことで非常に重要な遺跡であることがわかったため、地権者の岡崎正男氏のご協力の下、調査を行うこととなりました。

本遺跡は、長倉地区の宿場町がある台地の南東の端、まさに「宿」の「尻」にあたる場所にあります。見晴らしも良く、大沢川を挟んだ向こう側の台地には四季彩館が見え、南側には雄大な那珂川を望むことが出来ます。河川に近いこうした場所である為、古くから人々が集まり生活を営んできた為、周辺には長倉城跡をはじめとして多くの重要遺跡があります。この宿尻遺跡も、『御前山郷土誌』に石棒等の出土品から村内を代表する縄文時代遺跡として記される著名な遺跡でしたが、今回の調査で全国的にとっても珍しい再葬墓遺構が発見されたことにより、いっそう重要な遺跡となりました。

市内の再葬墓遺跡は、このほかに人面付き土器が出土した小野天神前遺跡(小野地区)と中台遺跡(山方地区)が確認されており、一つの市町村に四箇所もの再葬墓遺跡が見つかる例は極めて希です。これらの近隣の再葬墓遺跡を調査することで、国史跡再葬墓遺跡の泉坂下遺跡の研究をより一層進めることが期待されます。

最後になりますが、発掘調査にあたり工事日程を調整していただくなど、発掘調査のために多大なご理解・ご協力を頂きました岡崎正男氏、また全般にわたりご協力いただきました地元の皆様及びその他御指導・御協力いただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

令和4年3月

常陸大宮市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は太陽光発電施設の開発に伴い常陸大宮市教育委員会が実施した、常陸大宮市長倉字宿尻907番地の2に所在する、宿尻遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 この調査は、2019(令和元)年6月4日付けで太陽光発電施設整備の開発に伴う試掘調査の結果、弥生時代の再葬墓遺構が確認され、「重要遺構」であると判断されたため実施にいたったものである。調査面積は98㎡である。
- 3 発掘調査及び整理期間は以下のとおりである。

発掘調査 2019(令和元年)年8月1日～同年9月6日  
整理作業 2019(令和元年)年9月7日～同年11月1日  
2021(令和3年)年4月1日～2022(令和4年)年3月1日
- 4 発掘調査は、常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課の中林香澄、萩野谷悟、鈴木素行が担当した。調査に関する当市教育委員会の組織は以下のとおりである。

【2019(令和元)年度】茅根正憲(教育長)、大町 隆(教育部長)、皆川嗣郎(次長兼文化スポーツ課長)、石井聖子(同参事)、関和朗(同課長補佐)、會沢英行(同係長)、中林香澄(同主幹)、高橋拓也(同主幹)、小磯晴香(同主事)、萩野谷悟(同嘱託職員)、鈴木素行(同嘱託職員)、吹野富美夫(同臨時職員)

【2021(令和3)年度】茅根正憲(教育長)、諸沢正行(教育部長)、坪 裕志(文化スポーツ課長)、砂川明生(同課長補佐)、會沢英行(同主査)、石井聖子(同主任)、中林香澄(同主任)、杉浦果奈(同主事)、萩野谷悟(同会計年度任用職員)、鈴木素行(同会計年度任用職員)、須藤公子(同会計年度任用職員)、河西恵子(同会計年度任用職員)、岡部孝代(同会計年度任用職員)
- 5 本書は、鈴木素行が編集し、Ⅱ－1を吹野富美夫、Ⅱ－5を佐々木義則、Ⅲ－5・Ⅳ－2を田中美零、その他を鈴木が執筆した。
- 6 石器の石材については、田切美智雄氏(茨城大学名誉教授)に御教示いただいた。
- 7 土器底面の木葉痕原体については、小幡和男氏(茨城県自然博物館)に御教示いただいた。
- 8 サメ歯については、富田武照氏・宮本 圭氏(沖縄美ら島財団)、高桑祐司氏(群馬県立自然史博物館)に御教示いただいた。
- 9 図版の遺物写真は、飯島一生氏(常陸大宮市史編纂考古部会)の撮影による。
- 10 調査にあたり、地権者である岡崎正男氏から多大なる御理解と御協力をいただいた。
- 11 調査は、以下の方々の御協力のもと実施した。

小野千里、佐々木義則、須藤公子、田中美零(以上、発掘調査及び整理作業)、小西竜世、篠原とよ子、中村信博(以上、発掘調査)、岡部孝代、河西恵子(以上整理作業)
- 12 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々から種々の御教示や御協力をいただいた。記して謝意を表する。

(50音順、敬称略)

相田美樹男、猪狩俊哉、池澤広美、石川日出志、稲田健一、宇留野美雪、海老原四郎、小澤重雄、小玉秀成、近藤裕子、後藤俊一、齋藤夏輝、齋藤和佳子、高村恵美、谷口陽子、通野 健、西野陽子、廣水一真、横倉要次  
老岐市教育委員会、神奈川県教育委員会、四季彩館、多古町教育委員会、田原本町教育委員会
- 13 出土遺物及び関係資料は、常陸大宮市教育委員会において保管している。

# 目 次

I	遺跡の位置と環境	1
1	宿尻遺跡の位置	1
2	宿尻遺跡の地理的環境	1
3	宿尻遺跡の歴史的環境	2
II	調査の概要	5
1	調査に至る経緯	5
2	調査の経過	5
3	遺構の分布と基本土層	8
4	縄文時代の遺構と遺物	11
5	奈良・平安時代の遺構と遺物	15
III	再葬墓の調査	17
1	第1号土坑	17
2	覆土の堆積	17
3	遺物の出土状況	17
4	土 器	20
5	玉 類	39
6	サメ歯	42
IV	調査の成果と課題	43
1	宿尻遺跡第1号土坑の土器群について	43
2	宿尻遺跡第1号土坑の管玉について	51
3	宿尻遺跡第1号土坑のサメ歯について	59

# 挿図目次

第1図	宿尻遺跡と大沢川合流域の遺跡群	1	第32図	第1号土坑出土遺物(13) —土器14・15—	34
第2図	調査区の位置	2	第33図	第1号土坑出土遺物(14) —土器16・17・18—	35
第3図	調査前の宿尻遺跡	2	第34図	第1号土坑出土遺物(15) —土器19—	36
第4図	宿尻遺跡採集石棒	3	第35図	第1号土坑出土遺物(16)	37
第5図	試掘トレンチと調査区	5	第36図	第1号土坑玉類・サメ歯出土状況図	38
第6図	調査風景(1)	6	第37図	第1号土坑出土遺物(17) —管玉—	40
第7図	調査風景(2)	7	第38図	第1号土坑出土遺物(18) —玉類—	41
第8図	調査区の遺構配置	8	第39図	第1号土坑出土遺物(19) —サメ歯—	42
第9図	調査区の地形	8	第40図	壺形土器の器高の分布	43
第10図	調査区の基本土層	9	第41図	壺形土器の部位直径の分布	43
第11図	縄文時代の遺構	10	第42図	宿尻遺跡第1号土坑の土器群	44
第12図	掘立柱建物跡の参考	11	第43図	壺形土器の胴部形態	45
第13図	縄文時代の土器(1)	12	第44図	「宿尻類型」粗製壺形土器	46
第14図	縄文時代の土器(2)	13	第45図	形態及び文様構成の類例	47
第15図	縄文時代の土偶	14	第46図	渦状文壺形土器の変遷	48
第16図	奈良・平安時代の住居跡	15	第47図	栃木県出流原遺跡第11号墓壇	49
第17図	奈良・平安時代の出土遺物	15	第48図	第1号土坑玉類出土状況と出土管玉	51
第18図	第1号土坑実測図(1)	18	第49図	管玉穿孔部の顕微鏡拡大写真	53
第19図	第1号土坑実測図(2)	19	第50図	茨城県の再葬墓と破砕管玉出土遺跡の分布	54
第20図	第1号土坑出土遺物(1) —土器1—	21	第51図	女方遺跡出土破砕管玉写真	55
第21図	第1号土坑出土遺物(2) —土器2—	22	第52図	茨城県内と栃木県出流原遺跡出土破砕管玉	55
第22図	第1号土坑出土遺物(3) —土器3—	23	第53図	福島県宮崎遺跡出土破砕管玉と石器	57
第23図	第1号土坑出土遺物(4) —土器4—	24	第54図	宿尻遺跡第1号土坑のサメ歯	59
第24図	第1号土坑出土遺物(5) —土器5—	25	第55図	サメ歯出土の弥生時代遺跡	60
第25図	第1号土坑出土遺物(6) —土器6—	26	第56図	弥生時代のサメ歯集成(1)	61
第26図	第1号土坑出土遺物(7) —土器7—	27	第57図	弥生時代のサメ歯集成(2)	62
第27図	第1号土坑出土遺物(8) —土器8—	28	第58図	絶滅種化石の参考	63
第28図	第1号土坑出土遺物(9) —土器9—	29	第59図	高志神社遺跡の牙籤	64
第29図	第1号土坑出土遺物(10) —土器10・11—	30	第60図	間口洞窟遺跡の牙籤	64
第30図	第1号土坑出土遺物(11) —土器12—	31	第61図	九州における縄文時代後期の牙籤	65
第31図	第1号土坑出土遺物(12) —土器13—	32			

# 表目次

第1表	調査区出土石鏃等一覧表	14	第4表	第1号土坑出土管玉計測・観察表	42
第2表	第1号土坑出土土器計測・観察表	37	第5表	各遺跡の破砕管玉計測・観察表	56
第3表	第1号土坑出土玉類計測・観察表	41	第6表	弥生時代サメ歯一覧表	66

# I 遺跡の位置と環境

## 1 宿尻遺跡の位置

発掘調査を実施した地籍は、常陸大宮市長倉字宿尻907番地の2で、「宿尻遺跡」の範囲内にある。

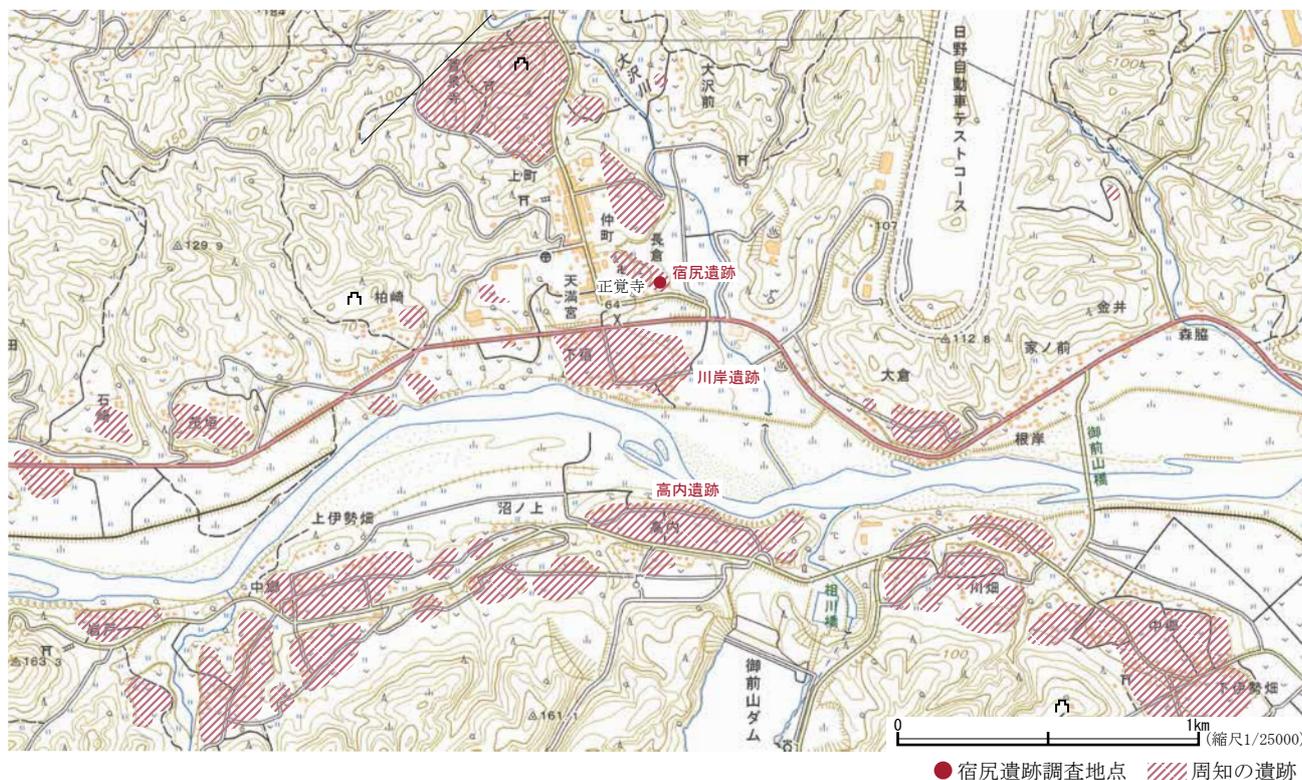
宿尻遺跡は、東京帝国大学人類学教室（1897・1898・1901・1928）が編集した『日本石器時代人民遺物発見地名表』には記載されておらず、茨城県教育委員会等が発行した茨城県の遺跡地名表・地図の類（1964・1970・1975・1977・1979・1980）にも長らく記載されることがなかった。しかし、遺跡地は古くから耕作に利用されていて、遅くとも昭和30年代には「ヤジリ」が拾える畑として、地元の子供たちにはよく知られていたらしい。

文献に宿尻遺跡の名前が初めて登場するのは、1990年に刊行された『御前山村郷土誌』である。「現在のところもっとも古い時期の遺物としては、長倉・宿尻遺跡の早期の土器（田戸下層式）が知られている」、 「石鏃は有茎、無茎さまざまなものがあり、かつ西塙遺跡、高内遺跡、宿尻遺跡などでは出土数も多い」（川又守1990）と記述され、宿尻遺跡の出土遺物には「土器、石剣、石鏃」が並ぶ。その後、1998年の「埋蔵文化財包蔵地調査

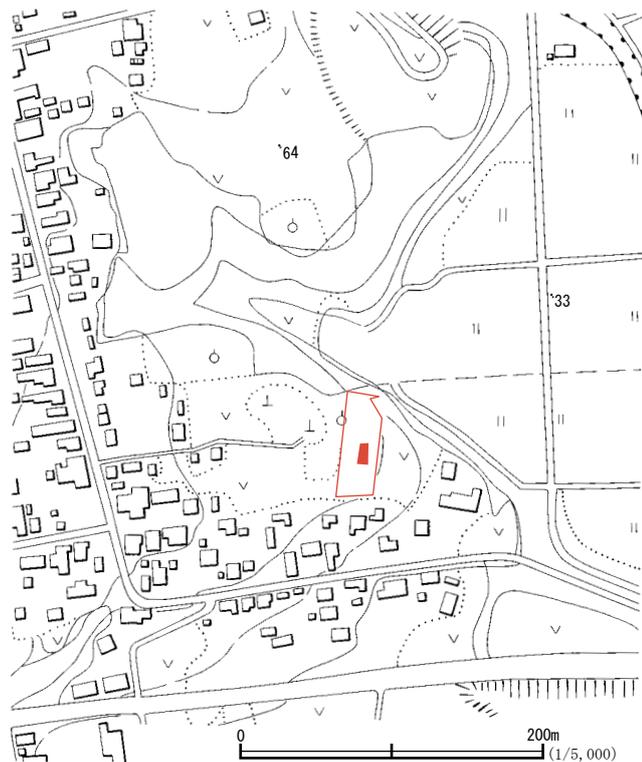
カード」には、出土品の項目に「縄文土器（田戸下層、加曾利E）、土師器、須恵器、石棒」が記入されており、縄文時代中期と古代も重複する遺跡であることが明らかにされた。但し、時代・時期の根拠となる遺物は、実測図や写真などの画像が公表されていない。2001年に刊行された『茨城県遺跡地図』には宿尻遺跡が記載され、周知の遺跡となっている。

## 2 宿尻遺跡の地理的環境

茨城県北部は、久慈川を境界として西側に八溝山地、東側に阿武隈山地と呼称される山地形が展開する。その八溝山地は北から、八溝山を中心とした八溝山塊、鷲子山、尺丈山、南山などの鷲子山塊、そして那珂川より南の鷲子山塊に区分される。これらの山地の周辺には、200m等高線より低い地域に丘陵が分布し、鷲子山塊は南縁に丘陵が広がる。栃木県的那須岳を水源とする那珂川は、鷲子山塊と鷲子山塊の間を西から東へと流れ、河岸段丘を形成した。長倉に見られる70mを超える段丘は上位段丘、60m前後の段丘は中位段丘、50mを下回



第1図 宿尻遺跡と大沢川合流域の遺跡群



第2図 調査区の位置

る段丘は下位段丘にほぼ相当する(早川2003)。宿尻遺跡は、那珂川左岸の中位段丘上に形成された遺跡であり、鷲子山塊を流れる大沢川との合流点付近に位置している(第1図)。遺跡は、正覚寺がのる標高60mを超える台地上から、大沢川に向かう斜面にかけて広がる。本来は緩やかな傾斜地であった斜面には、4段に耕作地が造成されている(図版2-1)。上から2段目が今回の調査地であり、その1段下の耕作地からは多くの「ヤジリ」が採集されたという。調査地では、北側の斜面近くから採集されたという5点の石棒が常陸大宮市歴史民俗資料館に寄贈されていた(第4図)。これが1990年『御前山村郷土誌』の「石剣」、1998年「埋蔵文化財包蔵地調査カード」の「石棒」に該当する資料と考えられる。

### 3 宿尻遺跡の歴史的環境

宿尻遺跡が立地する周辺は、那珂川左岸では大沢川が合流し、右岸では鷲子山塊を流れてきた相川が合流する地域でもある。ここには、2001年『茨城県遺跡地図』に記載された多くの遺跡が周知されている(第1図)。今回の宿尻遺跡の調査で確認された時代・時期を中心として、周辺の遺跡を概観する。遺跡のほとんどは、縄文時代あるいは奈良・平安時代の遺跡であり、この2つの時

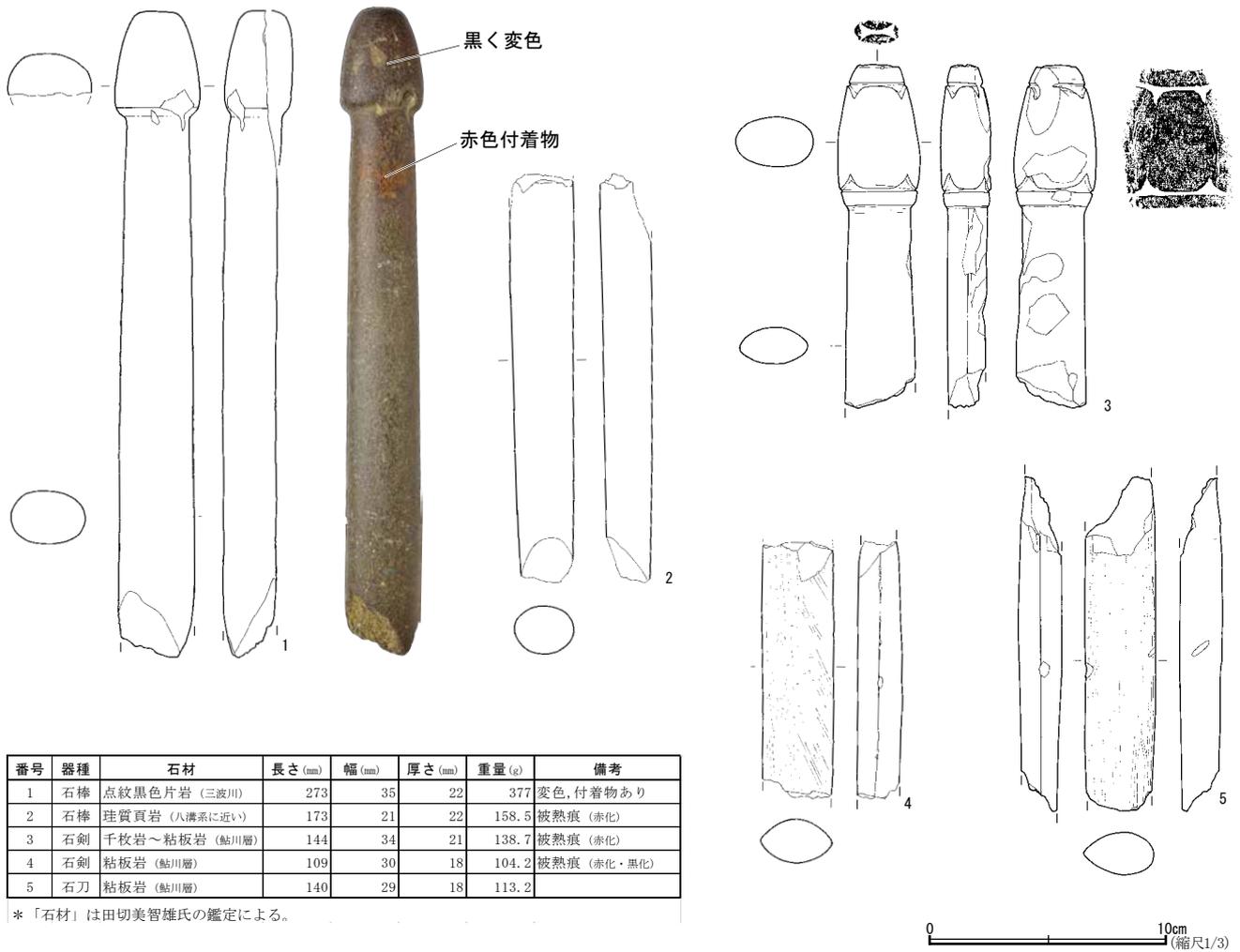


第3図 調査前の宿尻遺跡 (2019.4.9撮影)

代が複合する遺跡も多い。但し、これらの遺跡についても、時代・時期の根拠となる遺物は、実測図や写真などの画像がほとんど公表されておらず、詳細が明らかでない。今回が、この地域における初めての発掘調査ということになる。

縄文時代の遺跡のうち、宿尻遺跡に隣接する川岸遺跡(「川岸前遺跡」を改称)から出土した土器は、旧・長倉中学校に保管されて、現在は市教育委員会が所蔵する。土器には、「縄文式土器 出土場所・長倉中学校西舎裏北隅 出土年月日・昭和24年11月2日 発見者・長中2学年生徒 型式(引用註:括弧内空白)」と書かれたラベルが貼り付けられている。1960年『御前山村郷土誌』に、「長倉中学校の敷地からは、かつて縄文式の相当大きい、まとまつた土器が発掘され」と記述された、その土器に該当するらしい。「加曾利E3式」の深鉢形土器であり、口縁付近から底部までが接合して復元されている。底部が穿孔されていることから、埋葬が掘り出されたものと見られる。下位段丘に立地する川岸遺跡が縄文時代中期の遺跡としては拠点であり、中位段丘の宿尻遺跡には、その周縁部として生活の痕跡が残されたのではないかと想定される。

宿尻遺跡から採集された石棒には、石剣(第4図3・4)と石刀(5)が含まれており、縄文時代晩期が複合することはほぼ確実と考えられた。泉坂下遺跡との関連から、2019年4月に調査地周辺を踏査(第3図)した折にも、石剣の破片が採集されていた。今回の調査の結果、縄文時代後・晩期の遺跡が複合し、晩期には遺構も構築されていたことが確認された。1990年『御前山村郷土誌』に「石鏃は有茎、無茎さまざまなものがあり、かつ西塙



番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	石棒	点紋黒色片岩(三波川)	273	35	22	377	変色, 付着物あり
2	石棒	珪質頁岩(八溝系に近い)	173	21	22	158.5	被熱痕(赤化)
3	石剣	千枚岩~粘板岩(鮎川層)	144	34	21	138.7	被熱痕(赤化)
4	石剣	粘板岩(鮎川層)	109	30	18	104.2	被熱痕(赤化・黒化)
5	石刀	粘板岩(鮎川層)	140	29	18	113.2	

\*「石材」は田切美智雄氏の鑑定による。

#### 第4図 宿尻遺跡採集石棒 (岡崎豪氏寄贈資料)

遺跡, 高内遺跡, 宿尻遺跡などでは出土数も多い」と記述された3遺跡は, いずれも縄文時代後・晩期の遺跡であったことになる。西塙遺跡は, 4.5kmほど下流の那珂川左岸に位置し, 縄文時代後・晩期の遺物が報告されている(川上・阿久津1976, 川又守1990)。さらにこの4kmほど下流に, 小野天神前遺跡が位置する。高内遺跡是那珂川右岸にあり, 宿尻遺跡からは那珂川を渡った直の対岸に位置する。首藤保之助が昭和初期に採集した遺物のなかに, 縄文時代後・晩期の石器(独鈷石), 土製品(土偶)を見出し, これを報告してある(鈴木・飯島・高村2021)。高内遺跡からは多量の遺物が採集されていたようで, 縄文時代後・晩期遺跡としての宿尻遺跡の範囲が狭いことから, 高内遺跡に拠点が想定される。

弥生時代の遺跡は, 周辺には確認されておらず, 5km余り下流で緒川と那珂川の合流点付近に位置する山根遺跡が知られるだけであった。採集された「十王台式」の

高環形土器が紹介(川又守1990, 川又清1999)されるとともに, 発掘調査では集落跡が確認されている(三輪他2014)。近年になって内原遺跡に, S字状口縁台付甕と「十王台式」が共伴する住居跡が調査され, 弥生時代後期から古墳時代前期へと継続する遺跡群の形成が明らかになってきている。

那珂川流域の弥生時代中期については, 小野天神前遺跡がよく知られている。手掘りのゴボウ収穫で人面付土器が発見され, 1976(昭和51)年に茨城県歴史館(現・茨城県立歴史館)が学術調査を実施した遺跡である。この調査は, さらに2点の人面付土器を検出するとともに, 多くの土器を埋設した弥生時代中期の再葬墓群の姿を明らかにした。この小野天神前遺跡から8.5kmほど上流の宿尻遺跡において再葬墓が検出されることになった。但し, 小野天神前遺跡のように再葬墓が群集して形成されたという遺跡ではなさそうである。これは, 久慈川流域

における泉坂下遺跡（鈴木編2011）と中台遺跡（山方町文化財保存研究会編1977）が10kmほどの距離で形成され、下流の泉坂下遺跡には再葬墓が群集するのに似ている。

奈良・平安時代については、大沢川と相川が那珂川に合流する地域に形成された遺跡群の一端を、断片的にはあるが明らかにした。調査成果を蓄積するための第一歩ということになろう。また、宿尻遺跡において検出された奈良・平安時代よりも新しい時代の遺構については、北西方向850mの位置に中世の長倉城跡が位置し、城郭に関係することも想定されたが、今回の調査では時代を決定する資料が検出されなかった。

### 参考文献

- 阿久津久 1977『茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)』学術調査報告書Ⅰ 茨城県歴史館
- 茨城県教育委員会編 1964『茨城県遺跡地名表』茨城県教育委員会
- 茨城県教育委員会編 1970『茨城県遺跡地名表』茨城県教育委員会
- 茨城県教育委員会編 1975『茨城県遺跡地名表』茨城県教育委員会
- 茨城県教育委員会編 1977『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会
- 茨城県教育庁文化課編 2001『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会
- 川上博義・阿久津久 1976「縄文時代における文化の領域的研究」『茨城県歴史館報』3 63-77頁
- 川又清明 1999「東茨城郡御前山村山根遺跡採集の弥生土器について」『婆良岐考古』第21号 128-131頁
- 川又 守 1990「原始古代」『御前山村郷土誌』御前山村 51-64頁
- 御前山村郷土誌編纂委員会編 1960『御前山村郷土誌』御前山村教育委員会
- 斎藤 忠他 1979「先土器・縄文時代遺跡地名表」『茨城県史料考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 518-557頁
- 鈴木素行編 2011『泉坂下遺跡の研究 一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について一』(私家版)
- 鈴木素行・飯島一生・高村恵美 2021「『石買ヒノ爺老』 一首藤保之助による常陸大宮市域の考古遺物採集記録一」『常陸大宮市史研究』第4号 105-126頁
- 東京帝国大学編 1897『日本石器時代人民遺物発見地名表』東京帝国大学
- 東京帝国大学編 1898『日本石器時代人民遺物発見地名表』(二版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学編 1901『日本石器時代人民遺物発見地名表』(三版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学編 1917『日本石器時代人民遺物発見地名表』(四版) 東京帝国大学
- 東京帝国大学編 1928『日本石器時代遺物発見地名表』(五版) 岡書院
- 早川唯弘 2003「地形分類図」『土地分類基本調査 常陸大宮・烏山』茨城県農地局農地計画課 13-38頁

文化庁文化財保護部編 1980『全国遺跡地図 茨城県』文化庁文化財保護部

三輪孝幸他 2014『山根遺跡』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第20集 常陸大宮市教育委員会

山方町文化財保存研究会編 1977『山方町誌』上巻 山方町文化財保存研究会

## Ⅱ 調査の概要

### 1 調査に至る経緯

本発掘調査は、常陸大宮市教育委員会市史編さん事業に伴う学術研究調査である。

2019年6月4日、株式会社エコスタイル代表取締役木下公貴から常陸大宮市教育委員会に太陽光発電設備設置工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会がなされた。同工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地後宿尻遺跡地内であるため、同日に文化財保護法第93条第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けた。

2019年6月19日、常陸大宮市教育委員会は、工事計画の中に幅50cmの溝8本を併行させて掘削するケーブル埋設工事があることから、試掘調査を実施した。試掘調査は、トレンチ方式で行い、調査の結果、弥生時代中期の土坑等が確認され、国指定史跡泉坂下遺跡の研究及び史跡整備等に大いに資する弥生時代中期の再葬墓跡が所在する可能性が高いことが判明した。

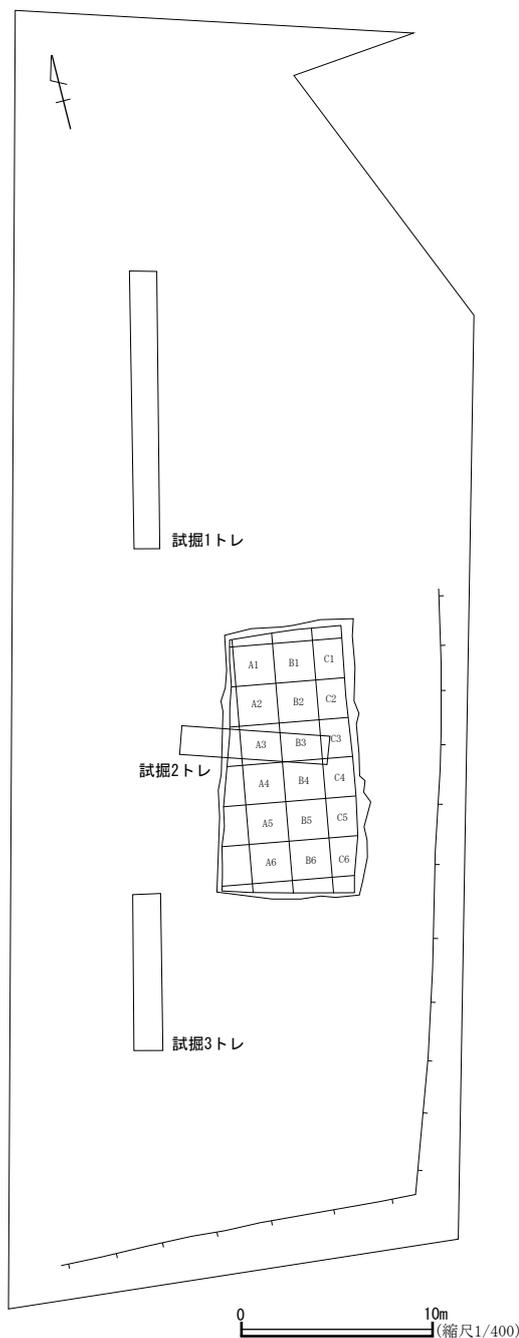
試掘調査の結果により株式会社エコスタイルと常陸大宮市教育委員会が協議を行ったところ、当該区域で計画された工事は埋蔵文化財の保存について影響があることとともに、地域にとって重要な遺跡であることから、常陸大宮市教育委員会が工事着手前に学術研究のための発掘調査を実施することの合意が得られた。埋蔵文化財発掘の届出については、その協議結果に基づいて常陸大宮市教育委員会から茨城県教育委員会へ進達した。

2019年7月18日、茨城県教育委員会から発掘調査を実施する旨の通知を受けた。

発掘調査については、この通知を受けて、常陸大宮市教育委員会が株式会社エコスタイルが施工する工事着手前に学術研究として実施することになり、2019年8月1日から同年9月6日まで実施した。(吹野富美夫)

### 2 調査の経過

**8月1日(木)晴。**試掘調査第2トレンチの東端で検出された遺構の全体を露出させるため、略6m×13mの範囲について重機により客土・表土を除去。前日に調査を終了した泉坂下遺跡より発掘機材を搬入した。



第5図 試掘トレンチと調査区

**8月2日(金)晴。**掘削した調査区内に2m方眼のグリッドを設定(第6図1)。東西方向の西からA～C、南北方向の北から1～7の番号を付ける(第5図)。

**8月5日(月)晴。**調査区全体について遺構確認の作業。北側の遺構分布の概要を捉えるとともに、南側が大きな攪乱で破壊されていることが判明した。



1. 調査区グリッドの設定(8月2日)



2. 第1号土坑の調査(8月6日)



3. 第1号土坑の調査(8月7日)



4. 第1号土坑の調査(8月21日)

## 第6図 調査風景(1)

**8月6日(火)晴。**遺構確認状況の撮影。試掘調査で弥生土器が出土した遺構を第1号土坑(SK1)とし、上部が露出した土器に1~9の番号を付す。十字形の土層観察ベルトを設定して覆土を掘り始める(第6図2)。

**8月7日(水)晴。**第1号土坑の土器は14までを数え、多くは口縁を中央に向けた放射状に並ぶ。その中央部からは管玉の破片が出土した(第6図3)。

**8月8日(木)晴のち曇。**掘り上げた覆土を水洗選別に備えて土嚢袋に入れながら第1号土坑を掘り進める。土器9内よりサメ歯が出土した。

**8月9日(金)晴のち雨。**第1号土坑遺物出土状況の撮影。玉類など微細な遺物を図面に記録して取り上げる。盆休みに備えて安全対策を施し、土嚢袋を搬出する。

**8月19日(月)曇のち晴。**第1号土坑の堆積土層を検討し、底面を精査。南東部底面に重複する土坑を検出し、1次葬土坑の可能性を考える。

**8月20日(火)曇のち雨。**第1号土坑の土層断面図を作成。再葬墓の分布を検討するため、調査区内に検出された他の遺構について精査を始める。B1区とB4区で検出されていた遺構の覆土を一部掘り込み、ともに奈良・平安時代の住居跡と推定した。

**8月21日(水)曇のち雨。**第1号土坑の土層観察ベルト部分の覆土を掘り下げる。

**8月22日(木)曇時々雨。**第1号土坑土器群出土状況の撮影。その後、50cm方眼に水糸を張り、土器群平面図作成用の撮影(第7図1)。B4区の遺構を第1号住居跡(S11)として、遺物の出土状況を記録し取り上げた。

**8月23日(金)曇時々雨。**第1号土坑の土層断面図に追加を記録。土器群出土状況のエレベーション図を作成。土器群の破片分布について観察し、個体識別、部位、破片の表裏等を平面図用の写真に記入する。

**8月24日(土)晴一時雨。**第1号土坑土器群の破片分布



1. 第1号土坑の調査 (8月22日)



2. 第1号土坑の調査 (8月25日)



3. 第1号土坑の調査 (8月26日)



4. 第5号土坑の調査 (9月4日)

## 第7図 調査風景(2)

について観察を継続する。

**8月25日(日)晴。**第1号土坑土器群の破片分布について観察を継続する。観察が終了した土器から順次、上側の破片を取り上げ下側の破片を露出させる(第7図2)。土器内土壌は水洗選別のために採取した。

**8月26日(月)晴。**第1号土坑土器群の下側の破片の露出, 土器内土壌の採取を継続。下側の破片が露出した土器から順次撮影, エレベーション図に記録を追加する(第7図3)。記録が完了した土器を取り上げた。

**8月27日(火)晴。**第1号土坑土器群の記録と取り上げを継続。調査区北壁の土層断面図を作成した。

**8月28日(水)晴。**第1号土坑土器群の記録と取り上げを継続して完了する。

**8月29日(木)晴, 猛暑。曇時々雨。**第1号土坑の完掘状況即ち第2号土坑(SK2)の確認状況を撮影。第2号土坑の覆土を掘り下げる。調査区全測図の作成を始める。

**8月30日(金)曇時々雨。**第2号土坑の覆土掘り下げと調査区全測図の作成を継続。

**9月2日(月)曇。**第2号土坑の土層断面の撮影と作図。調査区全測図の作成を継続し, 等高線を入れる。

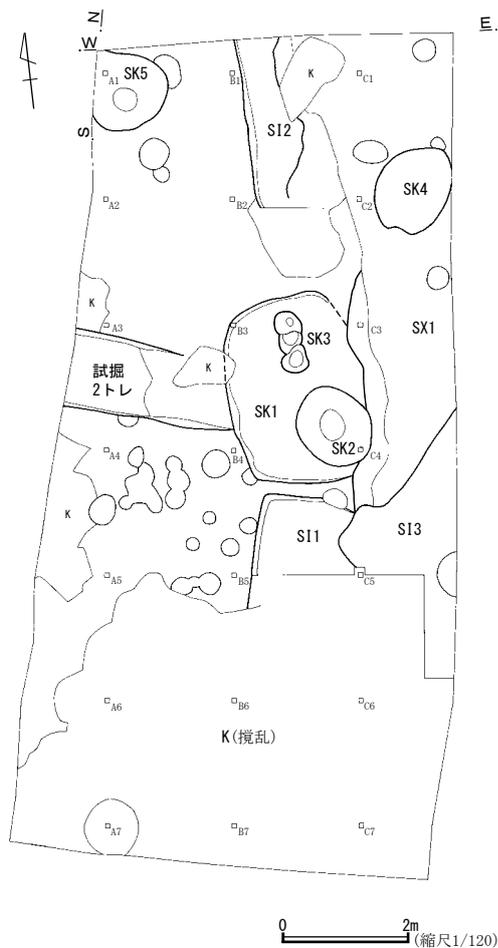
**9月3日(火)曇。**第2号土坑は覆土の掘り下げ。第1号土坑の底面で検出された第3号土坑(SK3)を調査する。

**9月4日(水)曇。**第2号土坑は覆土の掘り下げを継続。調査区西壁の第5号土坑(SK5)部分について土層断面図を作成する(第7図4)。

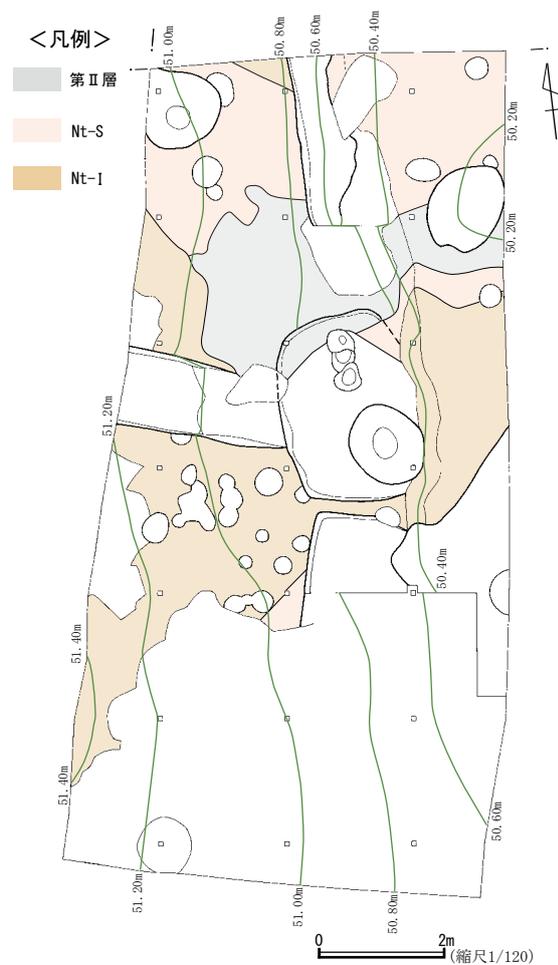
**9月5日(木)曇。**第2号土坑の礫群検出状況を撮影。

**9月6日(金)晴。**午前に調査区全景, 第1・2・3号土坑完掘状況, 調査区北壁土層断面を撮影。午後は機材撤収と重機による調査区の埋め戻し。

採取した土壌の水洗選別については, 整理作業所において発掘期間中から継続し, 11月1日に完了した。



第8図 調査区の遺構配置



第9図 調査区の地形

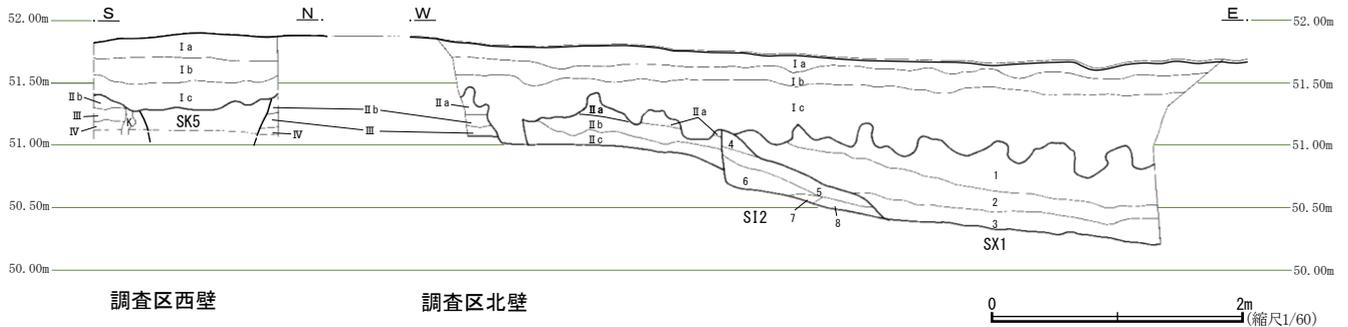
### 3 遺構の分布と基本土層

表土・客土の除去は、東西5m・南北10mを目安に実施したが、特に東側では遺構確認面までが深いことから、地表面付近が崩落し、法面のような傾斜が生じた。調査区は遺構確認面で計測し、北壁が5.64m、南壁が6.61m、南北壁間が12.84～13.47mの不正な四角形で、その面積は98㎡と算出された。この範囲に一边2mのグリッドを設定しており、グリッドの南北軸は真北から11度ほど東に傾く(N-11°-E)。

調査区内に検出された遺構は、竪穴住居跡3基(S11～3)、再埋葬の第1号土坑を含む土坑5基(SK1・2・3A・3B・3C)、第1号土坑に重複する有段状の遺構(SX1)について覆土を掘り込む調査を実施し、第2号土坑とともに掘立柱建物跡を構成する第4・5号土坑(SK4・5)は遺構番号を付して確認面の遺物を取り上げた。他のほとんどは柱穴ほどの規模の土坑が最多で29基を数えたが、これらは確認面に遺物も検出されていないことから、覆土を

掘り込まず遺構番号も付していない。未調査の土坑の中には、A6区で検出され攪乱より新しいと判断された直径85cmほどの円形土坑、C4・5区で検出され第3号住居跡より新しいと判断された直径70cmほどの円形土坑もある。柱穴ほどの規模の土坑覆土には、黒褐色土と褐～暗褐色土の二者が観察され、前者は基本土層の第II層に共通することから縄文時代、後者は第3号住居跡より新しい土坑の覆土に共通することから平安時代以降の遺構と考えられた。(第8図)

調査地は畑地造成のために平坦に整地されていたが、調査区内を更新世の上面相当まで掘り下げたところ、10°前後の緩やかな傾斜面が露出した。その地面の北側には、橙色の今市スコリア(Nt-I)が露出する部分、淡褐色の七本桜スコリア(Nt-S)が露出する部分、同じ垂直位置で黒褐色土が堆積する部分があり、黒褐色土の下位が谷底となる更新世の谷地形が埋没していると考えられた。南側は攪乱で明らかでないものの、B5杭付近に七



### 基本土層

第 I a 層：暗褐色土層（表土除去に伴う客土）

第 I b 層：暗褐色土層（表土，耕作土）

第 I c 層：暗褐色土層（農地造成時の客土）

第 II a 層：黒色土層（10YR1/2 ローム粒子少量，小ブロック微量，Nt-S・I 微量含む 粘性弱 締まりやや弱）

第 II b 層：黒褐色土層（10YR3/1 ローム粒子少量，Nt-S・I 微量，炭化物微量含む 粘性やや弱 締まりやや弱）

第 III 層：灰黄褐色土層（10YR4/2 ローム小ブロック少量，粒子多量，Nt-S 小ブロック少量，粒子少量，Nt-I 微量含む 粘性やや強 締りやや強）

第 IV 層：Nt-I・S 層（調査区西壁には Nt-S が露出）

### 有段遺構(SX1)堆積覆土

第 1 層：黒褐色土層（10YR3/2 ローム小ブロック微量，粒子多量，小礫微量，焼土小ブロック微量，炭化物粒子微量，Nt-S・I 微量含む 粘性中 締まりやや弱）

第 2 層：黒褐色土層（10YR2/3 ローム粒子多量，礫微量，焼土粒子微量，Nt-S・I 微量，炭化物粒子微量含む 粘性中 締まりやや弱 基本的に第 1 層と同じだが，基材の黒色土が多く混入が少ない）

第 3 層：黒褐色土層（10YR2/2 ローム小ブロック微量，粒子中量，Nt-S・I 微量，焼土小ブロック微量，炭化物粒子微量含む 粘性やや強，締まりやや弱）

### 第 2 号住居跡(S12)堆積覆土

第 4 層：黒褐色土層（10YR3/1 ローム小粒子少量，Nt-S・I 微量，灰白色粘土小ブロック微量含む 粘性やや弱 締まり弱）

第 5 層：黒色土層（10YR3/1 ローム小ブロック微量，粒子少量，焼土粒子微量，炭化物微量，Nt-S・I 微量含む 粘性やや強 締まり中）

第 6 層：黒褐色土層（10YR2/2 ローム小ブロック少量，粒子多量，焼土粒子微量，炭化物粒子微量，Nt-S 微量含む 粘性やや強 締り中）

第 7 層：にぶい黄褐色土層（10YR4/3 ローム小ブロック微量，粒子多量，焼土粒子微量，Nt-S・I 微量含む 粘性やや強 締まりやや強）

第 8 層：褐色土層（10YR4/6 ローム小ブロック中量，粒子極多量，黒色土小ブロック中量，Nt-S 粒子少量，Nt-I 小ブロック微量含む 粘性強 締まりやや強）

### 第 5 号土坑(SK5)堆積覆土

黒褐色土層（2~5cm の粘土ブロックを少量，Nt-I を少量，2~8cm の礫を少量含む 粘性無し 締まり有り）

## 第 10 図 調査区の基本土層

本桜スコリアが露出していることから，これより南にも谷地形が埋没していることが想定される。（第 9 図）

基本土層は，主に調査区北壁で観察した（第 10 図）。

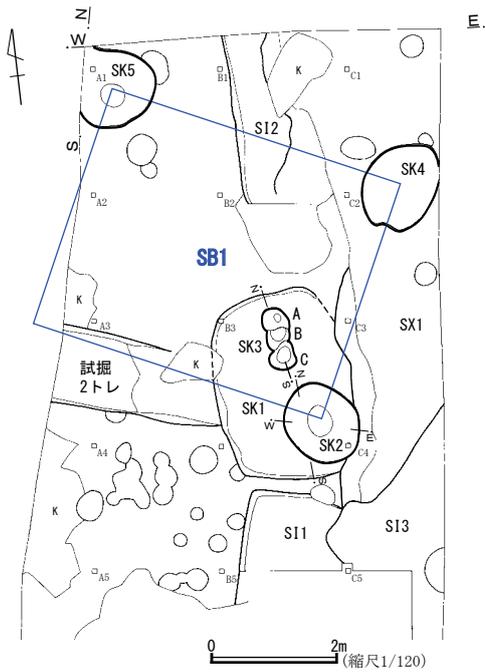
第 I 層の暗褐色土層は客土及び表土であり，調査区の全域を被覆する。第 I b・c 層は，緩斜面を平坦に整地した客土であり，第 I c 層の下部に凹凸が著しいのは伐根によるのかもしれない。

第 II 層の黒褐色土層は，奈良・平安時代の第 2 号住居跡がこれを掘り込んで構築されており，奈良時代以前の堆積層であることは確実である。試掘調査の第 1・3 トレンチ（第 5 図）では，第 II 層が検出されずに第 I 層直下に第 IV 層が露出することから，第 I 層の客土は，緩斜面の上方を削平して整地したものと見られる。また，縄文

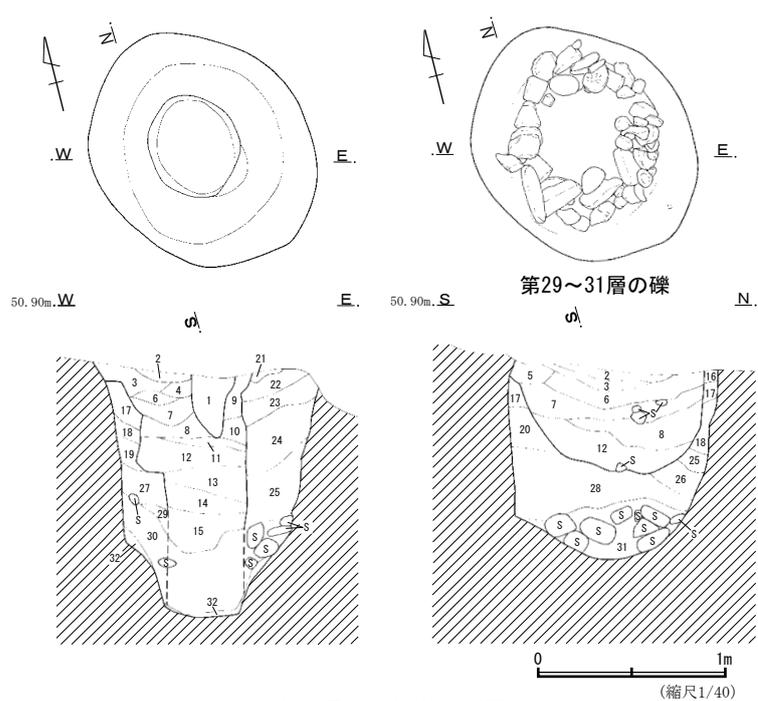
時代晩期の第 5 号土坑は，第 II b 層を掘り込んで構築されており，第 II a 層が縄文時代晩期以後，第 II b・c 層が縄文時代晩期以前の堆積層であることも確かである。今回の重機による表土除去は，第 IV 層上面の遺構確認までを一気に掘り下げたことから，第 II a・b・c 層それぞれに包含される遺物を分けて回収することはできなかった。

第 III 層の灰黄褐色土層は，黒褐色土層とローム層の漸移層，第 IV 層はローム層最上位に堆積する今市・七本桜スコリア（Nt-I・S）に相当する。今市・七本桜スコリアの噴出年代は，<sup>14</sup>C 年代測定の較正暦年代が 14,000~15,000 年前と考えられている。

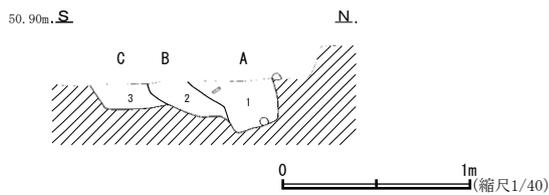
本調査が主な対象とした弥生時代再葬墓の第 1 号土坑



遺構の分布と第1号掘立柱建物跡



第2号土坑(SK2)実測図



第3号土坑(SK3)セクション図

### 第3号土坑(SK3)堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層 (10YR3/4 わずかに粘土化したローム大ブロック少量, Nt-I 混じりでローム主体の大ブロック多量, Nt-I を多く混入する一部粘土化したローム大ブロック中量, Nt-I 微量含む 粘性やや弱 締り強)
- 第2層：黒褐色土層 (10YR3/2 Nt-S・I 混じりローム大ブロック中量, 中ブロック少量, ローム小ブロック少量, 灰白色粘土小ブロック微量, Nt-S・I 微量含む 粘性やや弱 締り強)
- 第3層：にぶい黄褐色土層 (10YR4/3 ローム大ブロック少量, 小ブロック中量, 粒子多量, Nt-S・I 微量, 小礫少量, 含む 粘性やや弱 締り強)

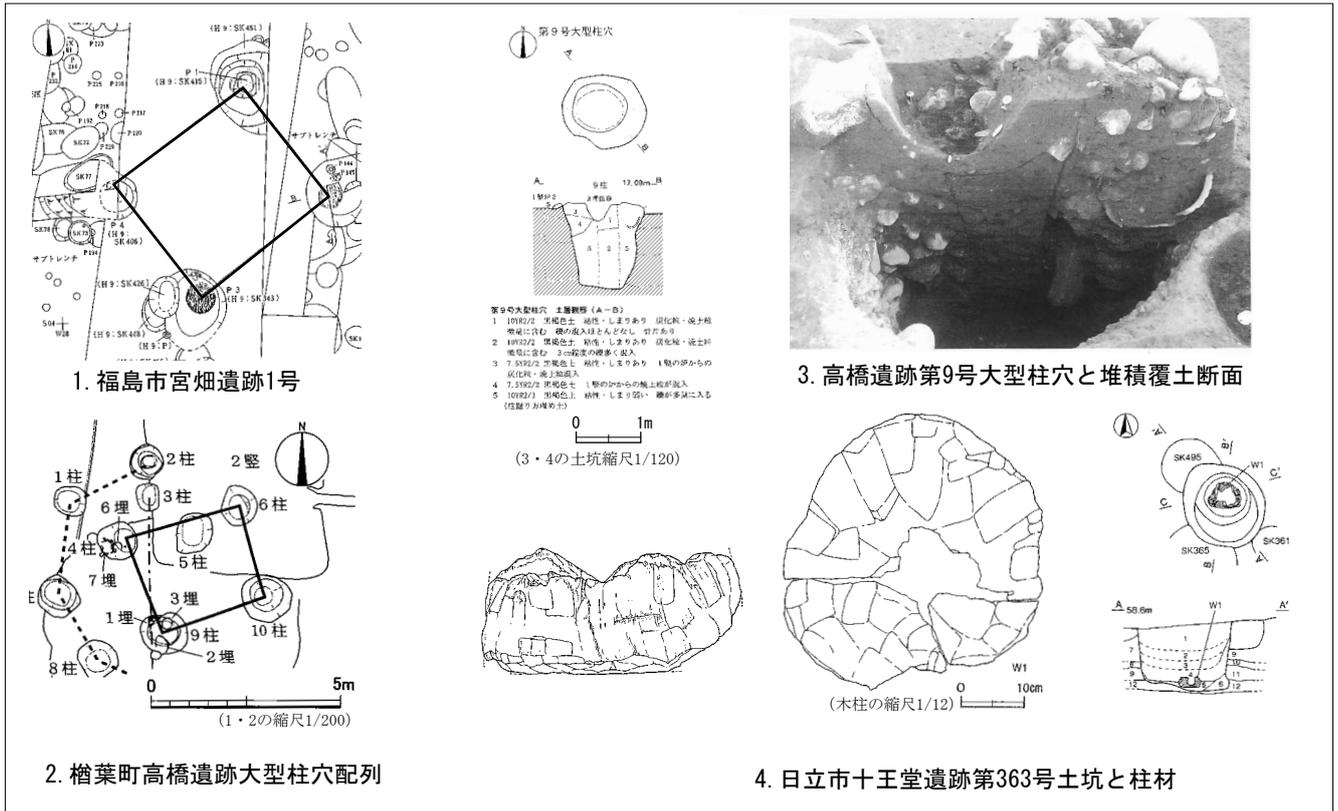
### 第2号土坑(SK2)堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層
- 第2層：暗褐色土層
- 第3層：黒褐色土層
- 第4層：暗褐色土層
- 第5層：暗褐色土層
- 第6層：にぶい黄褐色土層
- 第7層：褐色土層
- 第8層：黒褐色土層
- 第9層：暗褐色土層
- 第10層：黒褐色土層
- 第11層：暗褐色土層
- 第12層：黒褐色土層
- 第13層：暗褐色土層
- 第14層：黒褐色土層
- 第15層：黒褐色土層
- 第16層：褐色土層
- 第17層：褐色土層
- 第18層：暗褐色土層
- 第19層：黒褐色土層
- 第20層：褐色土層
- 第21層：黒褐色土層
- 第22層：にぶい黄褐色土層
- 第23層：黒褐色土層
- 第24層：にぶい黄褐色土層
- 第25層：褐色土層
- 第26層：にぶい黄褐色土層
- 第27層：黒褐色土層
- 第28層：にぶい黄褐色土層
- 第29層：黄橙色土層
- 第30層：観察欠
- 第31層：暗褐色土層
- 第32層：黒色土層

## 第11図 縄文時代の遺構

は、第II a層から掘り込まれたと考えられ、当時の地表面は、第IV層上面の確認面より50cmほど上にあった。第1号土坑の掘り込みは今市スコリア層に到達している

が、その位置が埋没谷に掛かることもあって、掘り上げられた土壌の大部分は、第II層の黒褐色土であったと考えることができる。



第12図 掘立柱建物跡の参考(各報告より引用)

#### 4 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、第2, 3A・3B・3C号土坑について覆土を掘り込む調査を実施した。いずれも弥生時代再葬墓の第1号土坑に重複する遺構である。

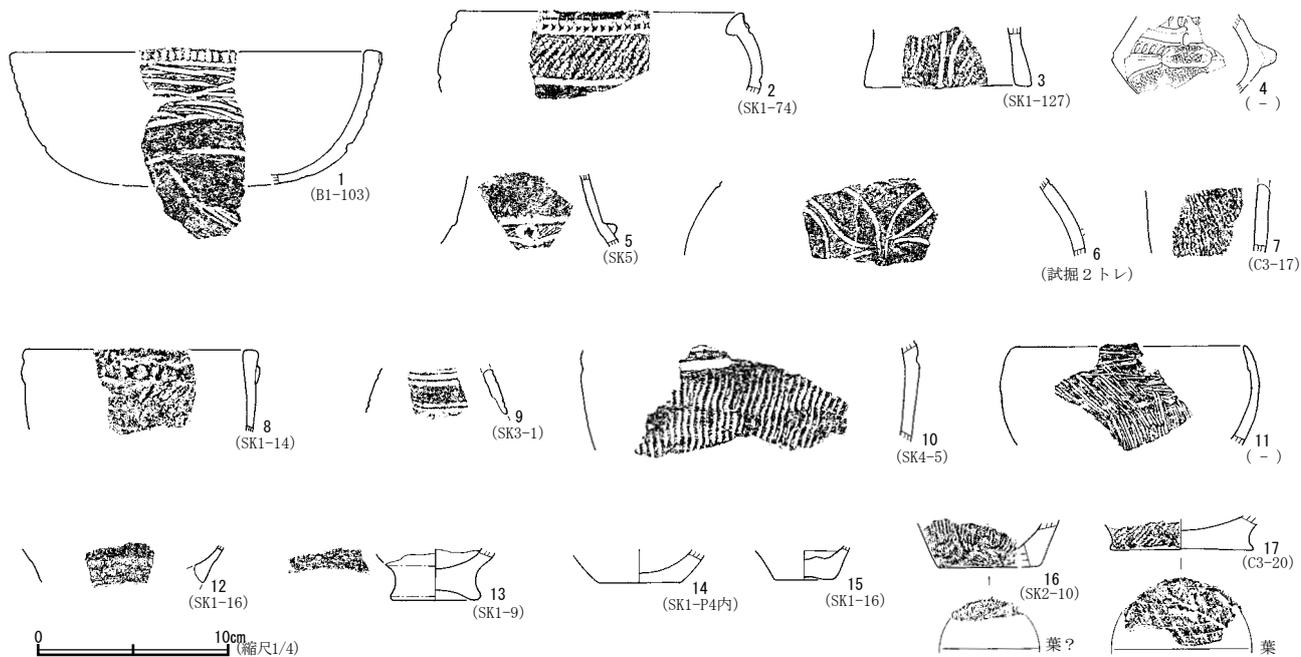
**第2号土坑** 第1号土坑の調査中、土器1の南側に覆土の一部が検出された。泉坂下遺跡(鈴木編2011)の調査では再葬墓の第2号墓壙に、1次葬の土壌墓と想定される第7号土坑が重複していたことからその可能性を考えて、2つの土坑の関係を第1号土坑南北ベルトで観察するため第2号土坑覆土も部分的に掘り下げた。しかし、30cmほど掘り下げても底面には到達しなかった。第1号土坑の底面に全体が検出された第2号土坑の平面は、長軸1.34m・短軸1.10mの楕円形である(図版4-5)。覆土の観察記録は、東西方向に中心を通る断面を準備した(図版10-5)が、作業空間の確保のためにも、南北方向は第1号土坑の南北ベルト軸を利用して西壁寄りに設定せざるを得なかった。覆土の最上位からは、弥生時代の土器や管玉の破片が出土し、当初は弥生時代の土坑のようにも思われたが、これらは後に第1号土坑に伴う遺物の落ち込みと判断された。

第1号土坑底面から70~80cm掘り下げた垂直位置に

礫の群集が検出された。長軸10~30cmの大きさで丸みを帯びた自然礫がほとんどであるが、石器も含まれており、少なくとも凹石(安山岩)3点、砥石(砂岩)1点、磨石(安山岩)8点を認めている。礫群は厚さ30cmほどの層状に堆積し、平面は環状に分布する(図版10-6・7)。直径40cmほどの中央に土層が堆積した空白部があり、全体の覆土断面から空白部は柱痕と判断された。したがって礫群は、柱の根固めの一部と推定される。埋設された柱の直径は、柱痕の直径に相当する40cmほどと見られる。

第2号土坑の残存する深さは1.35mであるが、第1号土坑、さらに第II層の堆積を勘案すれば、2m近くの掘り込みであったと考えられる。底面は長軸50cm・短軸40cmの楕円形で、ほぼ平坦である。第1号土坑底面から深さ95cmまでは略円筒形、以下は底面へとすぼまるが、その変換点付近に段を作った部分もある。調査の作業時の実感としては、当時も足掛けとして利用されたことが想像された。

分層した覆土のうち第16~31層は、第2号土坑という掘り方に柱を埋設した根固めの土層であり、第13~15層は、柱が埋設されていた部分に堆積した土層と判断し、第2~12層については、柱を抜去するための掘



第13図 縄文時代の土器(1)

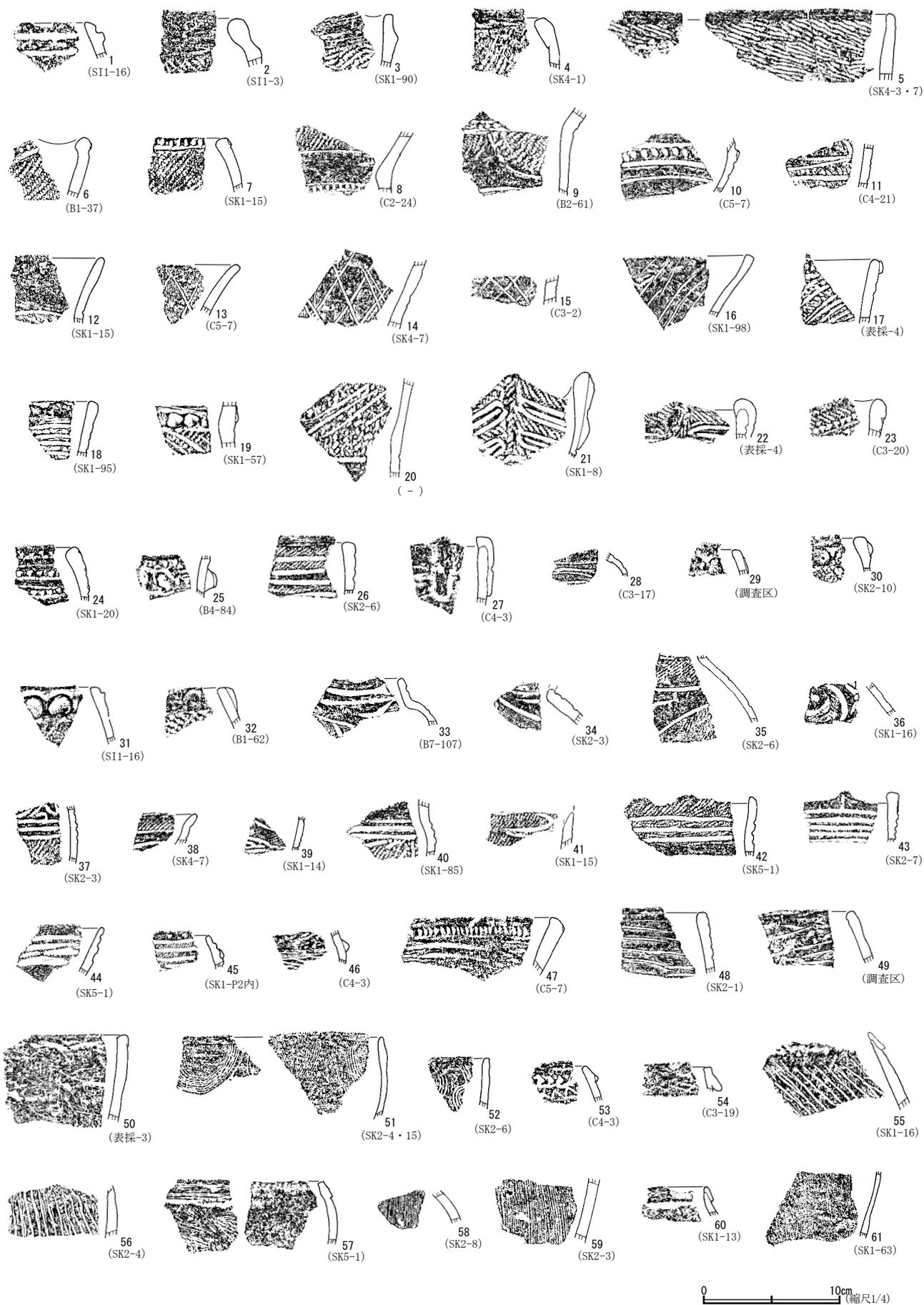
り込みに堆積した土層ではないかと考えられた。東西断面では西側への掘り込みが観察され、土坑西側に設定した南北断面には掘り込みの範囲が広く残されている。第1層は、また新たに割り込まれた小さな柱状の土坑の覆土であり、上位には第1号土坑の土器13が位置することから、これは、第1号土坑に伴うピットではなく、弥生時代中期以前の遺構と捉えられる。第31層としたのは、底壁面の傾斜変換点付近から底面にかけて、付着するように検出された黒色土層の範囲である。これは、柱の埋設以前に形成されている。この範囲の地山は、黄白色粘土層であり、壁面から湧出した水が滞水する範囲となる。このことに関連しそうではあるが、具体的には明らかにし得ない。

出土した土器はほとんどが細片であった。図示した13点の破片(第13図16, 第14図30・34・35・37・43・48・51・52・56・58・59)のうち、最も時期が下る晩期後葉「大洞A式」(第14図43)が土坑の時期に相当すると考えている。

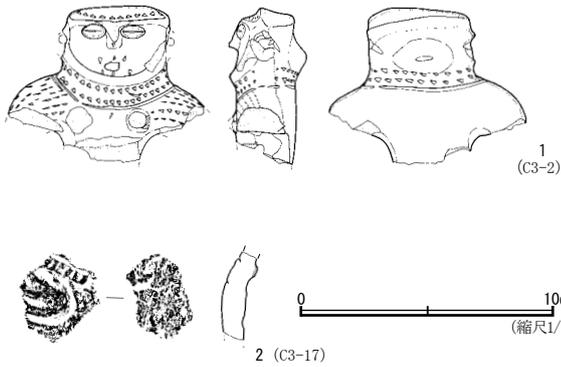
**第1号掘立柱建物跡** 第2号土坑に柱を埋めた痕跡が確認されたことにより、調査区内において柱の配置を検討してみると、C1・2区に検出された第4号土坑、A1区に検出された第5号土坑が、第2号土坑とともに四角形を描くような位置にある。もう1基の土坑が調査区外に位置することになり、試掘第2トレンチに掛かる

ことから、試掘の記録を見直してみると、そこには円形土坑の一部が記録されていたのであった(図版12-7 第1号土坑の一部がトレンチ東壁手前に露出し、第1号掘立柱建物跡の4基目の柱穴に相当する土坑の断面が北壁にかかる)。配列が延びて6本柱となる可能性もあるが、第2・4・5号土坑に埋設された柱で構築された建物を第1号掘立柱建物跡(SB1)として報告する。第4号土坑覆土の土器は6点(第13図10, 第14図4・5・14・38), 第5号土坑覆土の土器は4点(第13図5, 第14図42・44・57)を図示した。第4号土坑には晩期中葉-後葉(第13図10), 第5号土坑には晩期後葉「大洞A式」(第13図5, 第14図42・44・57)が含まれており、第2号土坑に推定した時期と矛盾しない。

第1号掘立柱建物跡の柱間距離は、南北(第2号-第4号)が4.0mほど、東西(第4号-第5号)が4.8mほど。泉坂下遺跡に検出された晩期中葉「大洞C2式」の第4号掘立柱建物跡は、柱間が6.0mほどであるから、これよりは小型である。掘立柱建物跡の参考に引用した福島県の宮畑遺跡(斎藤他2004)の1号掘立柱建物跡(第12図1)は晩期中葉以降のもので、柱間が3.7m・4.3mほど、高橋遺跡(猪狩他2019)の第4・6・9・10号大型柱穴配置(第12図2)は晩期前葉のもので、柱間が2.4m・3.1mほど。これらよりはやや大型である。高橋遺跡の第4・6・9・10号大型柱穴配置は、根固めとして礫を利用した類例でもある(第12図3)。また、日立市十王堂遺跡(清



第14図 縄文時代の土器(2)



第15図 縄文時代の土偶

水他2010)では、第363号土坑という大型柱穴の底面に、柱材の最下端部が残存していた(第12図4)。「径41.1～43.6cm」という大きさは、第2号土坑の柱痕からの推定値にほぼ一致する。この柱材は、「クリ」と同定されている。出土した土器からは縄文時代晩期後葉「大洞A式」の時期と考えられ、柱材を試料とした<sup>14</sup>C年代測定値は「2520±40BP」と報告されており、較正暦年代は「cal BC 775-554」である(鈴木編2021)。

**第3号土坑** 第3号土坑は、第1号土坑の底面に検出された3基の重複する土坑群であり、堆積覆土の観察により、3C→3B→3Aという新旧の順序が捉えられた。検出面での計測値は、いずれも直径40cmほどの略円形で、3C→3B→3Aの順序で深くなる。覆土の最上位からは、弥生時代の土器片が出土したが、これは後に第1号土坑に伴う遺物の落ち込みと判断された。出土した土器はほとんどが細片であった。図示した破片(第13図9)は、縄文時代晩期の注口土器と見られる。

**調査区出土の遺物** 遺構も含めて調査区内から出土した縄文時代の主要な土器を一括し、実測・拓影図(第13・14図)で掲載した。中期後葉「加曾利E2・3式」も僅かに出土したが、遺跡の主體的な時期は、後期中葉「加曾利B2・3式」から晩期後葉「大洞A式」までにある。1点のみではあるが、製塩土器の特徴を認めたものを含んでいる(第14図61)。

土偶は、後期中葉の山形土偶(第15図1)と晩期の中空土偶の破片(2)が1点ずつ出土した。

石器について網羅的な報告はできないが、久慈川流域の本覚遺跡(鈴木編2005)、泉坂下遺跡(鈴木編2011・2021)と比較できるよう、剥片石器の特に石鏃の石材について、カラー図版に掲載するとともに一覧表(第1表)を付

第1表 調査区出土石鏃等一覧表

図版番号	注記	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
図版10 6-1	A・B・C6-9	石匙	メノウ	55	32	16	26.2	
2	SK1-P5	石鏃	チャート	23	16	5	1.1	
図版11 1-1	表採-1	石鏃	チャート	14	11	3	0.3	
2	B2-61	石鏃	チャート	19	17	4	1.5	「泉坂下型」
3	B1-37	石鏃	チャート	20	15	5	1.6	
4	SK1-P4内	石鏃	チャート	15	14	3	0.6	水洗
5	SK1-32	石鏃	チャート	18	10	3	0.3	水洗
6	SK1-6	石鏃	チャート	22	12	5	0.9	水洗, 黒色付着物
7	SK1-7	石鏃	チャート	19	10	3	0.5	水洗
8	SK4-1	石鏃	チャート	21	14	3	0.7	
9	A6-10	石鏃	チャート	24	11	4	0.8	
10	SK1-38	石鏃	チャート	25	11	5	1.1	
11	C3-17	石鏃	チャート	29	17	6	2.1	黒色付着物
12	SK1-P1内	石鏃	チャート	21	13	4	0.8	水洗
13	SK1-5	石鏃	チャート	15	6	2	0.3	水洗
14	SK1-P1内	石鏃	チャート	17	9	4	0.6	水洗
15	表採-1	石鏃	メノウ	16	12	3	0.6	
16	B1-37	石鏃	メノウ	18	19	4	1.2	「泉坂下型」
17	調査区内-3	石鏃	メノウ	17	13	5	0.9	
18	B7-107	石鏃	メノウ	21	12	5	0.9	
19	調査区内-88	石鏃	メノウ	24	12	4	0.6	
20	SK1-138	石鏃	メノウ	31	10	6	1.6	
21	C3-2	石鏃	メノウ	19	11	4	0.6	
22	調査区内-1	石鏃	メノウ	28	13	5	1.3	
23	C2-18	石鏃	メノウ	21	10	3	0.6	
24	SK1-32	石鏃	メノウ	25	13	3	0.8	水洗
25	B4-6	石鏃	メノウ	23	12	4	0.9	
26	SI1-16	石鏃未成品か	メノウ	24	19	7	2.8	
27	SK2-21	石鏃	碧玉	27	12	4	1.0	水洗, 黒色付着物カ
28	SK2-4	石鏃	碧玉	24	18	4	1.4	
29	SK1-14	石鏃未成品	碧玉	24	21	8	4.3	
30	C4-21	石鏃未成品	碧玉	31	14	7	2.5	
31	SK1-5	石鏃	流紋岩	28	11	6	0.9	水洗
32	SK1-P4	石鏃未成品	流紋岩	27	19	9	2.4	
33	C3-2	石鏃	オパール	17	12	5	0.8	
—	SK1-P5内	石鏃	メノウ	10	11	4	0.4	水洗
—	調査区内-1	石鏃未成品	メノウ	33	25	7	4.9	
—	C1・2-63	石鏃未成品	メノウ	17	15	5	1.0	
—	SK1-P1内	石鏃未成品か	チャート	21	15	4	1.5	水洗

\*計測・計量値は、残存する最大値。「長さ・幅・厚さ」の単位はmm、「重さ」の単位はg。  
\*石材は田切美智雄氏の鑑定による。

した。石製品は、長さ10mmの小さな垂飾が1点検出された(図版12-2-3)。

骨角器では、弭形製品が1点検出された(図版12-2-4)。水洗選別を実施したことにより、動・植物遺存体の細片も多数が検出されている(今回は未報告)。

参考文献

猪狩みち子他 2019『竜田駅東側開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告 高橋遺跡(第1次調査) —縄文時代後・晩期と奈良・平安時代の集落跡の調査—』(第19集) 檜葉町教育委員会  
 斎藤義弘他 2004『宮畑遺跡 —確認調査報告書—』(第173集) 福島市教育委員会  
 清水 哲他 2010『十王堂遺跡 —主要地方道日立笠間線改良工事地内埋蔵文化財調査報告書—』(第332集) 茨城県教育財団  
 鈴木素行編 2005『本覚遺跡の研究 —関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について—』(私家版)  
 鈴木素行編 2011『泉坂下遺跡の研究 —人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について—』(私家版)  
 鈴木素行編 2021『泉坂下遺跡Ⅶ —保存整備事業に伴う第6次確認調査報告—』(第35集) 常陸大宮市教育委員会

## 5 奈良・平安時代の遺構と遺物

宿尻遺跡において奈良・平安時代の竪穴住居跡が3基確認されたが、いずれの住居跡も住居跡の一部を確認したにとどまる。以下、住居廃絶時期の推定を中心に簡単な報告を行う。

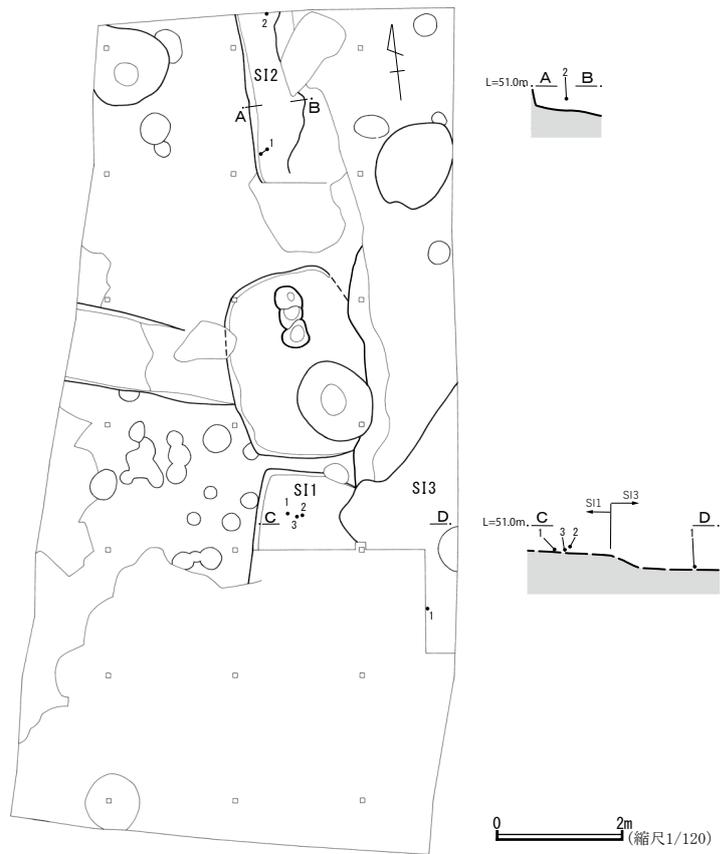
**第1号住居跡** 第1号住居跡は住居跡北西部隅の確認である。出土した木葉下窯産須恵器杯(1・2)は、体部が大きく開く形状や底径からみて9世紀前半に位置づけられる(佐々木1995)。おそらく住居跡の廃絶もその頃に求められるのであろう。土師器甕(3)は口縁部のみが残存であるため、年代的な位置づけが難しいが、須恵器杯と同じ9世紀前半頃でも問題ない形状である。なお須恵器杯(2)の体部外面に刻線の一部が認められたが、文字か記号かは判別できなかった。

**第2号住居跡** 第2号住居跡は住居跡南西部のみの確認である。出土した須恵器有台杯蓋(1)の存続期間は8世紀後半から9世紀前半頃に位置づけられる(佐々木2013)ことから、およその住居廃絶時期を知ることができる。覆土出土の須恵器短頸壺蓋(2)もその頃の遺物とみてよいと思われる(佐々木2016)。

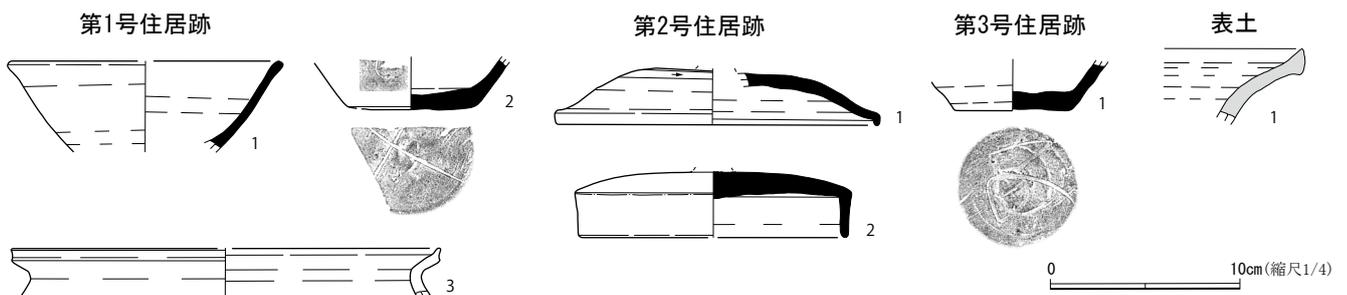
**第3号住居跡** 第3号住居跡は北壁の竈付近の確認である。第1号住居跡の床を第3号住居跡の竈が壊していたため、住居跡の新旧は、第1号住居跡→第3号住居跡となる。出土した木葉下窯産須恵器杯(1)は底径から9世紀中葉頃と思われ、その頃に住居跡が廃絶したのであろう。

**表土出土遺物** このほか表土から出土した遺物に、10世紀頃に位置づけられる東濃産灰釉広口長頸瓶<sup>註1</sup>の口縁部破片がみられた。当該期の集落が周辺に存在する可能性が考えられる。

今回の調査により宿尻遺跡周辺において8世紀後半から9世紀後半頃にかけて集落が営まれていたことが確認できた。現在のところ宿尻遺跡周辺において奈良・平安時代の住居跡調査事例はなく、今回の資料は貴重な事例といえよう。



第16図 奈良・平安時代の住居跡



第17図 奈良・平安時代の出土遺物

## 註記

1 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団立原遼平氏の御教示による。

## 文献

佐々木義則 1995「木葉下窯跡群産杯 A I の変化について」『婆良岐考古』第17号, 婆良岐考古同人会

佐々木義則 2013「木葉下窯跡群産須恵器有台杯・有台杯蓋・有台盤の編年」『婆良岐考古』第35号, 婆良岐考古同人会

佐々木義則 2016「館出支群 I 区第35号墓出土の土器」『十五郎穴横穴墓群』ひたちなか市教育委員会ほか

## 奈良・平安時代遺物説明

### 第 1 号住居跡

1 注記:SKZ-SI1-11 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部20% 法量:推定口径14.0cm 色調:灰色 胎土:礫(灰, 白) 技法等:口縁部内面摩滅 備考:木葉下窯産か

2 注記:SKZ-SI1-6 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部40% 法量:推定底径6.6cm 色調:灰色 胎土:礫(白多, 白透少, 灰少) 技法等:回転ヘラ切り後ナデ。底部外面ヘラ記号。体部外面ヘラ記号の一部か。 備考:木葉下窯産か

3 注記:SKZ-SI1-9 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:推定口径22.4cm 色調:橙色 胎土:砂(透多, 白少) 技法等:口縁部ヨコナデ

### 第 2 号住居跡

1 注記:SKZ-SI2-2, 3 材質:須恵器 器種:有台杯蓋 残存:体部70%(鈕欠失) 法量:口径16.7cm 色調:灰色 胎土:礫(白少, 灰少, 白透少), 骨針微量含む 技法等:天井部外面回転ヘラ削り。内外面重ね焼き痕(有台杯正位+蓋逆位)。 備考:木葉下窯産か

2 注記:SKZ-SI2-6 材質:須恵器 器種:短頸壺蓋 残存:40%(鈕欠失, 口縁部10%) 法量:推定口径13.8cm 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰少) 技法等:鈕接合部に渦巻き状の沈線を施す。天井部外面に厚く降灰(白褐色, 一部緑色)。内面重ね焼き痕(短頸壺にのせて焼成したか?)。 備考:木葉下窯産か

### 第 3 号住居跡

1 注記:SKZ-SI3-3 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部 法量:底径6.0cm 色調:灰色 胎土:礫(白透, 灰少), 骨針少量含む 技法等:回転ヘラ切り。底部外面ヘラ文字「子」。 備考:木葉下窯産か

## 表土

1 注記:SKZ-C2-25 材質:灰釉陶器 器種:広口長頸瓶 残存:口縁部片 法量:— 色調:素地明灰褐色。淡い緑色釉が外面に厚く内面に薄くかかる。 胎土:— 技法等:— 備考:東濃産, 10世紀

(佐々木義則)

### Ⅲ 再葬墓の調査

#### 1 第1号土坑

今回の発掘調査で検出された再葬墓は、第1号土坑の1基のみである。第1号土坑を中心に設定した略6m×13mの調査区及び試掘調査のトレンチから、同時代の遺構は検出されていない。調査区内は南側1/3ほどが攪乱を受けているものの、同時代の遺物は第1号土坑を中心とした狭い範囲に分布する。少なくとも、泉坂下遺跡や小野天神前遺跡のように再葬墓が群在することは考え難い状況であった。

第1号土坑の範囲は、今市・七本桜スコリアの上面で確認した。南北は3.0m、東西は有段状の第1号遺構が重複する部分までが2.2m。隅丸長方形の平面形態に見えたことから、住居跡など竪穴遺構が再葬墓に転用された可能性も考慮して調査を進めたが、第1号土坑に炉・柱穴・底面硬化などは認められなかった。北側の確認面には、基本土層の第Ⅱ層に相当する黒褐色土が堆積していた。覆土との境界が明瞭ではない部分もあり、土坑の北側限界については、南北セクションのベルトに沿ってサブトレンチを設定し、断面で観察した。第1号遺構の覆土から出土した土器も含めて検討してみると、破壊された部分にも3個体ほどの土器が埋設されていたと考えられ、東西は少なくとも2.8mほどあったと見積ることができる。その場合、土坑の平面形態は、隅丸三角形あるいは倒卵形であったと想定される。残存する壁高は、最大で18cmほど、立ち上がりの角度は30～70°と幅がある。(第18図)

#### 2 覆土の堆積

覆土は基本的に、暗褐色土の単一層として捉えたが、今市・七本桜スコリアを主体とするロームのブロック及び粒子が混じり、ブロックが多量の部分も見られた。粘土ブロックも混じることが観察され、その由来が疑問であったが、後に第2号土坑が粘土層を掘り込んで構築されていることが判明し、これにより掘り上げられた粘土と考えられた。

第1号土坑の底面の大部分には、今市スコリア層(第Ⅳ層)が露出している。この土坑が掘り込まれた地表面

は、基本土層の第Ⅱa層と考えられることから、第Ⅱ・Ⅲ層を掘削して第Ⅳ層に到達する。確認面からは、30cmほどの厚さであろうか。ここには、北側に谷地形が埋没し、第Ⅱ層相当の黒褐色土が厚く堆積して土坑底面の北側にもその一部が露出する。さらに、重複する第2・3号土坑により、第Ⅲ・Ⅳ層の一部は既に掘削され、第1号土坑はその覆土を掘り込んでいる。したがって、第1号土坑の掘削で掘り上げられた土壌の主体は第Ⅱ層の黒褐色土であり、これに僅かな第Ⅲ層と、今市・七本桜スコリアの第Ⅳ層が混じるような分量であったと推定される。第1号土坑に埋置された土器群を覆う土壌は、これらが混じり合っただけでは暗褐色と捉えられ、ブロックのロームが含まれることから、掘削後それほど長い時間を空けずに埋め戻されたことが考えられる。

#### 3 遺物の出土状況

現地を確認された土器は、土器1～15の15個体であった。中央には埋置されず、土器群は略馬蹄形に並んでいた。土坑との関係は、北側がほぼ壁際までに対して、西側と南側では壁から離れて分布する。特に西壁からは50cmほど内側に位置する。土器の姿勢は14個体が横位(倒位)、土器8のみ逆位に設置されている。横位の土器は、口縁を土坑中央に向けた個体が多く、壁側を向くのは土器9・14の隣接した2個体である。設置した前後関係が明確に捉えられたのは、土器15→土器2、土器11→土器12で、どちらも小型の胴下部に中型の口頸部がのる。

土器の形状が完全に保存されていた個体はなく、いずれも壊れた状態で出土した。試掘及び表土除去に伴う欠損、第1号遺構の掘削に伴う欠損もあるが、ほとんどは土圧等により潰れたと見られる。土器10・12・13などは、土器内に土壌がほとんど流入していない段階で潰れており、特に土器12・13は、第2号土坑覆土部分の沈下もあって、全体的に保存状態が良い。土器5・7・15などは、設置された下側が潰れたものの、上側のアーチは土圧を支えて残存したことが想定される。

整理時に抽出された土器16～17については、土器

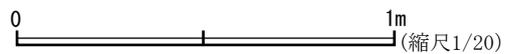


第1号土坑堆積覆土

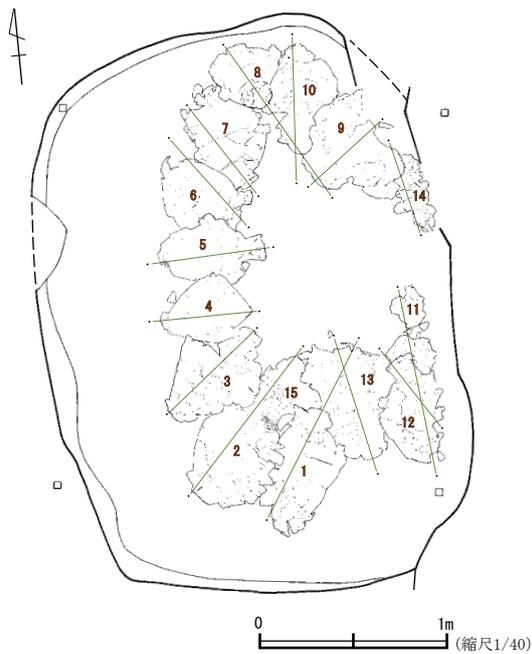
第1層：暗褐色土層（ローム粒を多量に含み、0.5 cmほどのロームブロック

がやや多く、3~5 cmのロームブロック・粘土ブロックも稀に含む  
 締まり有り 粘性やや有り）

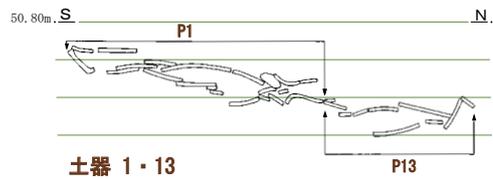
第2層：褐色土層（ローム粒を多量に含み、0.5 cmほどのロームブロックを  
 極めて多量に含む 締まり有り 粘性やや有り）



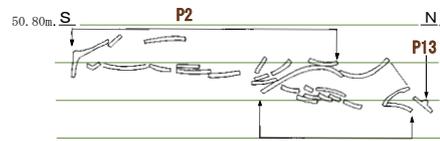
第18図 第1号土坑実測図(1)



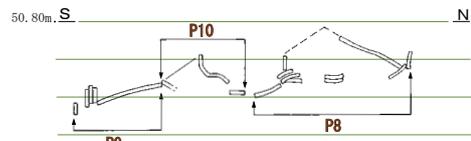
土器番号とエレベーションのライン



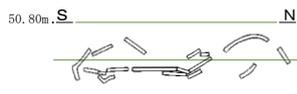
土器 1・13



土器 2・13・15



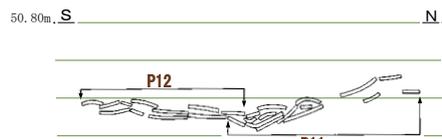
土器 8・9・10



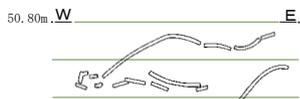
土器 3



土器 4



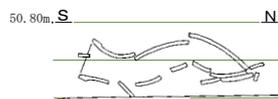
土器 11・12



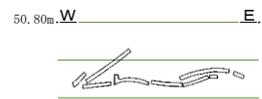
土器 5



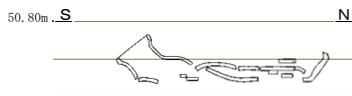
土器 6



土器 7



土器 9



土器 10



土器 12



土器 13



土器 14



有段部(SX1)堆積覆土

a層: 褐色土層 (ローム粒を含む 締まり有り 粘性やや有り)

b層: 褐色土層 (暗褐色土がシミ状に混じる 締まり有り 粘性やや有り)

c層: 暗褐色土とロームブロックの混合層 (締まり有り 粘性やや有り)

第19図 第1号土坑実測図(2)

16の破片が第1号土坑Ⅲ区（北東区）で出土していることから北寄り、土器17の破片が土器11に混在することから南寄りに埋設されていたことを想定できるが、確実ではない。本来は土器18までが第1号土坑に埋設されていたとすれば、合計で18個体の壺形土器で構成されていたと考えられる。土器19の深鉢形土器は、第1号土坑の覆土中に破片が散在して埋設されていた痕跡が認められず、土器群の中央部から破片が検出されていることは、破碎された管玉の出土状況に共通する。

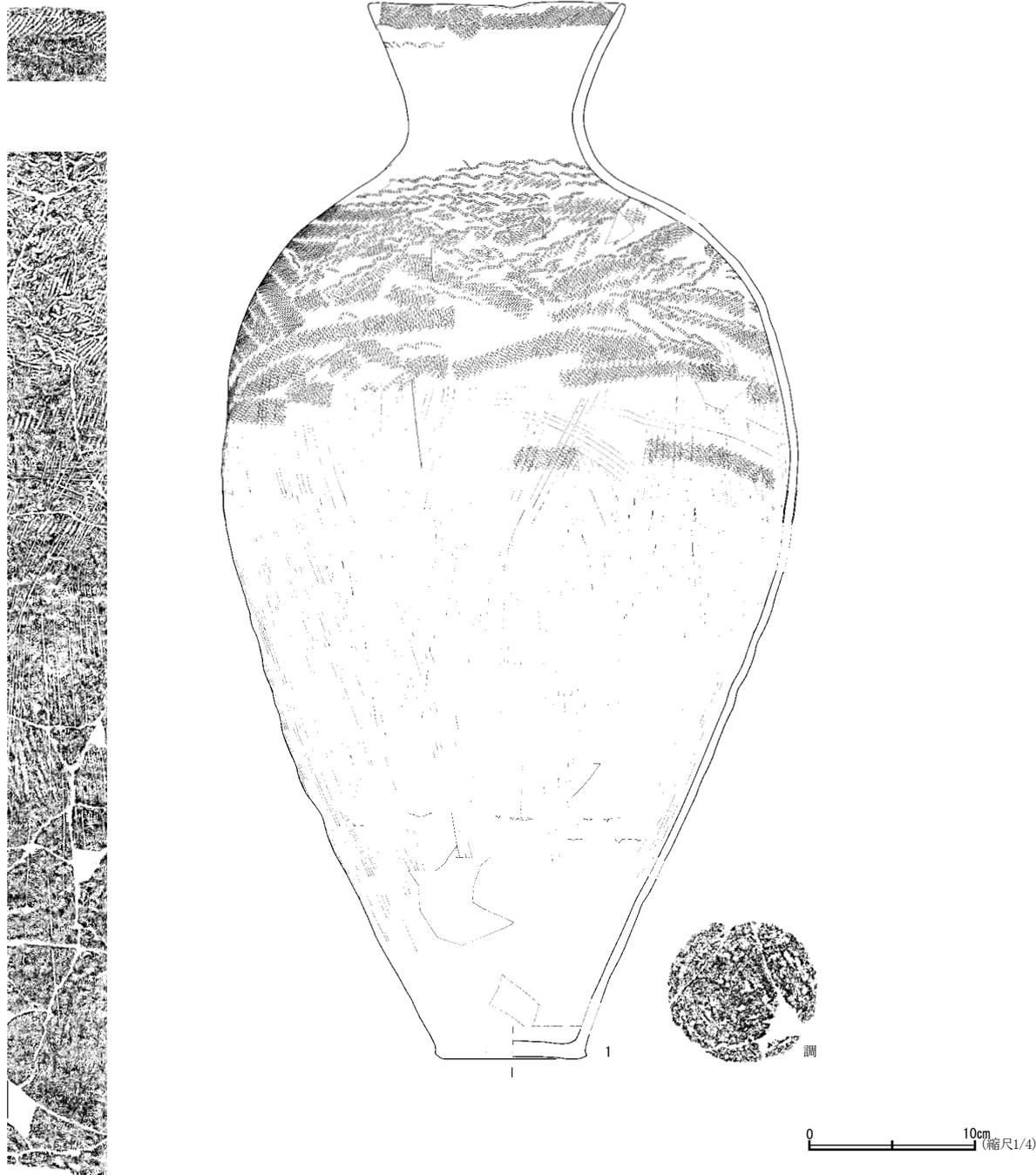
土器群の他には、破碎された管玉群が中央部を中心に分布し、小玉も出土している。この中央部からは、メノウ礫（図版3-4, 10-3）も出土した。また、土器9内からはサメ歯1点が検出された。縄文時代の遺物も出土しており、主要な土器、石鏃等は別に報告してある。なお、第1号土坑では、セクションベルトを境界として南西区から時計回りにⅠ～Ⅳ区として区ごとに一括で取り上げた遺物もある。土器内土壌とともに、覆土も全て区ごとに採取して水洗選別を実施した。特に石鏃が多く検出されたのは、この水洗選別によると考えられる。

#### 4 土器

**土器1**（第20図） 土器1として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器2に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。別番号には、第2号土坑として取り上げた破片、試掘第2トレンチから出土した破片も含まれている。土器1の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北を向く。大型の壺形土器であり、計測値は器高645mm、口縁が長軸159mm・短軸145mmの楕円形（残存率68%）、頸径106mm（残存率94%）、胴径348mm（残存率95%）、底径87mm（残存率100%）。大型であるのに器壁が薄く、底径が小さいことが特徴的である。口唇内側の小さな剥離は、破断面の一部に摩擦が認められることから、埋設以前の欠損の可能性がある。平口縁で、複合口縁に見える部分も僅かにあるが、頸部との段差が調整により消失し、肥厚した単純口縁となっている。口縁部には、単節斜縄文LRが施され、施文が頸部にはみ出した部分、縄文に伴い結節文が頸部に印刻された部分もある。頸部は縦位の撫で～磨き調整。胴上部には単節斜縄文LRと結節文が、上位と下位には横方向、中位には右下り・左下りの斜方向に施文されて

いる。胴下部は、縦位の条痕文が段階的に施され、下位から上位へ向かう施文順序が捉えられた。胴部の最大径部分には横位・斜位の条痕文もあり、これは縦位の条痕より前の施文。また、最上位の縦位の条痕は、縄文より後の施文であることが明瞭に観察された。条痕は櫛歯状工具による条線状。条痕の施文は全体的に疎であり、器面は施文以前に撫で調整されている。底部から15cmほどの器外面には、成形の積上げ痕が僅かに残る。底面は撫で調整であり、木葉痕でないことも特徴的である。器内面は撫で調整されているが、全体的に成形の積上げ痕が残る。胎土に細かな銀（白）雲母を多量に含む。焼成は良い。色調は、器内外面とも全体的に淡褐色を呈する。炭化物の付着は認められないが、器内面には斑状の暗褐色部分が見られる。

**土器2**（第21図） 土器2として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器1に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。別番号には、第2号土坑として取り上げた破片、試掘第2トレンチから出土した破片も含まれている。土器2の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北東を向き、口頸部は土器15の胴部にのる。大型の壺形土器であり、計測値は器高652mm、口径152mm（残存率83%）、頸径124mm（残存率92%）、胴径386mm（残存率66%）、底径91mm（残存率81%）。平口縁で複合口縁。口唇部の欠損は新しい。口唇部と口縁部には単節斜縄文LRが施されている。複合口縁下は撫で調整で凹線状に窪んでおり、これによりほとんどが有段状となる。頸部はやや膨らみ、瓢状と表現し得る。頸上部には沈線区画による磨消縄文で4単位の文様が、頸下部には篋状工具による沈線で格子状文が構成されている。胴部との境界には、半截竹管の内側で刺し切るように施文された刺突列が巡る。胴部には貝殻条痕状の条痕文が全体に横位、右下り斜位で施されて、胴下部には部分的に縦位の撫で調整が見られる。実測図右側面の肩部には、線描の一部が残されていた。底面痕跡は木葉痕で、カシワ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、肩部に成形の積上げ痕を僅かに残し、胴下部の一部に条痕文が見られるが、全体的には撫で調整されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は淡・暗・黒褐色と均一ではない。器内面の胴下部に炭化物が付着し、器外面の胴下部には雨垂れ状の変色部分

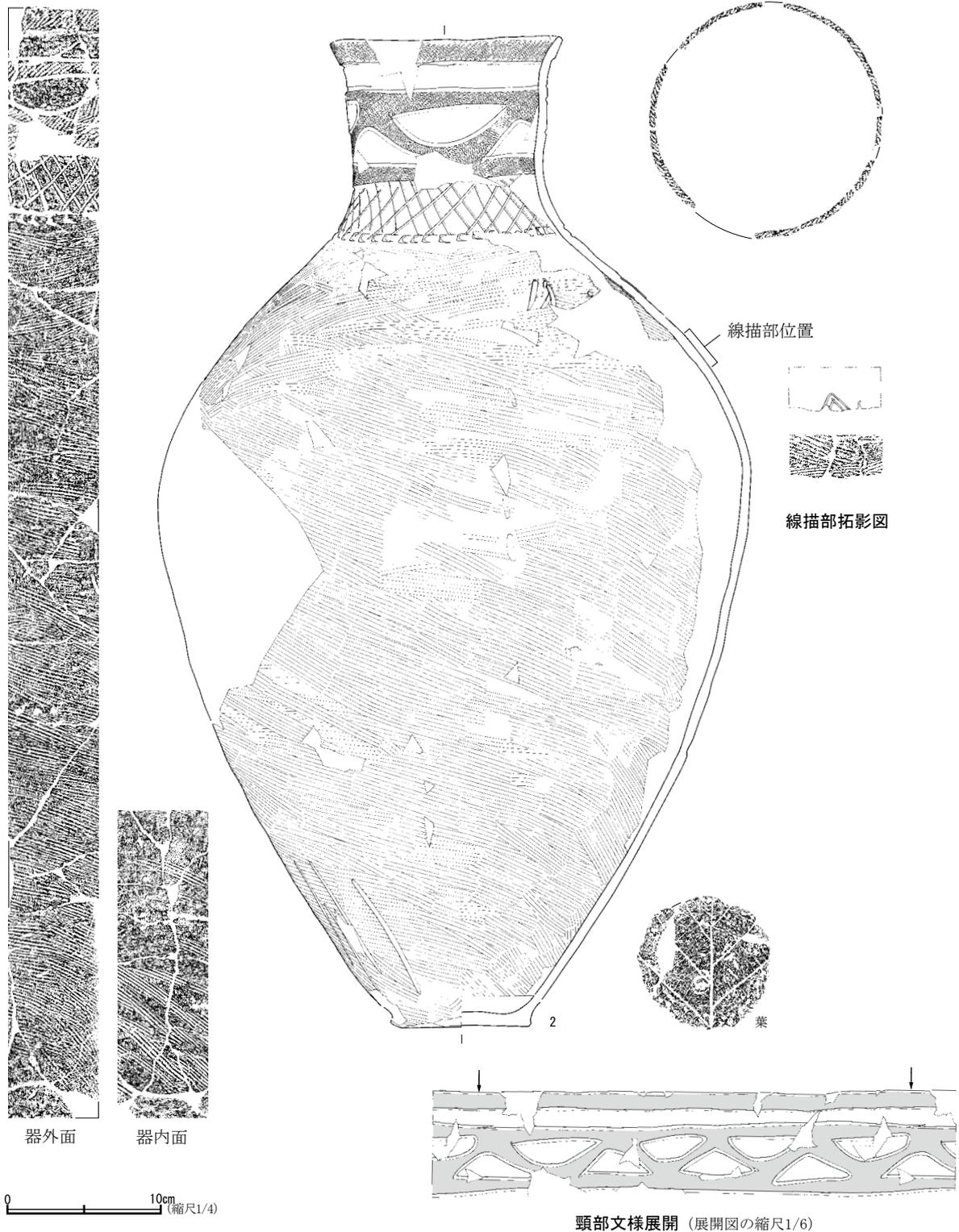


第20図 第1号土坑出土遺物(1) — 土器1 —

が見られる。

**土器3** (第22図) 土器3として取り上げた大部分の破片に、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。別番号には、試掘第2トレンチから出土した破片も含まれている。土器3の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北東を向く。中型の壺形土器であり、計測値は器高540mm、口径112mm (残存率17%)、頸径82mm (残存率51%)、胴径334mm (残存率67%)、底径102mm (残存率73%)。平口縁で有段の複合口縁。口縁部には単節斜縄文LRが施されている。この破断面の一部には

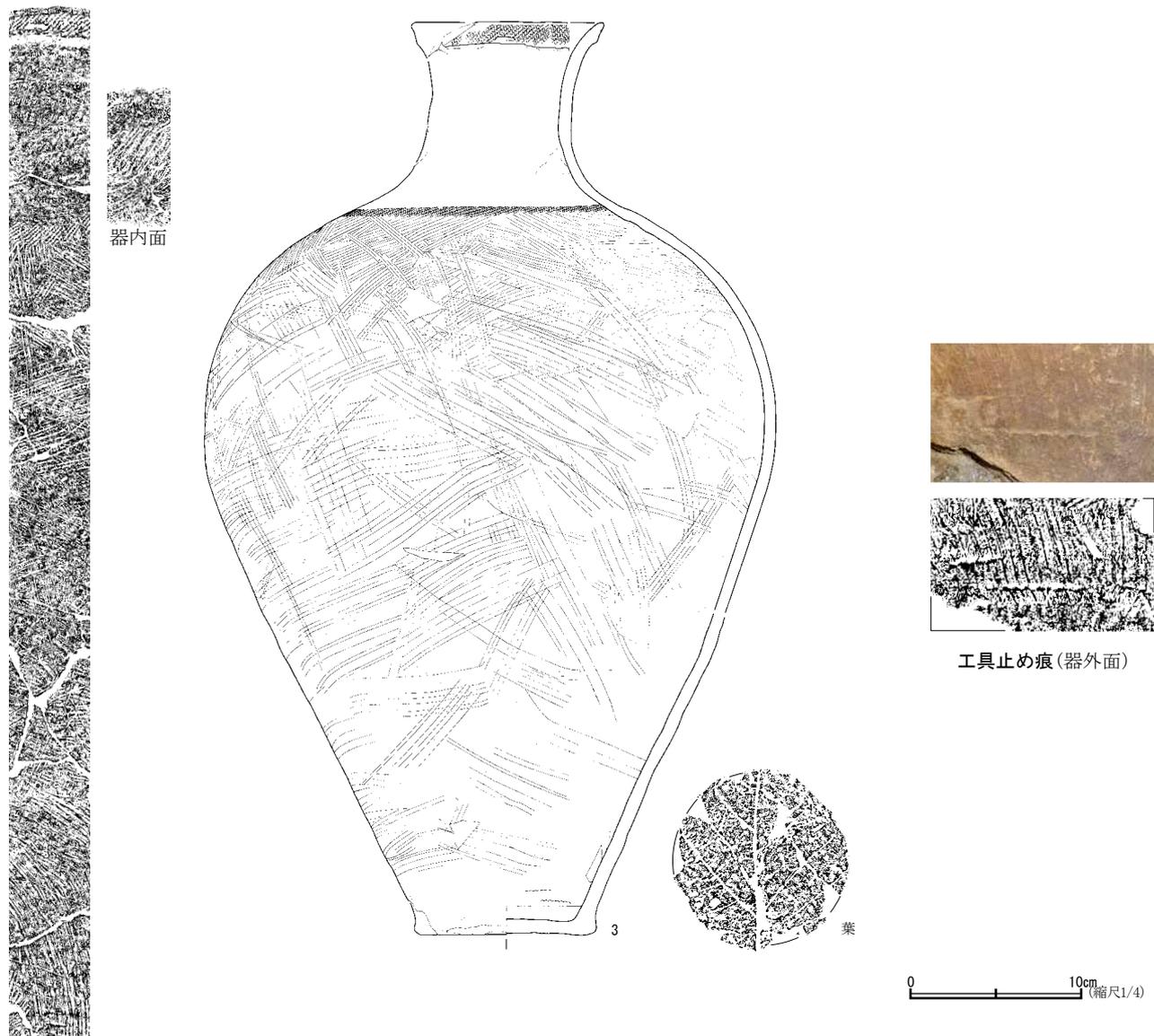
摩滅が認められることから、埋設以前の欠損の可能性がある。頸部は縦位の撫で～磨き調整で、胴部との境界付近がやや窪む。胴部には、全体的に整った刷毛目状の条痕文が施されていたが、胴上部は撫で消されている。底部付近には条痕文が明瞭であり、工具止め痕も残されている。胴上部には、櫛歯状工具による条線状の不整な条痕文が右下り・左下りの斜位に施文され、格子状文のように見える部分もある。頸部との境界には、単節斜縄文LRが施されている。底面の突出部の欠損は摩滅しており、埋設以前のものと見られる。底面痕跡は木葉痕で、



第21図 第1号土坑出土遺物(2) — 土器2 —

カシワ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、頸部に不整な条痕文、肩部に成形の積上げ痕を僅かに残し、全体が撫で調整されている。胎土には、石英礫と金（黒）雲母を含む。焼成は良い。色調は器外面の上部が褐色、下部が暗褐～灰褐色、器内面が明るい褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

**土器4** (第23図) 土器4として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器3に混在した破片が接合し、頸部から底部までが復元された。破断面は摩滅しておらず、口縁部から実測図裏面に相当する胴部までは、重機により破壊されたと見られる。土器4の出土状況は横位で、中心軸は口縁が東を向く。壺形土器であり、器高は明

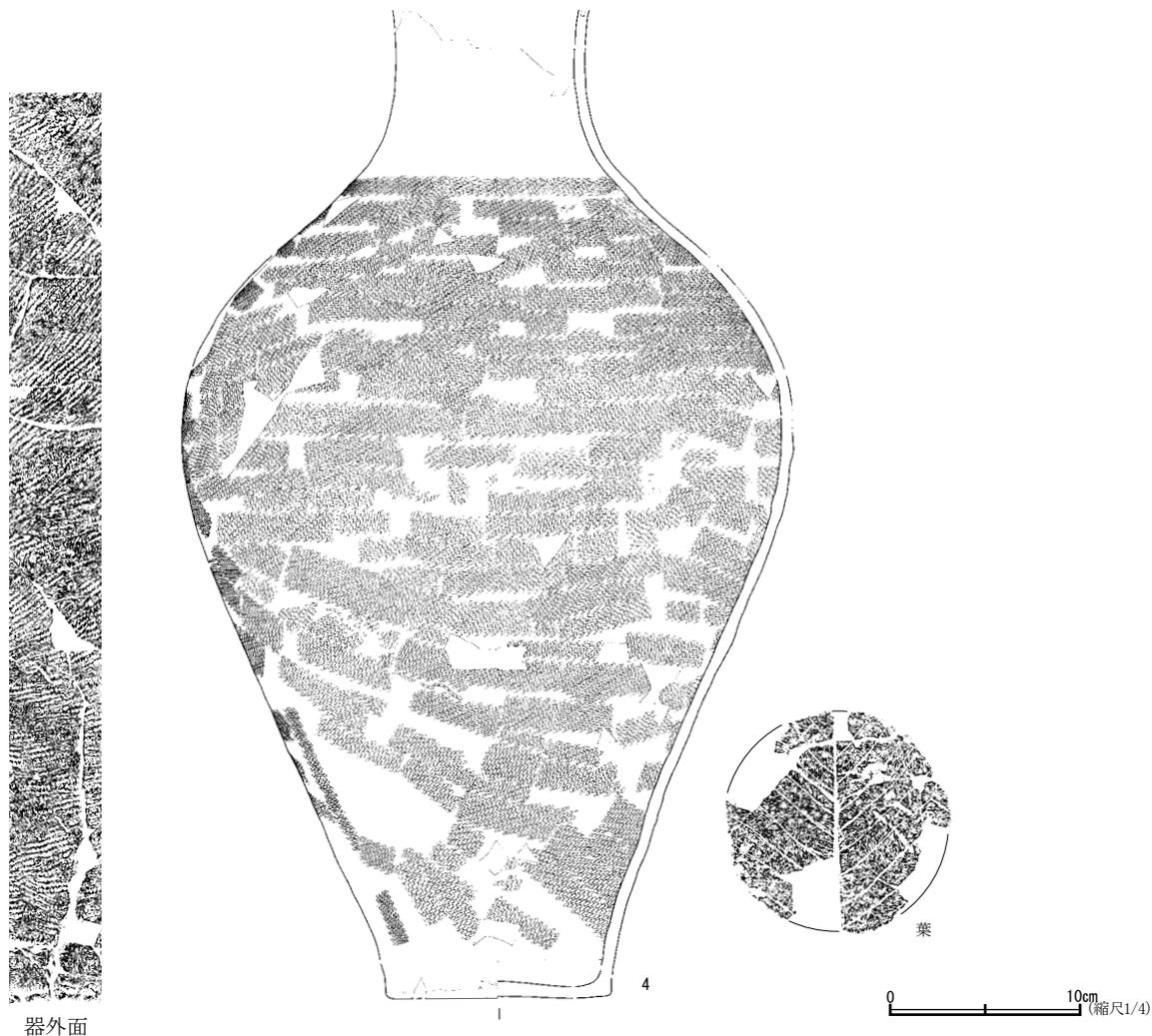


第22図 第1号土坑出土遺物(3) — 土器3—

らかでないが、胴部の法量が土器5にほぼ等しく、確実に中型である。計測値は残存高525mm、頸径100mm(残存率35%)、胴径323mm(残存率57%)、底径119mm(残存率60%)。頸部は横位の撫で調整。胴部には単節斜縄文LRが施されている。施文方向はほとんどが横位で、頸部と境界には原体末端までが押捺され、胴下部には部分的に結節文も見られる。胴部最大径付近には、縄文の施文前に横位の条痕文が施されていたように観察された。縄文は撫で消された部分もあり、底部付近は篋状工具により撫で調整されて工具止め痕も残る。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、全体が撫で調整、特に口縁部付近は磨き状に調整されている。部分的に発泡状の剥落が生じている。胎土には、細かな金雲母を僅かに含み、赤色粒子が目立つ。焼成は

良い。色調は暗褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

**土器5**(第24図) 土器5として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器6に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。土器5の出土状況は横位で、中心軸は口縁が東を向く。中型の壺形土器であり、計測値は器高560mm、口径130mm(残存率55%)、頸径100mm(残存率100%)、胴径317mm(残存率91%)、底径94mm(残存率63%)。平口縁で複合口縁。口唇部の内外面には小さな剥離があり、これは埋設以前のものと思われる。口縁部には、単節斜縄文LRが施されている。複合口縁下は撫で調整で凹線状に窪んでおり、これにより有段状となる部分もあるが、頸部に被さるように積上げられた成形痕が残る。頸部はやや膨らみ、瓢

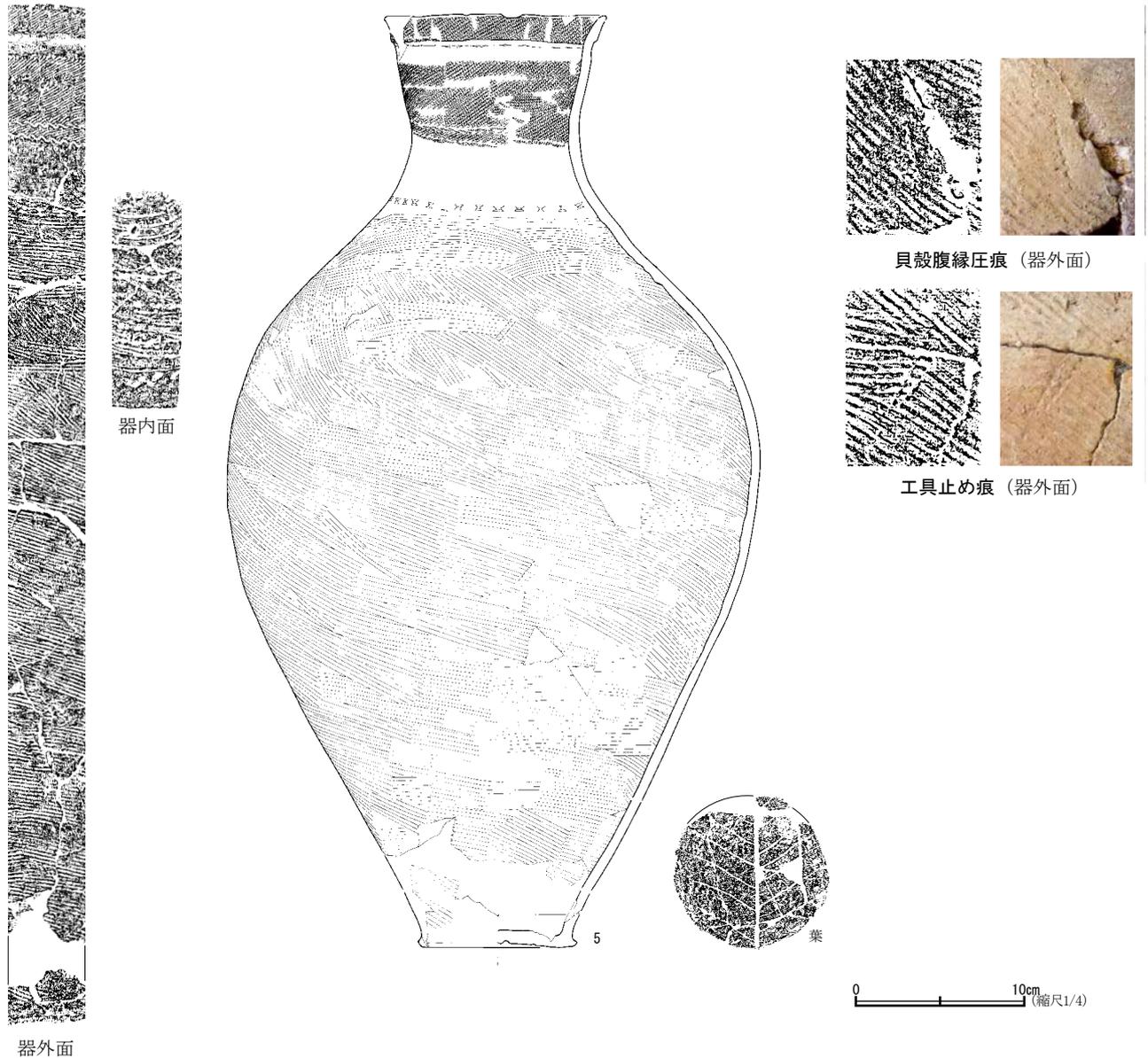


第23図 第1号土坑出土遺物(4) — 土器4—

状と表現し得る。頸上部には単節斜縄文LRと結節文が施され、頸下部は撫で～磨き調整により無文。胴部との境界には、半截竹管の内側で刺し切るように施文された刺突列が巡る。胴部全体に横位、右下り斜位の条痕文が施され、工具止め痕など腹縁圧痕の形状から、これはアカガイ属貝殻による条痕文である。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、肩部に成形の積上げ痕を僅かに残し、頸下部から肩部、胴下部の一部に条痕文が見られるが、全体的には撫で調整されている。底部とその付近には剥落が見られる。胎土には、銀(白)雲母と赤色粒子が目立つ。焼成は良い。色調は淡褐色、部分的に暗褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。器外面に種子状の圧痕1カ所を見出した。

**土器6** (第25図) 土器6として取り上げた大部分の破片に、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。別番号には、第3号土坑として取り

上げた破片も含まれている。土器6の出土状況は横位で、中心軸は口縁が南東を向く。中型の壺形土器であり、計測値は器高516mm、口径133mm(残存率74%)、頸径100mm(残存率95%)、胴径356mm(残存率87%)、底径100mm(残存率95%)。平口縁。有段の複合口縁に見える部分もあるが、ほとんどは調整により肥厚した単純口縁のようである。口唇部は平坦で、口縁部とともに偽縄文が施されている。偽縄文は、オオバコのような植物の花穂を原体として回転させたものと見られる。胴部には刷毛目状の条痕文が施され、胴下部は右下りと左下りの斜位、最大径付近は横位～右下りの斜位、胴上部は縦位～右下りの斜位と方向を変えている。頸部との境界には口縁部と同じ偽縄文が、条痕文を撫で消した後に施文されている。さらに、偽縄文の施文後、全体ではなく実測面に集中して、棒状工具による太い沈線も縦位～右下りの斜位に施されている。底面痕跡は木葉痕で、2葉の圧痕(葉a・b)が観察される。上に重ねられた葉bの葉縁が残されて



第24図 第1号土坑出土遺物(5) — 土器5—

おり、葉aの葉脈及び葉bの葉縁から、これらはヤブマオ、メヤブマオの葉に類似する。ヤブマオ、メヤブマオの葉は薄いことから、2葉重ねで利用された可能性が指摘されている(小幡和男氏の御教示による)。器内面は、肩部に成形の積上げ痕を残し、全体的には撫で調整されるが、胴部最大径付近のみ横位に条痕文が施されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は淡～暗褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められないが、器内面の胴中～下部に斑状の淡暗褐色部分が見られる。

**土器7**(第26図) 土器7として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器8に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。別

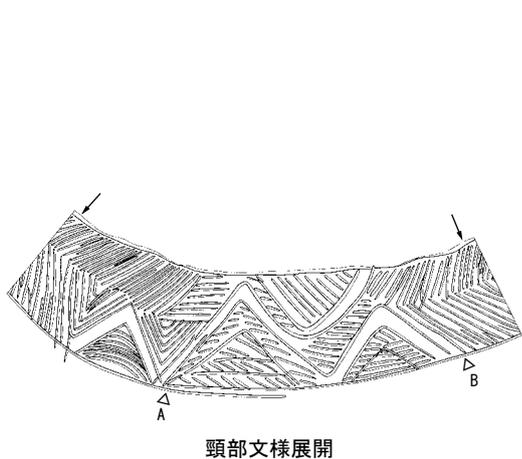
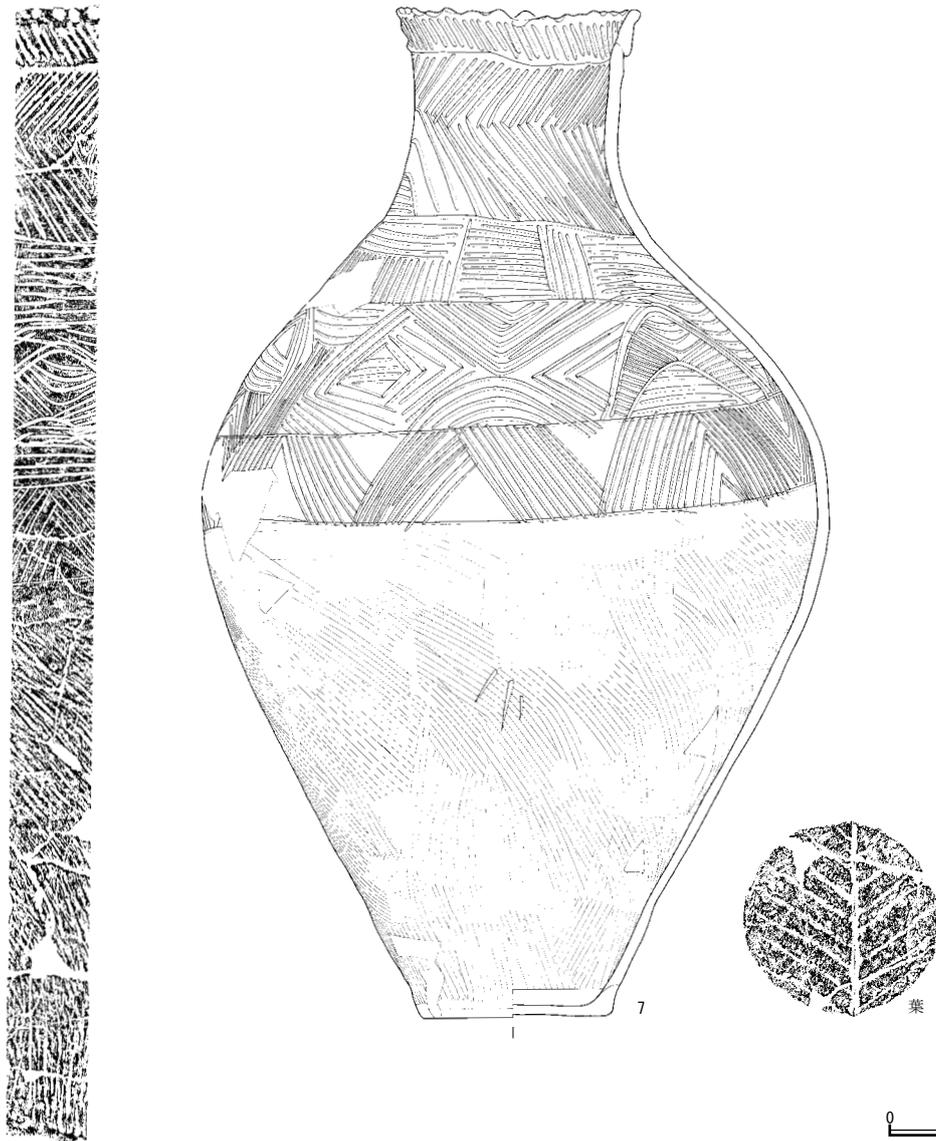
番号には、第3号土坑として取り上げた破片も含まれている。土器7の出土状況は横位で、中心軸は口縁が南東を向く。中型の壺形土器であり、計測値は器高536mm、口径129mm(残存率92%)、頸径108mm(残存率100%)、胴径333mm(残存率91%)、底径104mm(残存率97%)。口唇部が小刻みに押圧されて、口縁は微波状を呈する。複合口縁は、頸部に被さるように積上げられた成形痕を残す。この口縁部から頸部、胴上部には、棒状工具による沈線で文様が構成される。胴上部は横区画の3段を基本とするが、中段をさらに横区画した部分もあり、下段は施文が全周しない。区画内には、縦・横・斜めの直状と弧状を組合わせて文様が充填される。沈線文の形象と全体的な構成については、文様展開図を参照されたい。沈線文様



第25図 第1号土坑出土遺物(6) — 土器6 —

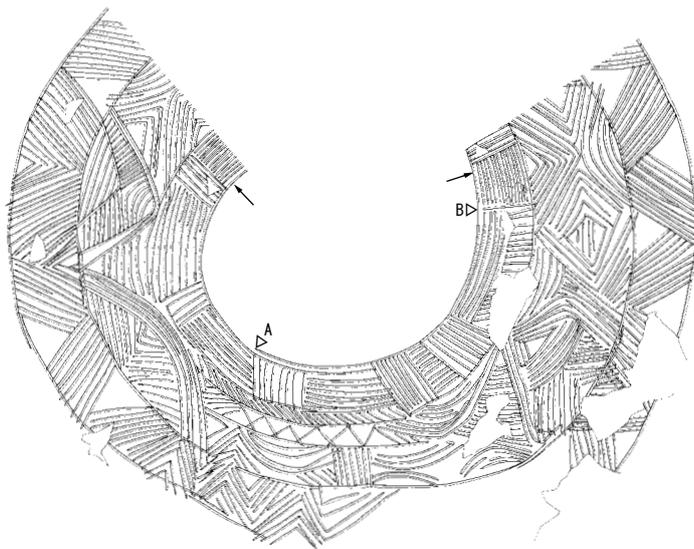
は、条痕文を撫で消した部分に施文されており、胴下部から連続する条痕文は、少なくとも胴部の全体に施されていたと見られる。下位から上位へ向かう順序が捉えられ、底部付近は縦位、胴下部は斜位、胴部の最大径部分は横位である。底部付近は整った刷毛目状であるが、胴部は不整な刷毛目状。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、肩部に成形の積上げ痕を僅かに残し、全体が撫で調整されている。特に口縁部付近は磨き状に調整されている。胎土には、石英礫や骨針、金・銀雲母などの特徴的な含有物は認められず、むしろ第1号土坑の土器群の中では、これが土器7の特徴である。焼成は良い。色調は淡褐色、部分的に暗褐色を呈する。胴部最大径から下へ幅15cmほどの器外面に炭化物の付着が認められる。器外面に種子状の圧痕1カ所を見出した。

**土器8** (第27図) 土器8として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器7・10に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、胴部から底部までが復元された。土器8の出土状況は、底面を上に向けた逆位である。口頸部の破片は残されておらず、この状態で埋設されたと考えられる。上端の破断面に摩滅や調整は見られない。壺形土器であり、胴部と頸部の境界までの高さが370mmほどで、これは土器10とほぼ等しいことから、小型と推定される。計測値は残存高368mm、胴径287mm (残存率88%)、底径107mm (残存率48%)。上端を擬口縁とすれば、その直径は130mm (残存率80%)である。胴部は条痕文で、頸部付近に撫で消しが見られることから、頸部は無文と推定される。また、胴部最大径付近の条痕文が25~30mm幅で全周して撫で消され、ここが僅かに窪む部分もある。胴下部から底部付近には刷毛目状が縦位に、胴上部



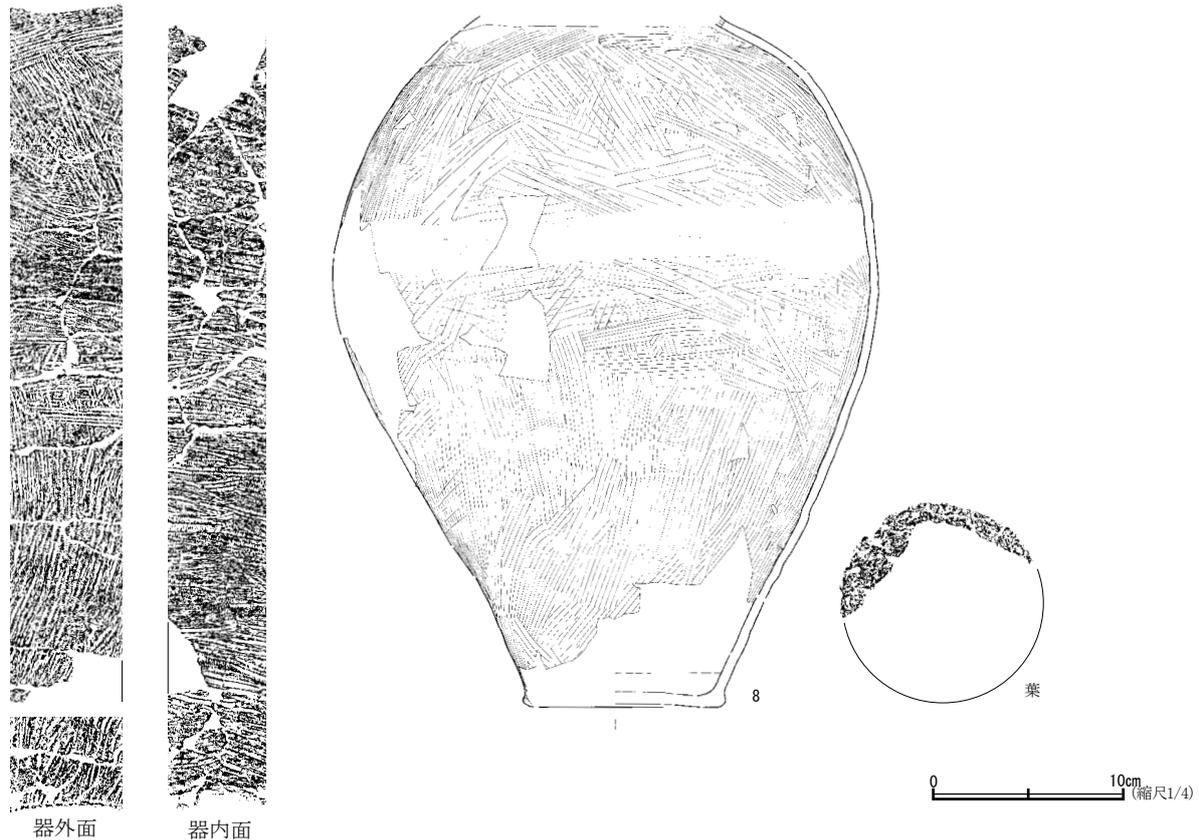
頸部文様展開

△A・Bは頸部文様と胴上部文様の位置対応を示す。  
(展開図の縮尺約1/6)



胴上部文様展開

第26図 第1号土坑出土遺物(7) — 土器7 —



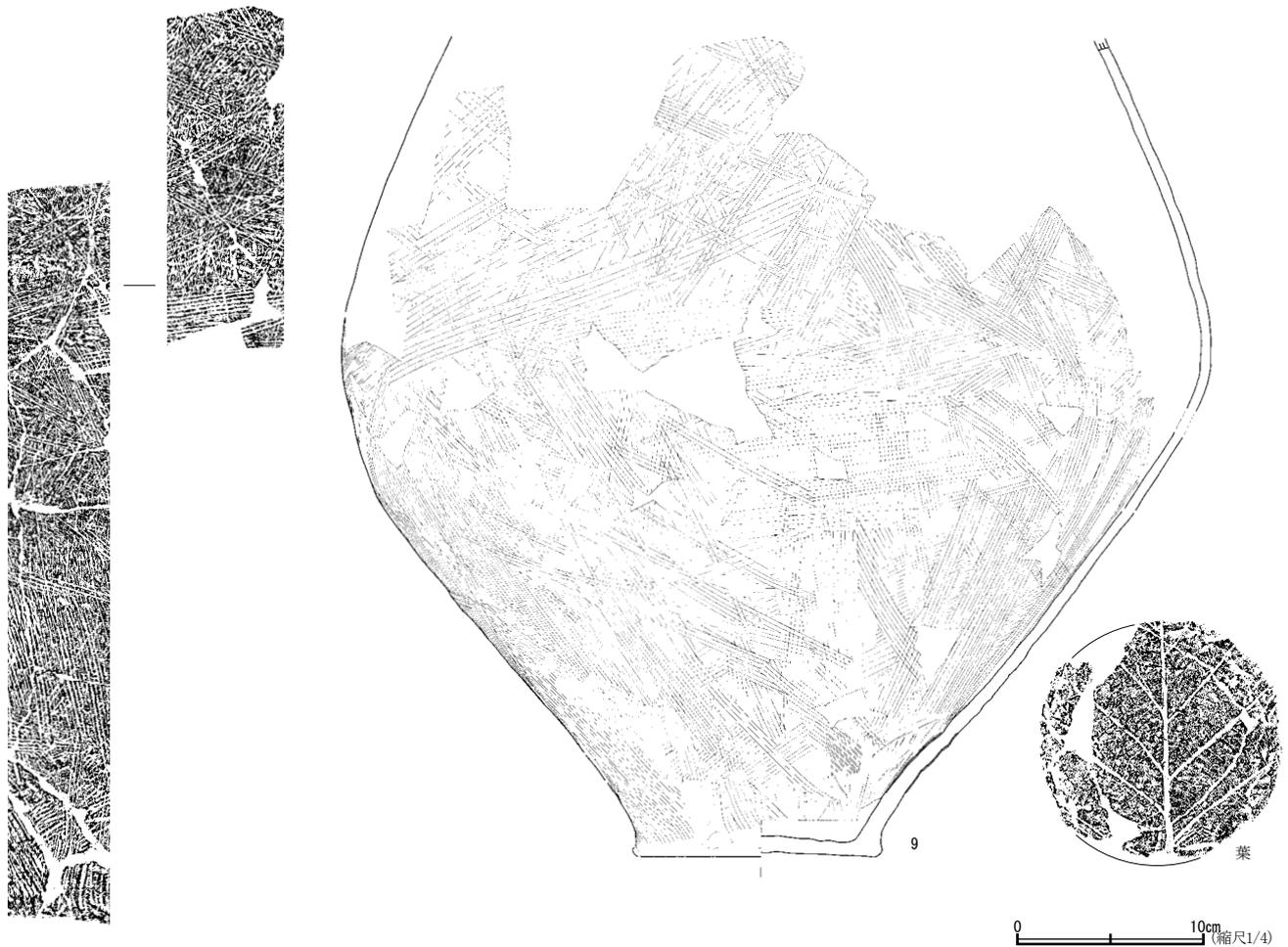
第27図 第1号土坑出土遺物(8) — 土器8 —

には条線状が斜位から横位に施されている。条線状は、刷毛目状の後に施文された。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、肩部に凹凸の著しい撫で調整が見られ、全体的には刷毛目状の条痕文で調整されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は淡～暗褐色を呈する。器外面の胴下部に僅かな炭化物の付着が認められる。器内面の胴下部は部分的に黒化している。

**土器9** (第28図) 土器9として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器14に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、胴部から底部までが復元された。別番号には、第1号遺構の覆土中から出土したものも多く、C3区に集中するが、B2・B3区からも抽出されている。土器9の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北東を向く。法量と器形から超大型の壺形土器であり、張り出した胴部がなだらかに頸部へと向かう。計測値は残存高446mm、胴径467mm(残存率52%)、底径132mm(残存率82%)。底部付近は整った刷毛目状、胴部最大径付近から上位には条線状の条痕文が施されている。条痕の方向は、底部付近が主に縦位、胴部最大径付近が主に横位。

胴上部には右下り・左下りの斜位に施文され、格子状を意識したような印象である。底面痕跡は木葉痕で、カシワ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は撫で調整。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は器外面が主に淡褐色、器内面が褐～淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。実測図の裏面に相当する器外面には、底部から15～20cmの範囲に橙色の付着物があり、これは接合した破片の断面にも付着していたことから、自然鉄によるものと判断した。

**土器10** (第29図) 土器10として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器8・9に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。土器10の出土状況は横位で、中心軸は口縁が南を向く。小型の壺形土器であり、計測値は器高454mm、口縁が長軸118mm・短軸111mmの楕円形(残存率100%)、頸径86mm(残存率100%)、胴径265mm(残存率100%)、底も長軸108mm・短軸97mmの楕円形(残存率100%)。平口縁の複合口縁。口唇部は、篋状工具による撫で調整で平坦面を形成する。口唇外側の小さな剥離は埋設の前に生じたものであろう。口縁部には、単節斜縄文LRが施されて



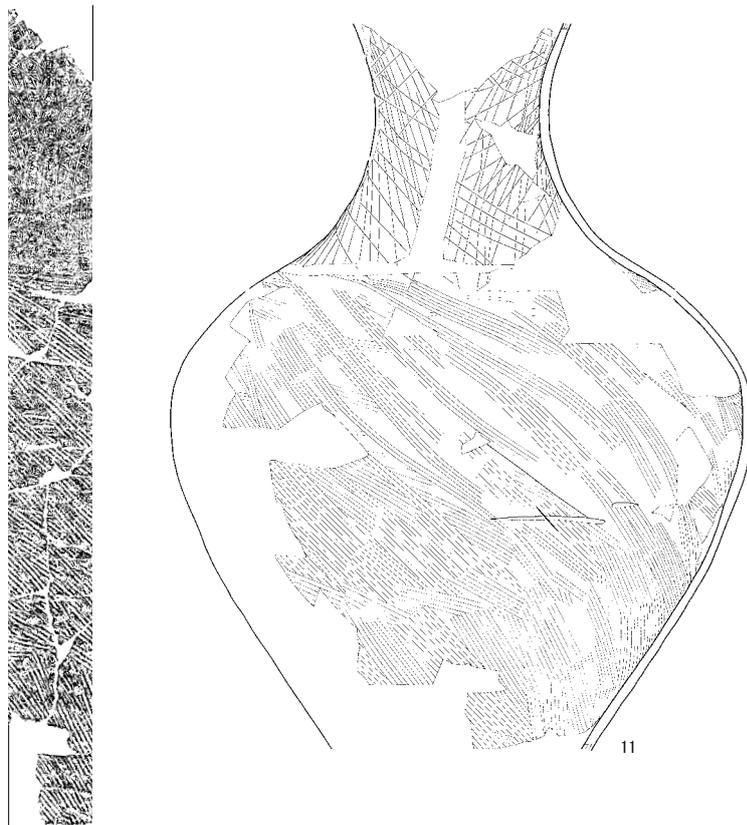
第28図 第1号土坑出土遺物(9) — 土器9—

いる。但し、この縄文は節が不鮮明で無節斜縄文Lのようにも見える。口縁直下は横方向に撫で調整され、複合口縁は有段の状態である。この一部が撫で残されて条痕文が観察されることから、撫で調整の以前には頸部まで条痕文が及んでいたものと考えられる。頸部との境界の胴部最上位には、口縁部と同じ単節斜縄文LRが施されており、これは条痕文の後に施文されている。胴部から底部付近までは条痕文が施され、下位から上位へ向かう順序が捉えられた。主に縦位と斜位であるが、胴部の最大径部分を中心に横位の条痕文が分布する。条痕文は刷毛目状。底部は器外面への突出が強い。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、口縁部から頸部に条痕文が施され、胴部は撫で調整されている。胎土には、骨針を含む。焼成は良い。色調は、器外面が黒～暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

**土器11** (第29図) 土器11として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器12に混在した破片、別番号で記

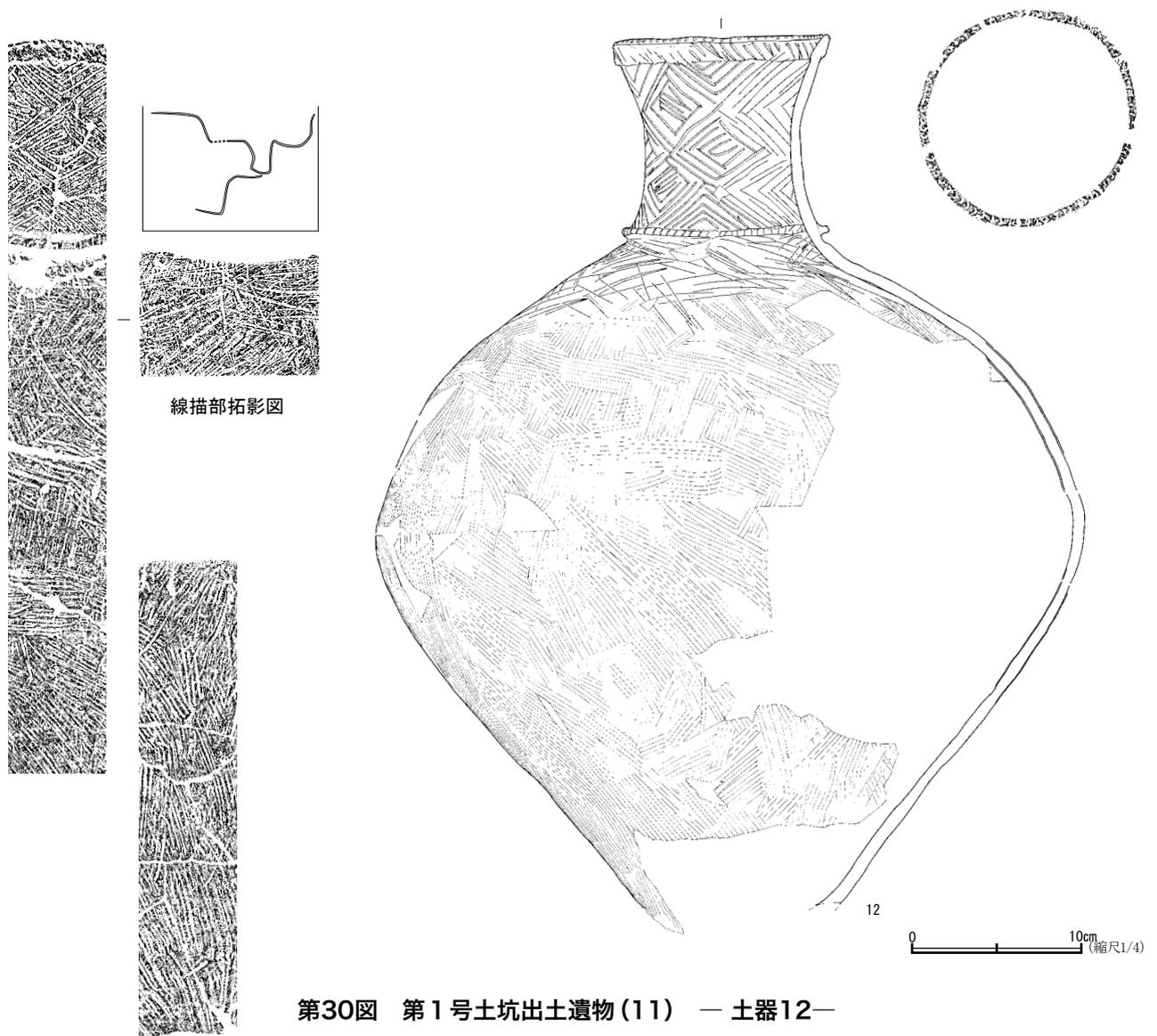
録した破片が接合し、頸部から底部付近までが復元された。別番号には、第1号遺構の覆土中から出土した破片も含まれている。土器11の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北を向く。壺形土器であり、口縁部と底部を欠損するが小型で、土器15の器形に似る。計測値は残存高384mm、頸径92mm(残存率74%)、胴径305mm(残存率44%)。頸部には、篋状工具による鋭く細い沈線で格子状文が構成される。全体を施文した後に、胴部との境界が横位に、さらに頸部を区画するように縦位に沈線が撫で消されている。胴部の条痕文は貝殻条痕状で、全体的に右下りの斜位である。器内面は全体が撫で調整。胎土には、細かな金雲母を少量含む。器壁が4mmほどと薄く、焼成が良いことから硬質な印象である。色調は明るい褐色を呈する。胴部最大径から下へ幅7cmほどの器外面に炭化物が付着し、さらに下へ4cmほど雨垂れ状の付着が認められる。器内面の胴下部にも炭化物が付着している。器内面の頸部に種子状の圧痕1ヵ所を見出した。

**土器12** (第30図) 土器12として取り上げた大部分の



0 10cm (縮尺1/4)

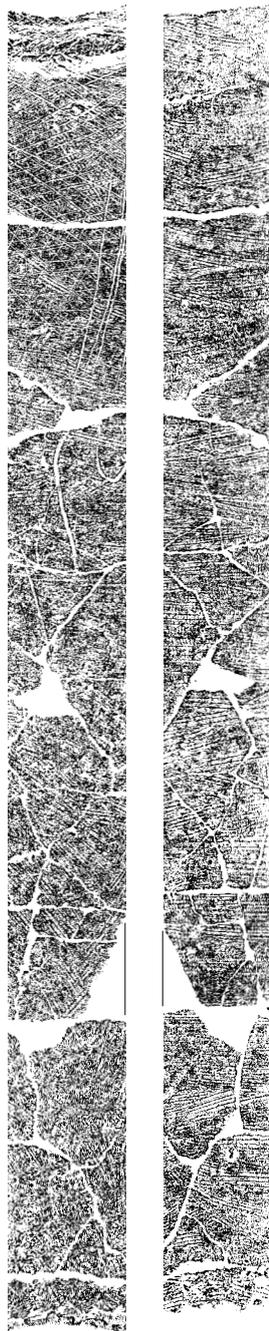
第29図 第1号土坑出土遺物(10) — 土器10・11—



第30図 第1号土坑出土遺物(11) — 土器12—

破片に、隣接する土器11に混在した破片が接合し、口縁部から底部付近までが復元された。同一個体の破片は第1号遺構の覆土中にも含まれている。土器12の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北西を向き、口頸部が土器11の胴部にのる。壺形土器であり、底部を欠損するものの、残存高から確実に中型である。計測値は残存高535mm、口径127mm(残存率97%)、頸径92mm(残存率100%)、胴径420mm(残存率37%)、底径は100mm前後と推定される。胴部が大きく張り出した器形が特徴的である。平口縁で複合口縁。口唇部には、植物茎を原体とした刺突文が全周する。原体の先端は管状で、これが斜めに刺突されている。複合口縁は、頸部に被さるように積上げられた成形痕を残す。この口縁部から、頸部、胴上部には、篋状工具による沈線で文様が構成される。同一工具の使い方によるのか、鋭く細い沈線と鈍く太い沈線の2種があり、口縁部と頸部には、これらが混在する。

口縁部は右下りの短沈線、頸部には重菱形文を構成し、その中心に短沈線が充填されている。頸部の文様は口縁部成形後、さらに口縁部施文後に施文された。頸部と胴部は隆帯で区画され、隆帯上には篋状工具による刻みがある。胴上部には、鋭く細い沈線のみで格子状文が構成されている。実測図の右側面に相当する肩部には線描があり、これには条痕→線描→格子状文の施文順序が観察された。胴部の条痕文は不整な刷毛目状で、胴部最大径付近は横位、その上下は主に右下り斜位である。底部付近には成形の歪みが見られる。器内面は、肩部の積上げ痕が部分的に残り、全体が撫で調整されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は器外面の口頸部が淡褐色、胴部が暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。胴部最大径付近の器外面には炭化物が付着し、器内面の胴下部には斑状の暗褐～黒褐色部分が見られる。



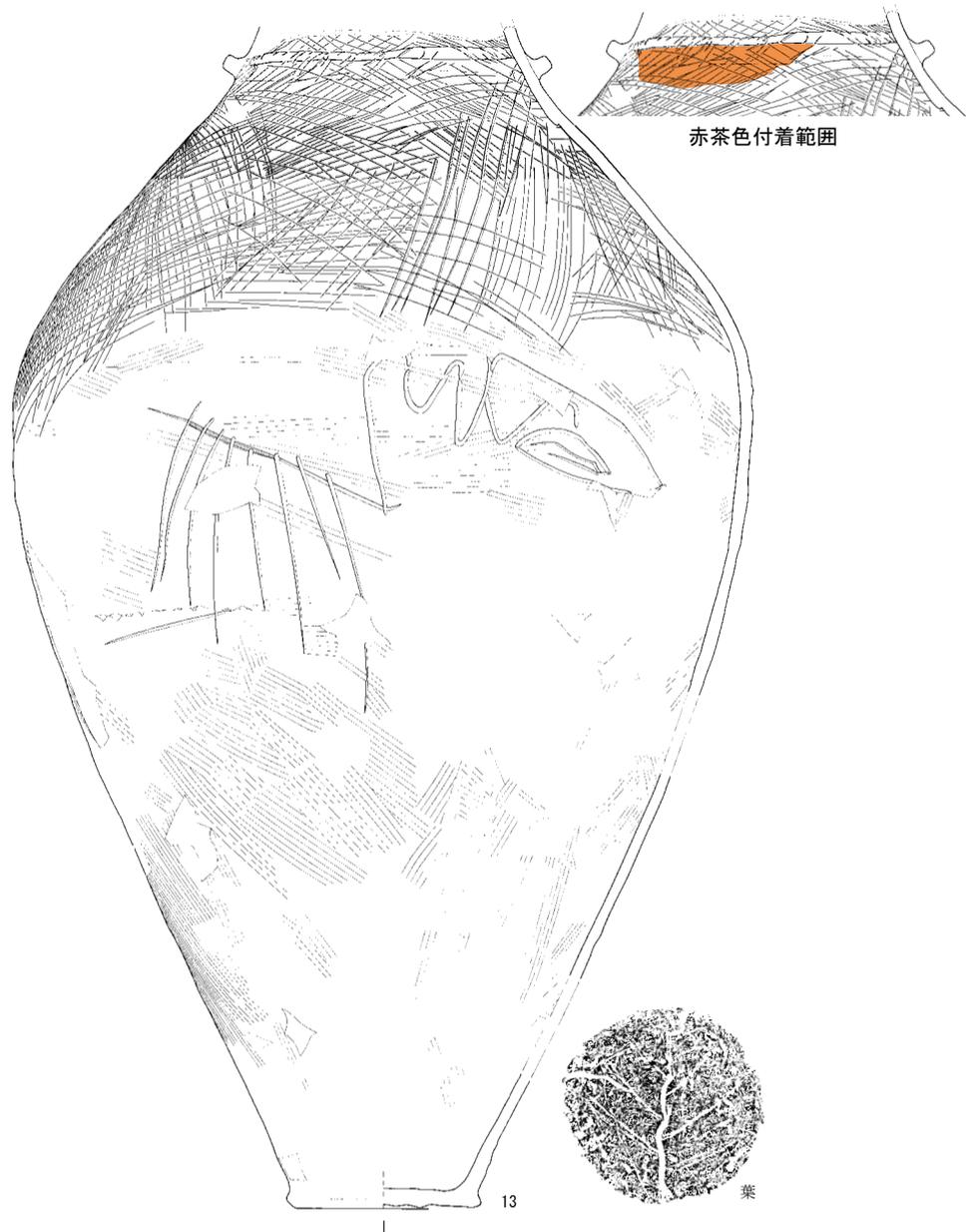
器外面

器内面

0 10cm (縮尺1/4)



工具止め痕 (器内面)



赤茶色付着範囲

葉



線描部拓影図 (縮尺1/3)

第31図 第1号土坑出土遺物(12) — 土器13 —

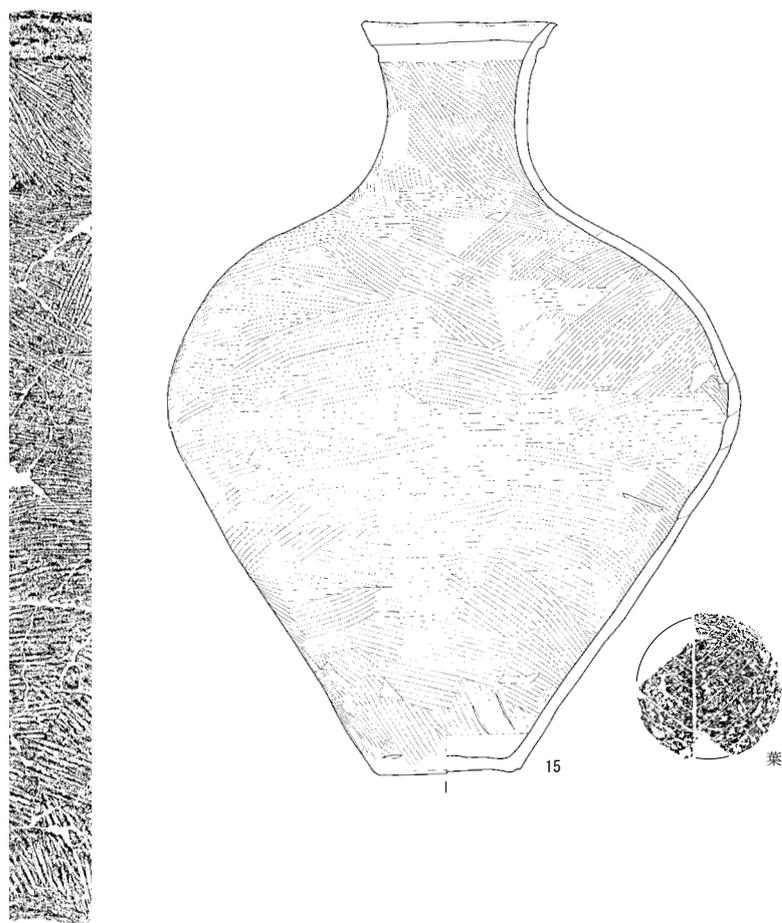
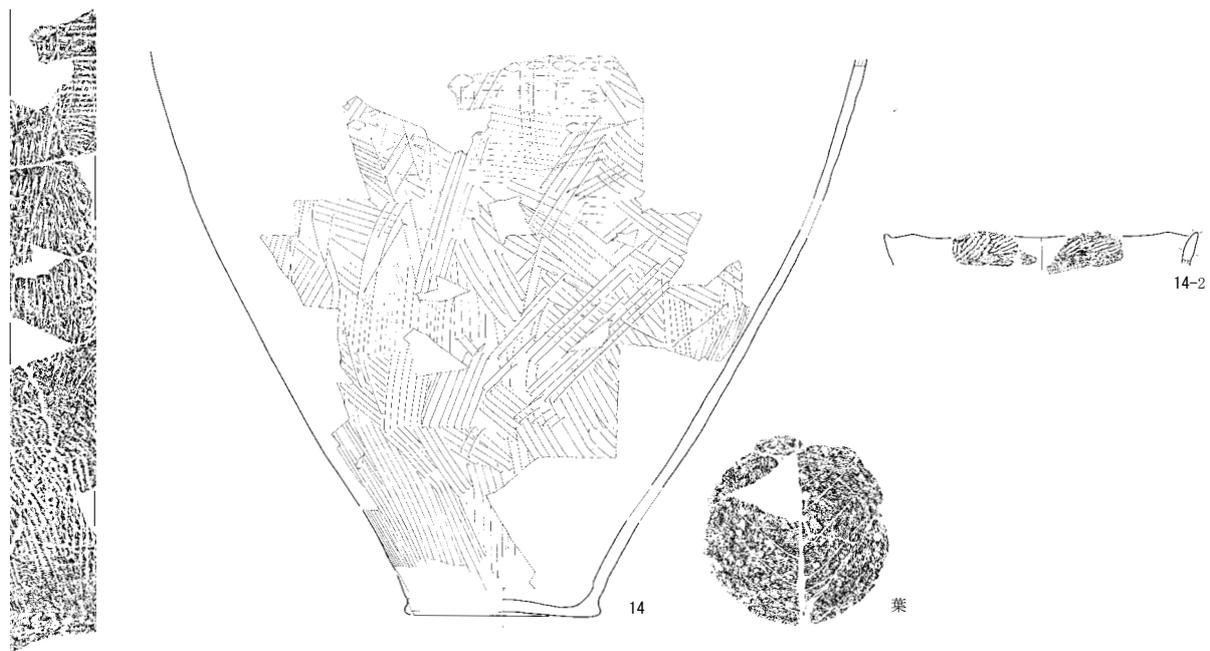
**土器 13** (第31図) 土器 13として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器 12、やや離れた土器 3に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、頸部から底部までが復元された。別番号には、第 2 号土坑として取り上げた破片も含まれている。土器 13の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北を向く。壺形土器であり、器高は明らかでないが、胴部だけで 600mm を超えることから、超大型である。計測値は残存高 628mm、胴径 391mm (残存率 100%)、底径 102mm (残存率 100%)。頸部の破断面は摩滅しており、これを擬口縁としていたことが考えられる。その擬口縁の直径は 142mm (残存率 100%)。頸部と胴部は隆帯で区画される。頸部と胴部の沈線の施文が隆帯上まで延び、隆帯に刻みが施されたように見えている。頸部には、篋状工具による沈線で格子状文が構成され、その端部が残存する。胴上部にも、条痕文を撫で消した後に、篋状工具による沈線で格子状文が構成されている。格子状文の構成は整然としたものではなく、部分的な格子状施文を繰り返すことで空間が充填されている。胴部最大径付近には横位、胴下部には縦位～右下り斜位の条痕文が施されているが、全体的な撫で調整により明瞭ではない。条痕文は刷毛目状。高さ 32cm ほどの位置には、成形の積上げ痕が僅かに残る。実測図正面の胴部中央には、棒状工具による線描が認められた。工具は、先端が割れているらしく、平行する細線に見える部分もある。破片の欠落は線描全体の把握に支障がないものの、描写の対象は判じ難い。底面痕跡は木葉痕で、主脈がうねる特徴等がウリノキの葉に類似する(小幡和男氏の御教示)。器内面は、全体に横位の条痕文が施され、工具止め痕が残されていた。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は褐～淡褐色を呈する。器外面は高さ 15～29cm の範囲、器内面は高さ 20cm から底面付近までに炭化物の付着が認められる。器内面に付着した炭化物を採取し、<sup>14</sup>C 年代測定を実施している(今回は未報告)。隆帯下の一部には、赤茶色の付着物(顔料カ)が認められ、その範囲は明瞭である。

**土器 14** (第32図) 土器 14として取り上げた破片のみが接合したが、同一個体の可能性がある破片は第 1 号遺構の覆土中にも含まれている。土器 14の出土状況は下側の破片のみの横位。底部が南側から出土していることから、中心軸は口縁が北を向くと見られる。壺形土器で

あり、胴～底部のみが残存するが、30cm ほどの残存高で胴部最大径に達しておらず、底部から胴部に至る大きさと曲線が土器 2にほぼ一致することから大型と推定される。計測値は残存高 297mm、底径 101mm (残存率 92%)。残存部の最大径は 378mm で、胴径は 380～400mm の範囲に推定される。条痕文の施文具には、条の間隔が狭い刷毛目状と、条の間隔が広い条線状があり、底部付近に施された刷毛目状の後に、条線状が施文されている。胴部最大径付近にあたる残存部上位には、条線状の前に施文された横位の刷毛目状とともに、成形の押圧に伴う窪みが残されている。底部付近は削り～撫で調整され、条痕文が消えている。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、全体が撫で調整されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は器外面が黒～暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

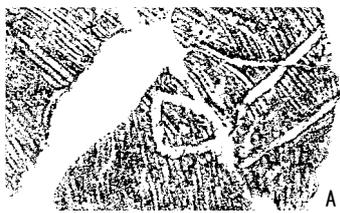
土器 14-2として図示した口縁部は、土器 14とともに出土し、胎土に石英礫を多量に含む特徴も一致することから、土器 14の口縁部の可能性が高い。口径 164mm (残存率 6%)。10 単位ほどであろうか、緩やかな波状口縁で、有段の複合口縁。単節斜縄文 LR が口縁の内外に施文されており、節が明瞭でなく無節のようにも見える。

**土器 15** (第32図) 土器 15として取り上げた大部分の破片に、隣接する土器 2・3・13に混在した破片、別番号で記録した破片が接合し、口縁部から底部までが復元された。別番号には、第 2 号土坑として取り上げた破片も含まれている。土器 15の出土状況は横位で、中心軸は口縁が北東を向く。小型の壺形土器であり、計測値は器高 400mm、口径 103mm (残存率 100%)、頸径 74mm (残存率 100%)、胴径 302mm (残存率 98%)、底径 77mm (残存率 61%)。平口縁の複合口縁。口唇部は、篋状工具による撫で調整で平坦面を形成する。口縁部は、指頭による押圧で調整され、一部に指紋が残る。複合口縁下は撫で調整で凹線状に窪んでいる。頸部から底部付近まで条痕文が施され、下位から上位へ向かう施文の順序が捉えられた。条痕文には斜位と横位があり、頸部と胴部の境界付近、胴部の最大径部分など成形の屈曲が転換する部分を中心に横位が分布する。条痕文は整った刷毛目状。底部付近のみ横方向に削り調整されている。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、胴部



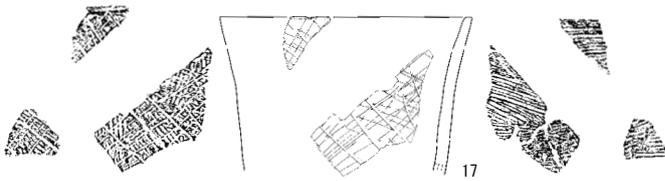
0 10cm (縮尺1/4)

第32図 第1号土坑出土遺物(13) — 土器14・15—



器内面

線描部拓影図 (縮尺1/2)



0 10cm (縮尺1/4)



18



器外面



器内面

第33図 第1号土坑出土遺物(14) — 土器16・17・18 —



第34図 第1号土坑出土遺物(15) — 土器19 —

最大径付近に成形の積上げ痕を残し、全体が撫で調整されている。胎土に骨針を含み、土器10よりも多量である。焼成は良い。色調は、器外面の口～頸部が褐色の他は暗～黒褐色、器内面が灰褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。器外面に種子状の圧痕2カ所を見出した。

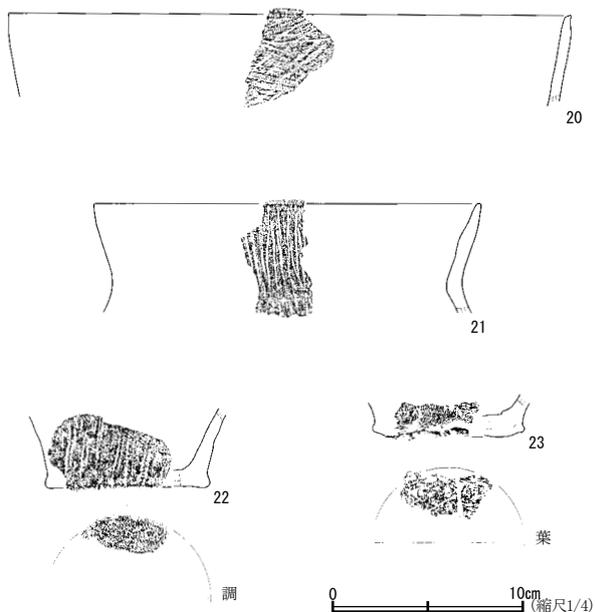
**土器16** (第33図) 壺形土器の口縁～胴上部。第1号土坑の出土遺物として取り上げたのは破片が1点のみで、これはⅢ区から出土した。他の25点はC3区の第1号遺構覆土の遺物から抽出された。土器1～15のうち口縁～胴上部を欠損するのは土器9・14の2個体であり、これらとは別個体と識別された。口径152mm(残存率32%)、頸径102mm(残存率24%)で、肩が張る器形から、土器1に相当するような大型と推定される。平口縁の複合口縁。口唇部は平坦面を形成し、口縁部とともに単節斜縄文LRが施されている。複合口縁下は撫で調整で凹線状に窪む。頸部から胴部にかけて条痕文、胴上部には結節文と単節斜縄文LRも施されている。条痕文は細かな刷毛目状。結節文は、横回転で上下を区画し、その間を斜回転で鋸歯状に充填する構成のようである。単節斜縄文LRは、この結節文に付随し押捺されて部分的に出現する。頸部と胴上部には棒状工具による線描も認められた。頸部の線描は、中央に丸点のある三角形(A)が特徴的である。これは、三角形の向きは逆でも、泉坂下遺跡第1号墓壙から出土した人面付土器(土器1)の目の表現に良く似ている。欠落部分を挟んだ破断面付近には、これと対になりそうな沈線の一部が観察されることから、簡略化された人面の表現を想定しておきたい。胴上部の破片にも、略楕円形(B)、略円形(C)の線描が見られ、これらは外側にそれぞれを囲む「撫で」が施されている。特に略円形は2つが囲われていて、これも人

面の表現なのかもしれない。拓影図では大よその部位にこれらを配置したが、頸部と胴上部の線描の位置関係が明らかでないため、実測図は口頸部のみとした。器内面も刷毛目状の条痕文であるが、器外面の細かな条痕とは異なる。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は淡褐色を呈する。

**土器17** (第33図) 壺形土器の口縁～頸部。第1号土坑の出土遺物として取り上げたのは口縁部の破片1点のみで、土器11の破片に混在して出土した。他の4点はC3区の第1号遺構覆土の遺物から抽出された。口縁部の破片は、当初土器13の一部ではないかと思われたが、別個体と識別した。口径133mm(残存率5%)、頸径104mm以下で、中型から大型と推定される。平口縁の単純口縁。口唇部は平坦面を形成し、やや内削ぎ状となる。器内外面に刷毛目状の条痕文が施され(実測図には器外面の条痕文を省略)、器外面の口頸部には篋状工具による沈線で格子状文が構成されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は暗褐色を呈する。

**土器18** (第33図) 壺形土器の口縁～頸部。2点の破片がC3区の第1号遺構覆土の遺物から抽出された。土器1～15のうち口頸部を欠損するのは土器8・9・13・14の4個体であり、これらとは別個体と識別した。口径120mm(残存率26%)、頸径102mm(残存率26%)、小型から中型と推定される。4～5単位の緩やかな波状口縁の可能性ある。単純口縁で、口縁部には横方向、頸部には縦方向に条痕文が施されている。条痕文は、櫛歯状工具による不整な条線状。器内面にも撫で調整以前に条痕文が施されている。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は褐～暗褐色を呈する。

**土器19** (第34図) 深鉢形土器。第1号土坑からは6点の破片が出土した。出土位置は、土器3内の他に、土



第35図 第1号土坑出土遺物(16)

器4近く、第1号土坑西壁近く、土器群の中央部と散在している。また、試掘第2トレンチの遺物から1点の破片が、C3区の第1号遺構覆土の遺物から底部の破片が抽出された。口径164mm(残存率13%)、胴径197mm(残存率6%)、底径75mm(残存率58%)。平縁の単純口縁で、口縁が内湾する。体部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文は節の細かな単節斜縄文LR。無文部は磨き調整。沈線には赤彩が施されている。底面痕跡は木葉痕で、カシワ型の裏面の圧痕が観察される。胎土には、特徴的な含有物を認めない。焼成は良い。色調は暗褐～黒褐色を呈する。

土器20(第35図) 深鉢形土器。第1号土坑の土器9の

破片に混在して出土した。口径294mm(残存率2%)ほどに推定される。平縁の単純口縁で、口縁が直線的に開く。体部には刷毛目状の条痕文が右下り・左下りの斜位に施されている。器内面は撫で調整。胎土には、金雲母を含む。焼成は良い。色調は器外面が褐色、器内面が暗褐色を呈する。

土器21(第35図) 小型の甕形土器。第2号土坑の覆土上位に含まれていた。口径204mm(残存率3%)、頸径184mm(残存率5%)ほどに推定される。平縁の単純口縁で、頸部が括れて口縁が外反する。体部には刷毛目状の条痕文が縦位に施されている。器内面は撫で調整。胎土には、泥岩片を含む。焼成は良い。色調は、口縁付近のみ黒褐色、他は褐色を呈する。

土器22(第35図) 壺形土器の底部か。第1号土坑の土器4の近くから出土した。底径88mm(残存率19%)ほどに推定される。底部付近には刷毛目状の条痕文が縦位に施されている。底面は撫で調整。胎土には、銀雲母を含む。焼成は普通。色調は淡褐色を呈する。

土器23(第35図) 壺形土器の底部か。C4区の第1号遺構覆土の遺物から抽出された。底部を欠損する土器11・12・16・18とは別個体と識別されたが、土器17の底部の可能性は否定できない。底径78mm(残存率17%)ほどに推定される。底部付近は撫で調整、底面は木葉痕。胎土には、石英礫を多量に含む。焼成は良い。色調は、器外面が黒色、器内面が淡褐色を呈する。

以上の土器群については、IV-1において検討を加える。

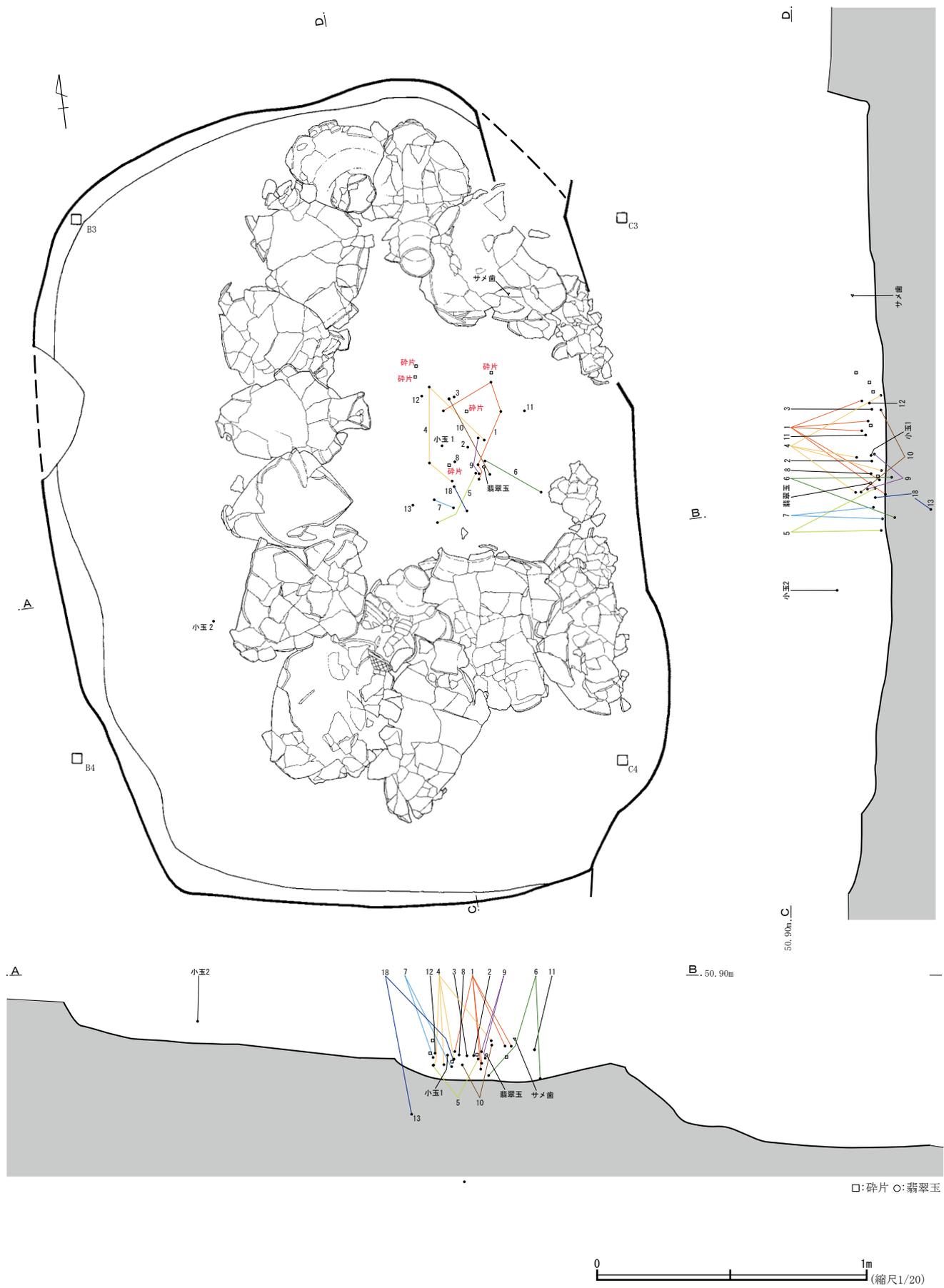
第2表 第1号土坑出土土器計測・観察表

遺構	土器番号	挿図	器種	器高(mm)	口径(mm)	残存率	頸径(mm)	残存率	胴径(mm)	残存率	底径(mm)	残存率	胎土の特徴	縄文/条痕	底面痕跡	備考
SK1	1	第20図	壺形	645	159-145	68 %	106	94 %	348	95 %	87	100 %	白雲母	縄文・条痕	調整	
	2	第21図	壺形	652	152	83 %	124	92 %	386	66 %	91	81 %	石英礫	縄文・条痕	木葉痕	瓢形
	3	第22図	壺形	540	112	17 %	82	51 %	334	67 %	102	73 %	金雲母	縄文・条痕	木葉痕	
	4	第23図	壺形	*525	—	0 %	100	35 %	323	57 %	119	60 %	金雲母	縄文	木葉痕	
	5	第24図	壺形	560	130	55 %	100	100 %	317	91 %	94	63 %	白雲母	縄文・条痕	木葉痕	瓢形
	6	第25図	壺形	516	133	74 %	100	95 %	356	87 %	100	95 %	石英礫	偽縄文・条痕	木葉痕	
	7	第26図	壺形	536	129	92 %	108	100 %	333	91 %	104	97 %	—	条痕	木葉痕	
	8	第27図	壺形	*368	—	0 %	—	0 %	287	88 %	107	48 %	石英礫	条痕	木葉痕	
	9	第28図	壺形	*446	—	0 %	—	0 %	467	52 %	132	82 %	石英礫	条痕	木葉痕	
	10	第29図	壺形	454	118-111	100 %	86	100 %	265	100 %	108-97	100 %	骨 針	縄文・条痕	木葉痕	
	11	第29図	壺形	*384	—	0 %	92	74 %	305	44 %	—	0 %	金雲母	条痕	—	
	12	第30図	壺形	*535	127	97 %	92	100 %	420	37 %	—	0 %	石英礫	条痕	—	線描画カ
	13	第31図	壺形	*628	*142	100 %	—	0 %	391	100 %	102	100 %	石英礫	条痕	木葉痕	線描画
	14	第32図	壺形	*297	—	0 %	—	0 %	—	0 %	101	92 %	石英礫	条痕	木葉痕	
	15	第32図	壺形	400	103	100 %	74	100 %	302	98 %	77	61 %	骨 針	条痕	木葉痕	
	16	第33図	壺形	*215	152	32 %	102	24 %	—	0 %	—	0 %	石英礫	縄文・条痕	—	瓢形、線描画(人面カ)
	17	第33図	壺形	—	133	5 %	—	0 %	—	0 %	—	0 %	石英礫	条痕	—	
	18	第33図	壺形	—	120	26 %	102	26 %	—	0 %	—	0 %	石英礫	条痕	—	
	19	第34図	深鉢形	—	164	13 %	—	—	197	6 %	75	58 %	骨 針	縄文	木葉痕	沈線内赤彩

\*器高の「\*」付は残存高

\*口径の「\*」付は擬口径部分の計測値

挿図	遺物番号	器種	器高(mm)	口径(mm)	残存率	頸径(mm)	残存率	胴径(mm)	残存率	底径(mm)	残存率	胎土の特徴	縄文/条痕	底面痕跡	備考
第35図	20	SK1P9	深鉢形	—	294	2 %	—	—	—	—	0 %	金雲母	条痕	—	
	21	SK2No.2	甕形	—	204	3 %	184	5 %	—	—	0 %	—	条痕	—	
	22	SK1No.50	壺形カ	—	—	—	—	—	—	88	19 %	白雲母	条痕	調整痕	
	23	C4区No.8	壺形カ	—	—	0 %	—	0 %	—	78	17 %	石英礫	—	木葉痕	



第36図 第1号土坑玉類・サメ歯出土状況図

## 5 玉 類

**出土状況** 再葬墓である第1号土坑からは、土器が口縁を中心に向けた状態で略馬蹄形に並んで15点出土している。その並んだ土器の中央約0.7×0.6mの範囲に、管玉の碎片が確認された(第36図)。発掘調査で取り上げられ、出土位置がわかるものは接合できなかった碎片も含めると33点、一括資料など覆土から抽出された資料が6点、土坑内で採取した土壌の水洗選別より抽出されたものが108点となり、合計147点の管玉碎片が確認されている。完形の管玉は1点も確認されなかった。この中で、発掘調査で取り上げられた管玉と水洗選別で抽出された碎片を接合し、管玉の形を復元し図示できたものは18点(第37図)、水洗選別から抽出し、小さく図示できなかったものが1点で、第1号土坑から出土した管玉の最小個体数は19点となる。また、接合できなかった碎片はほとんどが重さ0.1g以下で、総重量から新たに1個体の管玉が復元されるのは難しいだろう。おそらく復元できた管玉の何れかに接合すると考えられる。その他の玉類として、小玉2点・翡翠玉1点が出土している(第38図)。

第36図には、管玉の接合関係を色別に分けて図示している。関係性をみると、隣り合って出土しているものはほとんどなく、最も近いもので4cm、遠いもので27cm離れていた。同一個体の碎片が入り混じった状態が見受けられる。また、垂直分布をみると、管玉は土坑の底面から浮いた位置で出土しており、高いもので15cm、低いもので2cm浮いていた。管玉は全て土坑内の覆土中に分布していることがわかる。1点の管玉碎片で、土坑の底面よりもかなり下の位置から出土しているものがある。これは第1号土坑と重なって確認された第2号土坑中の木の根によってできた攪乱部分のものであり、もともとは第1号土坑内にあったものが後世に移動したものと考えられる。

**管 玉** 接合し復元できた管玉18点の計測・観察の結果は以下の通りである。水洗選別資料の( )内の数値は選別の篩の才眼の大きさである。石材については田切美智雄氏に鑑定していただいた。

第37図-1は、遺物番号29・30・32・76・111、水洗資料No.7-4(3mm)・No.24-2(3mm)の7点が接合した。直径が9mm、長さ26mm、幅9mm、重さ3.3g、孔径3.5mm

で石材は碧玉である。管玉の側面に打点があり、横からの打撃により破砕されている。また、管玉の端面の一方に、一度欠けた部分を再調整して磨いた痕跡がみられた。そのため角がなく、斜めに丸みをおびている。2は、遺物番号66が相当し、他に接合する資料は確認されなかった。直径が9mm、長さ22mm、幅10mm、重さ3.7g、孔径3mmで石材は碧玉である。管玉に対して垂直に割れている。3は、遺物番号33、水洗資料No.7-1(3mm)・No.7-2(3mm)・No.18-1と5(3mm)・No.30-1(3mm)・No.33-土器下-1(3mm)の7点が接合した。直径が9mm、長さは11mm、幅9mm、重さ1.1g、孔径4.5mmで石材は碧玉である。打点は認められなかったが、管玉の割れた方向から横からの打撃によって破砕されている。4は、遺物番号24・28・70・72と水洗資料No.7-1(3mm)・No.7-1と3(1mm)・No.24-1と2(1mm)の9点が接合した。直径が6mm、長さ18mm、幅6mm、重さ1.2g、孔径2.5mm。石材は碧玉で、他と比べ少し明るい青緑色をしている。側面に打点があり、横からの打撃によって破砕されている。5は、遺物番号75・91と水洗資料No.3-3(3mm)・No.7-1(3mm)・No.24-2(1mm)、表採資料の6点と接合した。直径6mm、長さ17mm、幅6mm、重さ1.0g、孔径2.5mmで石材は碧玉である。側面に打点があり、管玉の割れた方向より横からの打撃によって破砕されている。6は、遺物番号77・139、一括資料No.20、水洗資料No.18-2(3mm)の4点と接合した。推定直径が10mm、長さ7mm、幅10mm、重さ1.0g、推定孔径3mmで石材は碧玉である。側面に打点が残っており、横からの打撃によって破砕されている。また、1と同じように端面の欠けた部分を再調整している痕跡もみられた。7は、遺物番号112・114の2点が接合した。直径が8mm、長さ14mm、幅8.0mm、重さ0.5g、孔径3mmで石材は明るい青緑色をした碧玉である。8は、遺物番号26と水洗資料No.3-2(3mm)・No.24-2(3mm)の3点が接合した。直径6mm、長さ15mm、幅7mm、重さ0.4g、推定孔径3mmで石材は碧玉である。側面には打点がみられ、横から打撃をあたえ破砕されている。9は、遺物番号68・78、水洗資料No.3-4(3mm)・No.7-2(3mm)の4点が接合した。推定直径6.5mm、長さ13mm、幅7mm、重さ0.4g、推定孔径2mmで、石材は碧玉である。割れた方向より、横から打撃をあたえ破砕されている。10は、遺物番号25・71の2点が接合した。推定直径8

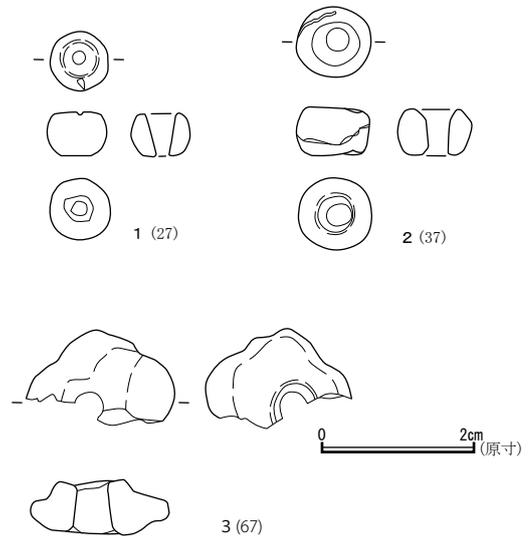


第37図 第1号土坑出土遺物(17) — 管玉 —

mm, 長さ10mm, 幅8mm, 重さ0.4gで石材は碧玉である。11は, 遺物番号31と水洗資料No.18-2 (3mm) の2点が接合した。推定直径8mm, 長さ9mm, 幅8mm, 重さ0.3gで石材は碧玉である。12は, 遺物番号34で他に接合する碎片は見つからなかった。直径6mm, 長さ5.5mm, 幅6mm, 重さ0.1g, 孔径3mmで, 石材は青緑色の青みが強い碧玉である。13は, 遺物番号SK2-12と水洗資料No.7-2 (3mm)・No.7-2 (1mm) の3点が接合した。直径5mm, 長さ7mm, 幅5mm, 重さ0.1g, 孔径3mmで復元された管玉の中では最小となる。14は水洗資料No.3-1 (3mm)・No.7-2 (3mm)・No.24-1 (3mm) の3点が接合した。直径7mm, 長さ17mm, 幅8mm, 重さ1.0g, 孔径3mmで胴部が少し膨らむ。石材は濃い青緑色の碧玉で, 割れ方から横の打撃によって破碎されている。15は, 水洗資料No.7-3 (3mm)・No.24-1 (3mm) の2点が接合した。直径8mm, 長さ10mm, 幅8.5mm, 重さ0.6g, 推定孔径3mmで石材は碧玉である。16は, 水洗資料No.7-1 (3mm) が2点, No.24-1と3 (3mm) の4点が接合した。直径6mm, 長さ12mm, 幅6mm, 重さ0.5g, 孔径2mmで石材は碧玉である。割れた方向より横からの打撃によって破碎されている。

碧玉製管玉16点のうち, 直径が9~10mmのものが4点, 7~8mmが5点, 5~6mmが7点となる。全てが接合できなかつたため, 全体の大きさがつかめないものが半数を占めるが, 直径が7~8mmと5~6mmの中型と小型の管玉が半数以上を占め, 直径が9mm以上で長さが20mmを超えるものは2点のみとなる。

17-1は, No.61一括資料, 水洗資料No.3-9と13 (3mm)・No.7-6 (3mm) の4点が接合した。推定直径が18mm, 長さ18mm, 幅13mm, 重さ2.3g, 推定孔径5mm, で石材は灰色の流紋岩である。17-2は, No.61一括資料, 水洗資料No.7-3と4 (3mm) の3点が接合した。推定直径18mm, 長さ15mm, 幅20mm, 重さ3.8g, 推定孔径5mmで石材は灰色の流紋岩である。どちらも節理の部分が黒く変質している。同一石材で大きさも同等となることから同一個体と考えられるが, 接合ができなかつたため分けて図示した。18は, 遺物番号92・SK2-13, 水洗資料No.3-7 (3mm)・No.7-6 (3mm)・No.18-3 (3mm)・No.25 (3mm) の6点が接合した。直径15mm, 長さ24mm, 幅15.5mm, 重さ5.2g, 孔径6mmで石材は水色に近い薄い青緑色の風化した流紋岩である。管玉の割れ方から, 縦に打撃をあたえ破碎し



第38図 第1号土坑出土遺物(18) — 玉類 —

ていると考えられる。この2点の管玉は, 碧玉製管玉に比べ, 直径15mm以上とかなり太い。水洗選別から抽出できる流紋岩の碎片も同じ灰色と薄い青緑色のものからなり, この再葬墓には太い流紋岩製の管玉はこの2点のみと考えられる。

**小玉・翡翠玉** 第38図-1の小玉は, 直径8mm, 幅8mm, 厚さ6mm, 重さ0.5gで, 最大孔径4mm, 最小孔径2mmである。片側からの穿孔のためか, 片方の孔径がかなり小さい。石材は翡翠で透明感のない白色をしている。2の小玉は, 直径10mm, 幅10mm, 厚さ6.5mm, 重さ0.6gで最大孔径6mm, 最小孔径4mmである。こちらも片側からの穿孔のため片方の孔径が小さい。石材は翡翠で透明感がある暗白色に緑色が混じる。この小玉は略馬蹄形の土器列の外側から出土した。3の翡翠玉は, 長さ15mm, 幅19mm, 厚さ7mm, 重さ2.1gで推定される最大孔径6mm, 最小孔径4mmである。石材の翡翠は透明感がありきれいな緑色をしている。ほとんど石材に調整がされておらず, 採集した小さい翡翠礫に穿孔したものと考えられる。また, 上下の孔径に差があるため, 片側からの穿孔と考えられる。この翡翠玉も土坑内の覆土から出土し割れているため, 破碎された可能性が高い。(田中美零)

第3表 第1号土坑出土玉類計測・観察表

挿図	出土位置	遺物番号	器種	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
1	SK1-Ⅲ区	No.27	小玉	8.0	4.0 2.0	8.0	8.0	6.0	0.5	翡翠	
2	SK1-Ⅰ区	No.37	小玉	10.0	6.0 4.0	10.0	10.0	6.5	0.6	翡翠	
3	SK1-Ⅲ区	No.67	翡翠玉	—	(4.0) (6.0)	15.0	19.0	7.0	2.1	翡翠	破碎資料

\* 石材の種類は田切美智雄氏の鑑定によるものである。  
\* ( )内は推定値。

第4表 第1号土坑出土管玉計測・観察表

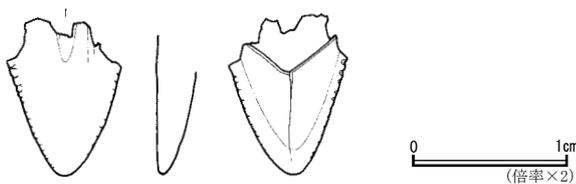
(水洗選別)

挿図	出土位置	遺物番号	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	状態	備考
1	Ⅲ区	№29・30 他	9.0	3.5	26.0	9.0	-	3.3	碧玉	接合資料	
2	Ⅲ区	№66	9.0	3.0	22.0	10.0	-	3.7	碧玉	接合資料	
3	Ⅲ区	№33 他	9.0	4.5	11.0	9.0	-	1.1	碧玉	接合資料	
4	Ⅲ区	№24・28 他	6.0	2.5	18.0	6.0	-	1.2	碧玉	接合資料	穿孔痕
5	Ⅲ区	№75・91 他	6.0	2.5	17.0	6.0	-	1.0	碧玉	接合資料	穿孔痕
6	Ⅲ区	№77・139 他	(10.0)	(3.0)	17.0	10.0	-	1.0	碧玉	接合資料	
7	Ⅲ区	№112・114	8.0	3.0	14.0	8.0	-	0.5	碧玉	接合資料	
8	Ⅲ区	№26 他	6.0	(3.0)	15.0	7.0	-	0.4	碧玉	接合資料	穿孔痕
9	Ⅲ区	№68・78	(6.5)	(2.0)	13.0	7.0	-	0.4	碧玉	接合資料	穿孔痕
10	Ⅲ区	№25・71	(8.0)	-	10.0	8.0	-	0.4	碧玉	接合資料	穿孔痕
11	Ⅲ区	№31 他	(8.0)	-	9.0	8.0	-	0.3	碧玉	接合資料	
12	Ⅲ区	№34	5.0	3.0	5.5	5.0	-	0.1	碧玉	接合資料	
13	SK2	№12 他	6.0	3.0	7.0	6.0	-	0.1	碧玉	接合資料	穿孔痕
14	麦畑	水洗№7-1 (3mm) 他	7.0	3.0	17.0	8.0	-	1.0	碧玉	接合資料	穿孔痕
15	Ⅲ区	水洗№24-1 (3mm) 他	8.0	(3.0)	10.0	8.5	-	0.6	碧玉	接合資料	一部穿孔痕
16	Ⅲ区	水洗№24-1 (3mm) 他	6.0	2.0	12.0	6.0	-	0.5	碧玉	接合資料	
17-1	Ⅲ区	№61 (一括) 他	(18.0)	(5.0)	18.0	13.0	-	2.3	流紋岩	接合資料	
17-2	Ⅲ区	№61 (一括) 他	(18.0)	(5.0)	15.0	20.0	-	3.8	流紋岩	接合資料	
18	Ⅲ区	№92.SK2 №13 他	15.0	6.0	24.0	15.5	-	5.2	流紋岩	接合資料	管状穿孔具
-	Ⅲ区	№35	-	-	5.0	7.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№64	-	-	8.5	5.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№65	-	-	5.0	7.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№69	-	-	5.0	8.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№73	-	-	2.5	4.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	

\* 石材の種類は田切美智雄氏の鑑定によるものである。  
 \* ( ) 内は推定値。  
 \* 遺物番号の№以外に水洗選別で抽出した碎片も接合する。  
 備考欄の穿孔痕は穿孔後未調整のものを指す。

6 サメ歯

第1号土坑に埋置された壺形土器の土器9内からサメ歯が1点出土した(図版3-5)。土器内であってもその底面から検出されたわけではなく、土壌とともに包含されていた。残存する長さ(歯冠高方向)10.5mm、幅(歯冠幅方向)7.5mm、厚さ2.5mmで、空洞内に土壌が付着した状態でも重さ0.1g未満である(第39図)。先端は摩滅して丸みを帯び、切縁も摩滅して鋸歯の不明瞭な部分がある。唇側面の左よりも右の切縁の方に摩滅が進行している。脱落後の水摩によりもたらされた摩滅と考えられることから、捕獲したサメの顎骨から引き抜いたというようなものではない。歯冠部の形態と切縁に鋸歯を有することから、メジロザメ属(*Carcharhinus* sp.)の上顎歯であり、歯列の近位に相当する。弥生時代のサメ歯として、IV-3において検討を加える。



第39図 第1号土坑出土遺物(19) — サメ歯 —

挿図	出土位置	遺物番号	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	状態	備考
-	Ⅲ区	№3-5(3mm)	-	-	7.0	4.5	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	①・④
-	Ⅲ区	№3-6(3mm)	-	-	6.0	4.5	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	①・④
-	Ⅲ区	№3-1(1mm)	-	-	4.0	2.2	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-2(1mm)	-	-	2.0	3.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-3(1mm)	-	-	3.5	1.5	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-4(1mm)	-	-	4.0	2.5	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-1(3mm)	-	-	7.0	4.5	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	①・④
-	Ⅲ区	№3-2(3mm)	-	-	5.5	4.5	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№3-3(3mm)	-	-	6.0	4.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№3-1(1mm)	-	-	2.5	2.5	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-2(1mm)	-	-	2.0	2.5	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-3(1mm)	-	-	4.0	3.0	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№3-4(1mm)	-	-	2.5	2.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№7-2(3mm)	-	-	2.5	2.5	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-1(1mm)	-	-	3.0	1.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№7-1(1mm)	-	-	3.0	1.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-2(1mm)	-	-	1.0	≤1.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-3(1mm)	-	-	1.0	≤1.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-4(1mm)	-	-	≤1.0	≤1.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-2(3mm)	-	-	5.0	6.0	3.0	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№7-3(3mm)	-	-	4.0	7.0	2.5	≤0.1	碧玉	碎片	③・④
-	Ⅲ区	№7-4(3mm)	-	-	4.0	7.0	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-1(1mm)	-	-	4.0	5.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№7-2(1mm)	-	-	5.0	2.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№7-3(1mm)	-	-	2.5	2.0	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№7-4(1mm)	-	-	3.0	2.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№7-5(1mm)	-	-	5.0	4.0	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-6(1mm)	-	-	3.0	3.0	2.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-1(3mm)	-	-	5.0	7.0	3.5	0.1	碧玉	碎片	①・②・③・④
-	Ⅲ区	№7-2(1mm)	-	-	4.0	3.0	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№7-3(1mm)	-	-	1.5	1.5	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅲ区	№7-4(1mm)	-	-	2.0	2.5	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-5(1mm)	-	-	2.0	2.0	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-1(1mm)	-	-	4.0	2.0	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№7-3(3mm)	-	-	3.0	3.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	②
-	Ⅲ区	№7-6(3mm)	-	-	6.0	6.0	2.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№18-2(3mm)	-	-	5.0	6.0	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	①・③・④
-	Ⅲ区	№18-3(3mm)	-	-	7.0	4.5	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	②・③・④
-	Ⅲ区	№18-4(3mm)	-	-	4.0	5.0	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№18-6(3mm)	-	-	4.0	5.0	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№18-1(1mm)	-	-	3.0	4.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	Ⅲ区	№18-2(1mm)	-	-	2.5	3.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№18-1(3mm)	-	-	7.0	6.0	3.0	≤0.1	碧玉	碎片	②・③・④
-	Ⅲ区	№18-1(1mm)	-	-	3.0	3.0	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	④
-	SK2 覆土	№21-1(1mm)	-	-	2.0	1.5	1.5	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅲ区	№22-1(1mm)	-	-	2.0	2.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	東ベルト	№24-2(1mm)	-	-	3.0	3.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	東ベルト	№24-3(1mm)	-	-	2.0	2.5	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	東ベルト	№24-4(1mm)	-	-	1.5	4.0	1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	東ベルト	№24-5(1mm)	-	-	2.5	2.5	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	東ベルト	№24-1(3mm)	-	-	7.0	6.0	3.0	≤0.1	碧玉	碎片	①・②・③・④
-	東ベルト	№24-2(3mm)	-	-	3.0	4.5	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	
-	東ベルト	№24-3(1mm)	-	-	2.0	2.5	2.0	≤0.1	碧玉	碎片	③
-	東ベルト	№24-4(1mm)	-	-	2.5	2.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	東ベルト	№24-5(1mm)	-	-	2.5	4.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	東ベルト	№24-1(1mm)	-	-	2.5	3.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	東ベルト	№24-2(1mm)	-	-	1.5	2.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	東ベルト	№24-2(3mm)	-	-	6.0	4.0	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	②・③・④
-	北ベルト	№25-1(1mm)	-	-	1.5	4.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅳ区	№30-1(1mm)	-	-	3.0	2.5	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅳ区	№30-2(1mm)	-	-	1.5	1.0	≤1.0	≤0.1	流紋岩	碎片	
-	Ⅳ区土器下	№33-1(1mm)	-	-	4.0	2.0	1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	Ⅳ区土器下	№33-2(1mm)	-	-	2.5	2.0	≤1.0	≤0.1	碧玉	碎片	
-	土器15下	№36-1(1mm)	-	-	2.5	2.5	1.5	≤0.1	碧玉	碎片	

\* ( ) 内は水洗選別の篩の方眼の大きさ。  
 <備考項目>  
 ①穿孔痕残る ②端面残る ③側面残る ④穿孔部残る

## IV 調査の成果と課題

### 1 宿尻遺跡第1号土坑の土器群について

#### はじめに

宿尻遺跡第1号土坑の再葬墓には、15個体の壺形土器が略馬蹄形に並んだ状態で検出され、重複する後世の遺構覆土からは、さらに3個体の壺形土器の破片が出土して、本来は環状の配置であったことも考えられた(第42図)。18個体という壺形土器の数は、泉坂下遺跡第23号土坑に推定された15個体、第2号墓壙から出土した14個体を上回り、現在のところ1基の再葬墓として最も多い。本稿では、この壺形土器の属性を分析し、主に泉坂下遺跡(鈴木編2011)、小野天神前遺跡(阿久津1977)と比較しておきたい。

#### 1 土器の胎土

土器に目視で観察された特徴により、胎土は、次のA～Eの5つに分類された。

**胎土A**…石英礫を多量に含む(土器2・6・8・9・12～14・16～18)。

**胎土B**…金雲母を含む(土器3・4・11)。

**胎土C**…骨針を含む(土器10・15)。

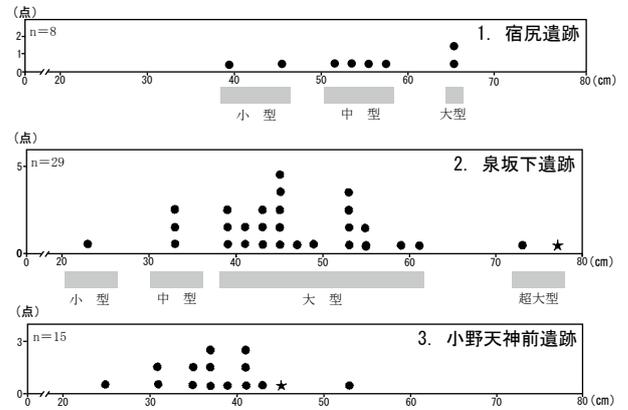
**胎土D**…銀色に発色した白雲母を含む(土器1・5)。

**胎土E**…A～Dの特徴が認められない(土器7)。

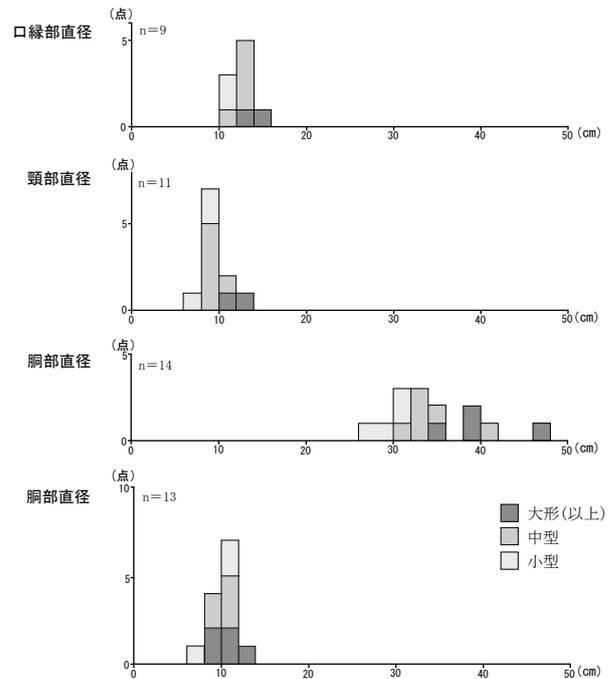
2つ以上の特徴を併せ持つ胎土は認められず、胎土Aが半数以上を占めて多い。胎土Aが宿尻遺跡における典型であり、在地で製作された土器と考えてよいであろう。人面付と捉えた土器16も胎土Aである。泉坂下、小野天神前、さらに那珂市海後遺跡(川崎他1970)、筑西市女方遺跡(田中1944)・北原遺跡(石川2004、第45図2)の人面付土器を観察してみると、胎土Bの特徴が泉坂下、胎土Cの特徴が泉坂下と海後、胎土Dの特徴が女方に認められ、小野天神前と北原は胎土Eであった。

#### 2 土器の法量

壺形土器の法量を、器高を指標として比較する。器高がそのまま容量の大小を表現するわけではないが、器高の大きな土器は概ね容量も大きい。対象となるのは器高が計測できた8点の土器である。その計測値を2cm単位



第40図 壺形土器の器高の分布



第41図 壺形土器の部位直径の分布

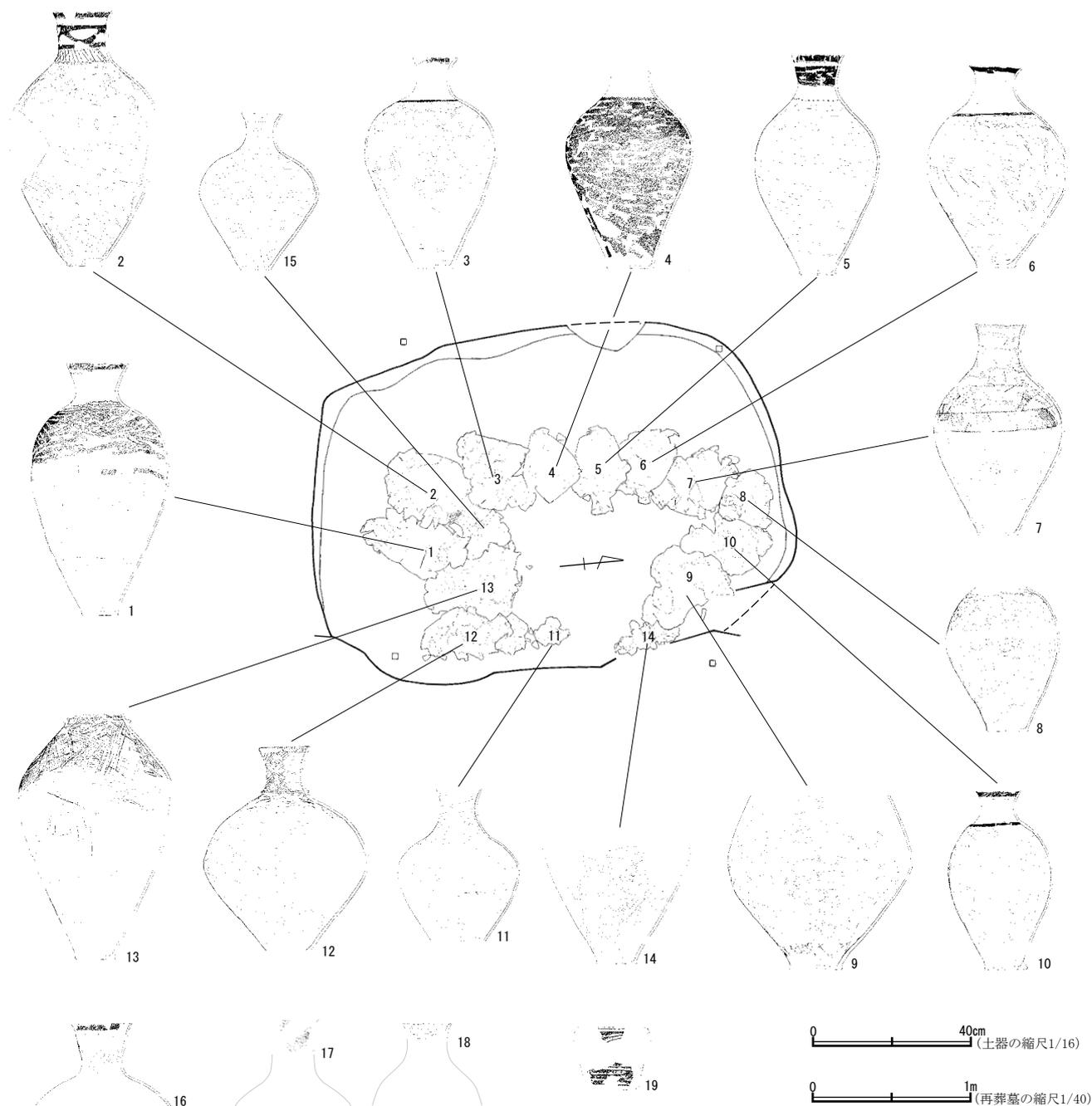
の分布で見た集中と分散から、法量を大・中・小の3つに分類した(第40図1)。

**大型**…器高64～66cmの範囲(土器1・2)

**中型**…器高50～58cmの範囲(土器3・5～7)

**小型**…器高38～46cmの範囲(土器10・15)

これを基に推定の可能な6個体が大型(土器14・16)・中型(土器4・12)・小型(土器8・11)に分類され、14個体の内訳は、大型4個体、中型6個体、小型4個体となる。

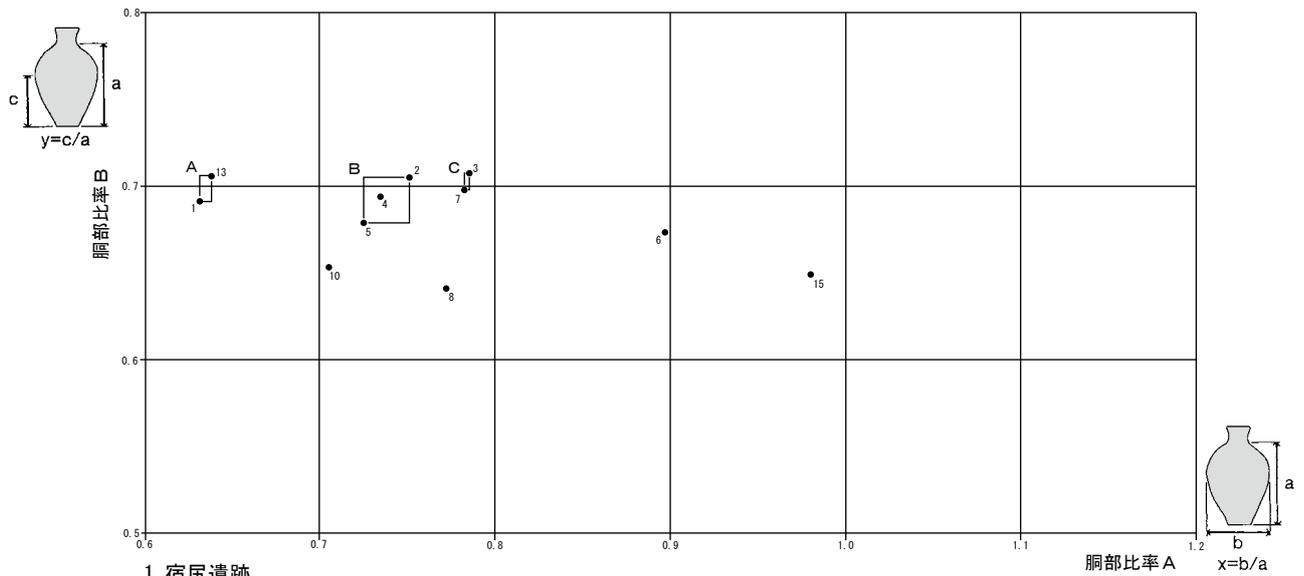


第42図 宿尻遺跡第1号土坑の土器群

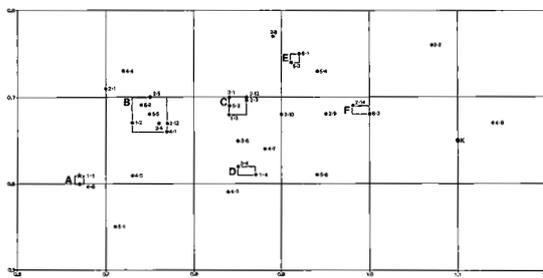
土器9・13は、泉坂下の超大型（第40図2）に相当することが考えられ、宿尻の大型は、泉坂下の超大型と大型との中間に位置する。宿尻の中型と小型は、泉坂下の大型の範囲を2分しており、泉坂下にもこの細別は可能であることから、共通した大きさを認めることができる。小野天神前は、大きな土器ほど器高が明らかでなく中型以上を比較できないが、泉坂下と同じく宿尻より小さな壺形土器が組成している。

次に、口縁部最大径、頸部最小径、胴部最大径、底部

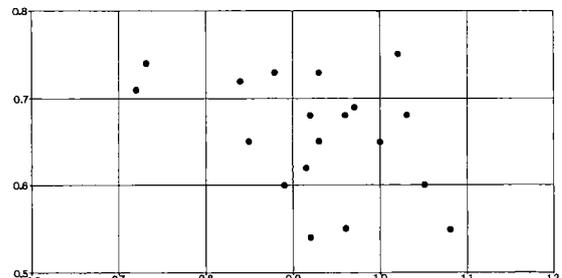
最大径について、部位ごとに計測値の分布を求める（第41図）。集計された土器の数は、その部位の遺存状態により異なる。口縁部直径は±3cmの範囲、頸部直径は±4cmの範囲に集中し、大型から小型まで法量の順序に合致して計測値も分布する。胴部は±11cmの範囲内に、法量の順序に合致しないものが出現しており、胴部の形態が大きく異なる個体を含む。底部直径は±4cmの範囲にあるが、その分布も、法量の順序に合致していない。泉坂下の底部直径は、口縁部直径や頸部直径と同じく計



1. 宿尻遺跡



2. 泉坂下遺跡



3. 小野天神前遺跡

第43図 壺形土器の胴部形態

測値も分布し、器高50cm以上の土器は全てが底径10cm以上であった。土器1は、器高645mmで底径87mm、土器2は器高652mmで底径91mmと、大型の器高に対して底径が著しく小さな個体を含むことが、宿尻遺跡の特徴として指摘できる。

### 3 土器の形態

壺形土器の胴部長に対する胴部最大径の比率（「胴部比率A」）、胴部長に対する胴部最大径までの高さの比率（「胴部比率B」）、この2つを指標として胴部形態を検討する。胴部比率Aは、「球胴」であれば1.0前後の数値、「長胴」であれば低い数値を示す。胴部比率Bは、肩が張るような形態であれば数値が高く、下膨れのような形態であれば数値が低くなる。胴部比率A・Bの数値が接近した複数個体の胴部形態を類型として抽出した（第43図1）。

**胴部形態A**…胴部比率Aが0.63～0.64、胴部比率Bが0.69～0.71の範囲（土器1・13）

**胴部形態B**…胴部比率Aが0.73～0.75、胴部比率B

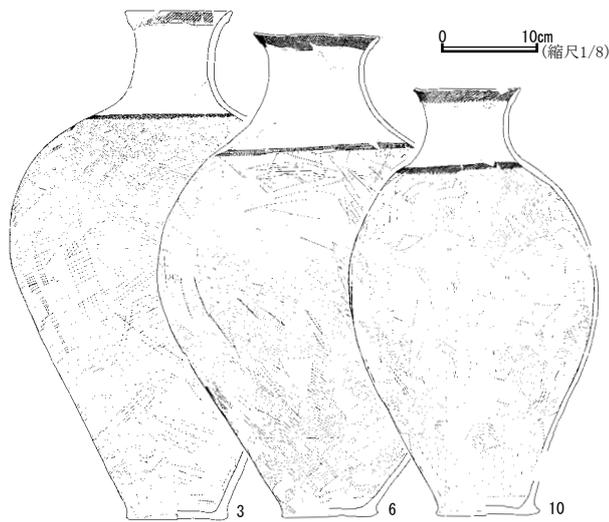
が0.68～0.70の範囲（土器2・4・5）

**胴部形態C**…胴部比率Aが0.78～0.79、胴部比率Bが0.70～0.71の範囲（土器3・7）

胴部長が計測できないことから分析の対象とならなかった土器12は、胴部比率Aが1.0前後、胴部比率Bが0.6前後と推定される球胴、土器9は、胴部比率Aが0.78～0.84、胴部比率Bが0.46～0.49と想定される下膨れの形態である。泉坂下（第43図2）、小野天神前（3）と比較すると、胴部比率Aが0.95以上の球胴が少なく、胴部比率Bが0.72以上の肩が張る形態が見られないことが、宿尻の特徴として指摘できる。

宿尻の胴部形態A・B・Cは、胴部長に対する胴部最大径までの高さの比率が同じく、胴部長に対する胴部最大径の比率が変化する。泉坂下について、これに対応するのが胴部形態B・C・Fである。両遺跡の胴部形態Bは同じ位置にあるものの、宿尻の胴部形態Aは泉坂下に認められず、宿尻は、全体としても長胴である。

「細頸」と呼ばれる頸部は小型の土器15のみで、他



第44図 「宿尻類型」粗製壺形土器

の土器の頸部は全て、内部に腕を入れることができる法量で製作されている。頸部に膨らみを有する壺形は「瓢形」と呼ばれる。宿尻の土器2・5・16は、これに相当し、頸部が残存する15個体の20%を占める。泉坂下の10%, 小野天神前の0と比較して高い比率で出現している。泉坂下の人面付は、この瓢形への造形であり、宿尻の人面付も瓢形に描かれていたことが共通する。泉坂下の「泉坂下Ⅰ期」に位置付けられる第3・4号墓壙の瓢形は膨らみが強く、「泉坂下Ⅱ期」に位置付けられる第1号墓壙から出土した人面付は、顔面部は強く突出するものの、後頭部の膨らみは弱い。海後の人面付は全体的に膨らみが弱く、これが宿尻の瓢形によく似ている。

#### 4 条痕文と縄文

主に沈線で描出された文様構成の部位は、口縁部から胴上部までであり、胴下部には、いずれの土器も条痕文もしくは縄文が施文されている。胴下部が遺存する土器1～15のうち条痕文は14個体で、縄文は土器4のみの1個体であった。泉坂下の「泉坂下Ⅰ期」は第2号墓壙が条痕文4・縄文9・無文1, 第3号墓壙が条痕文4・縄文2, 第4号墓壙が条痕文5・縄文2・無文1で縄文が10～65%, 「泉坂下Ⅱ期」は第1号墓壙が条痕文4, 第5号墓壙が条痕文4・縄文2, 第6号墓壙が条痕文2・縄文1で縄文が0～30%であった。宿尻の10%未満は、「泉坂下Ⅱ期」に近い。但し、胴部の大部分には条痕文が施文されながらも、頸部との境界及び口縁部に縄文

(偽縄文を含む)が施文された特徴的な構成が土器3・6・10の3個体に共通して認められた。3個体はそれぞれ胎土の特徴を異にする。泉坂下, 小野天神前にはこのような構成の土器が報告されておらず、宿尻から半径100km圏内の再葬墓にも見出せなかった。これを「宿尻類型」の粗製壺形土器と呼んで、類例の出現に備えたい(第44図)。なお、泉坂下に特徴的な「泉坂下類型」の粗製壺形土器は、宿尻に組成していない。

条痕文は、主に施文具の原体と施文の効果から、A～Dの4つに分類された。

**条痕文A**…条痕文の沈線がほぼ等しい間隔で並び、概ね沈線幅より間隔が広い。工具止め痕から、原体が貝殻と判明したものがある。(土器2・5等)

**条痕文B**…条痕文の沈線がほぼ等しい間隔で並び、概ね沈線幅より間隔が狭い。工具止め痕から、原体が「刷毛(木理)」と判明したものがある。(土器3・13等)

**条痕文C**…条痕文の沈線幅と間隔が不揃いで、沈線幅より間隔が広い。歯が太い櫛歯状工具による条痕文という印象。(土器8・14等)

**条痕文D**…条痕文の沈線が細く、間隔は広く疎ら。まさに櫛歯状工具による条痕文という印象。(土器1)

土器2・5・11の条痕文Aと土器15の条痕文Bは、胴部全体に右下り斜位の単一方向で、視覚的な効果はほぼ等しい。土器10に観察された頸部の撫で残し部分に条痕文が観察されたことから、本来は土器15のように頸部にも条痕文が及び、無文の頸部はこれを撫で消したことが考えられた。また、条痕文B・Cが併用された土器はいずれも、条痕文Bが胴部のほぼ全体に施文された後に、胴上部を中心として条痕文Cが施文されている。この場合、条痕文Bは、胴部最大径部分にのみ横方向が観察され、これは、成形に伴う調整の痕跡と考えられた。つまり、条痕文A・Bは、基本的には器面調整に伴う痕跡であり、条痕文Cは、その調整された器面への施文に相当する。土器9には、条痕文Cによる格子状の構成も見られた。胴部に沈線文様や条痕文Cを付加しない土器2・5・11・15は、特に胴部全体の器面調整が装飾的に整えられた土器ということになる。条痕文Dは、撫で調整された器面への施文である。胎土Dの土器1のみに認められた。泉坂下では、「泉坂下Ⅰ期」の第3号

墓壙土器2のみが条痕文Aに相当し、ほとんどの土器が撫で調整された器面に施文されている。

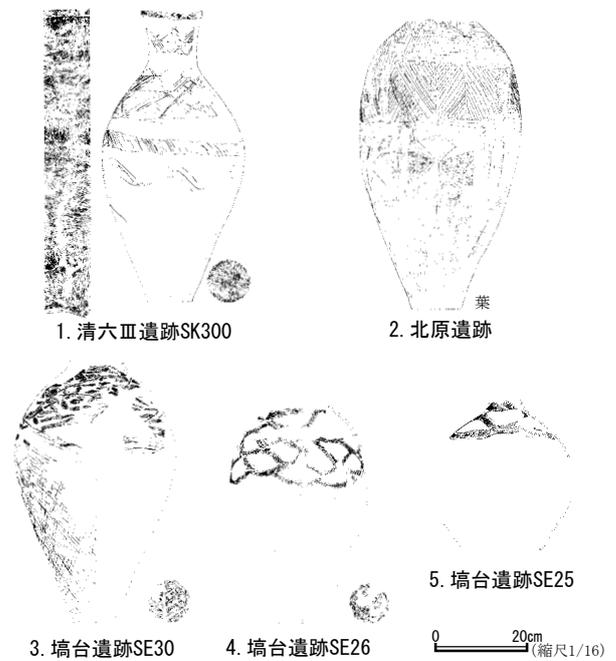
器内面に条痕文が観察されたのは、土器2・3・5・6・8・10・13・16～18の10個体である。泉坂下には「泉坂下Ⅱ期」の第5号墓壙土器3のみであり、宿尻では器面調整として条痕文が多用されたことが、ここにも窺える。土器13が胴部全体、土器2・5・6・8が胴部の一部、土器3・10・16～18が頸部に条痕文を残す。泉坂下の第5号墓壙土器3はほぼ胴部全体であり、頸部の条痕文は、女方の人面付土器に観察された。

縄文は、全て単節斜縄文LRと観察したが、0段の繊維痕が強く印刻されていて無節斜縄文Lと迷うものを含んでいる。結節文を伴うことが特徴的であり(土器1・5・16)、土器16の胴上部では逆に、結節文に伴って縄文の押捺が残されている。単節斜縄文LRが優占することは泉坂下と小野天神前に、結節文を伴うことは泉坂下に共通する。土器6には、植物の花穂を回転させた偽縄文が施されていた。泉坂下及び小野天神前の再葬墓には偽縄文が組成せず、泉坂下第220号土坑の「貉式」には2種の偽縄文が組成している(鈴木編2021)。

## 5 底面痕跡

壺形土器の底面痕跡は、残存する13個体のうち12個体が木葉痕、土器1のみ調整痕であった。深鉢形土器の土器19も木葉痕。土器1は胎土、形態、条痕文とともに底面痕跡も、宿尻の土器群のなかで特異な存在である。泉坂下では、木葉痕を主体としながら、第4号墓壙に網代痕を1個体、第5号墓壙に網代痕と布目痕を1個体ずつ含む。小野天神前では、木葉痕を主体としながら、第14号土坑に網代痕を1個体含む。泉坂下第220号土坑の「貉式」は、木葉痕の2個体を布目痕の3個体が上回る。対して宿尻には、網代痕及び布目痕が組成しない。

木葉痕を押捺した原体に相当する植物の葉については、小幡和男氏の御教示により候補の絞り込みを試みた。葉縁が押捺されないものがほとんどで同定とまでは至らないものの、カシワに共通する特徴の圧痕をカシワ型、トチノキに共通する特徴の圧痕をトチノキ型と表記し、この2つが多い。土器の他の属性との有意な関連は認められていない。

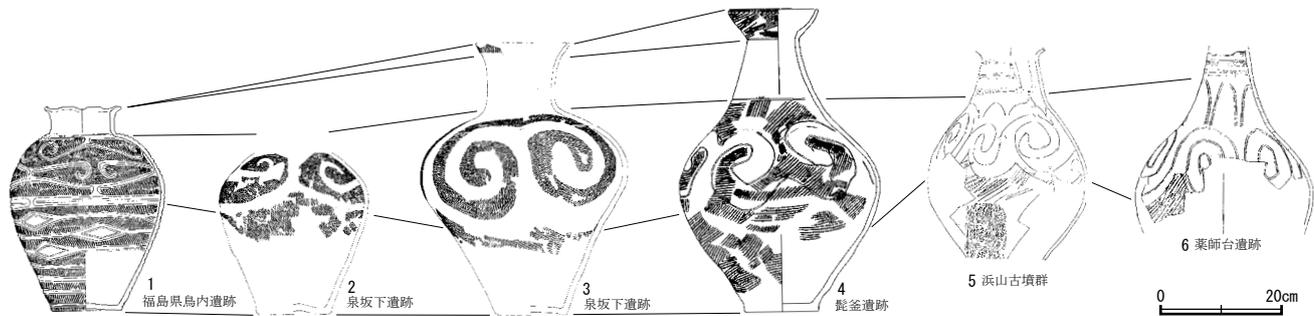


第45図 形態及び文様構成の類例(各報告より引用)

## 6 文様構成の類例

土器7の文様構成については、次の2つを類例として示す。第45図1は、栃木県小山市清六Ⅲ遺跡(上原・篠原1999)のSK300に埋設された9点の1つである。器高631mmで、胴部比率Aが0.62、Bが0.65は宿尻より長胴である。底径は96mm。口縁部から胴中央部まで沈線による文様が構成され、横位多段の区画内が充填されている。特に「重菱形文」「重三角文」と報告された文様が土器7によく似ている。条痕文は「刷毛工具によるナデ」、底面は網代痕。2は、北原の人面付土器であり、再葬墓に伴うものと考えられている。残存高631mm、口頸部を加えれば75cm以上と推定され、胴部比率Aが0.55、Bが0.64は清六Ⅲ(1)よりも長胴である。底径は10cmほど。胴中央部まで沈線による文様が構成され、区画内が充填されている。特に「短線の束を縦横交互に配置」と報告された文様が土器7によく似ている。条痕文は「縦走する粗い条痕」、底面は木葉痕。胴部中央より下方に人面が沈線で描出されている。

土器1の文様構成については、次を類例として示す。3は、千葉県多古町埴台遺跡(荒井2006)のSE30に埋設された2点の1つである。残存高576mmで、口頸部を加えれば器高70cmほどと推定され、胴部比率Aが0.42、Bが0.72は北原(2)よりもさらに長胴である。底径は



双対渦文			同相渦文		
沈線磨消縄文	凹線磨消縄文	磨消縄文帯	沈線区画磨消縄文帯	単沈線	平行沈線
「御代田式」	泉坂下Ⅰ期	泉坂下Ⅱ期	「格式」	「足洗Ⅰ式」	「足洗Ⅱ式」
弥生前期	弥生中期 (前葉)		(中葉)		(後葉)

第46図 渦状文壺形土器の変遷 (各報告より引用)

97mm。胴上部には縄文が施文された後に、結節文のみが斜位に施文される。「三角形を連繋させたモチーフ」の構成が土器1によく似ている。また、「条間が0.7cm前後の櫛歯状工具による」という条痕文もよく似ており、施文具と施文部位は異なるものの、これが格子状を構成することは、宿尻の土器13等の格子状文にも共通する。底面は木葉痕。

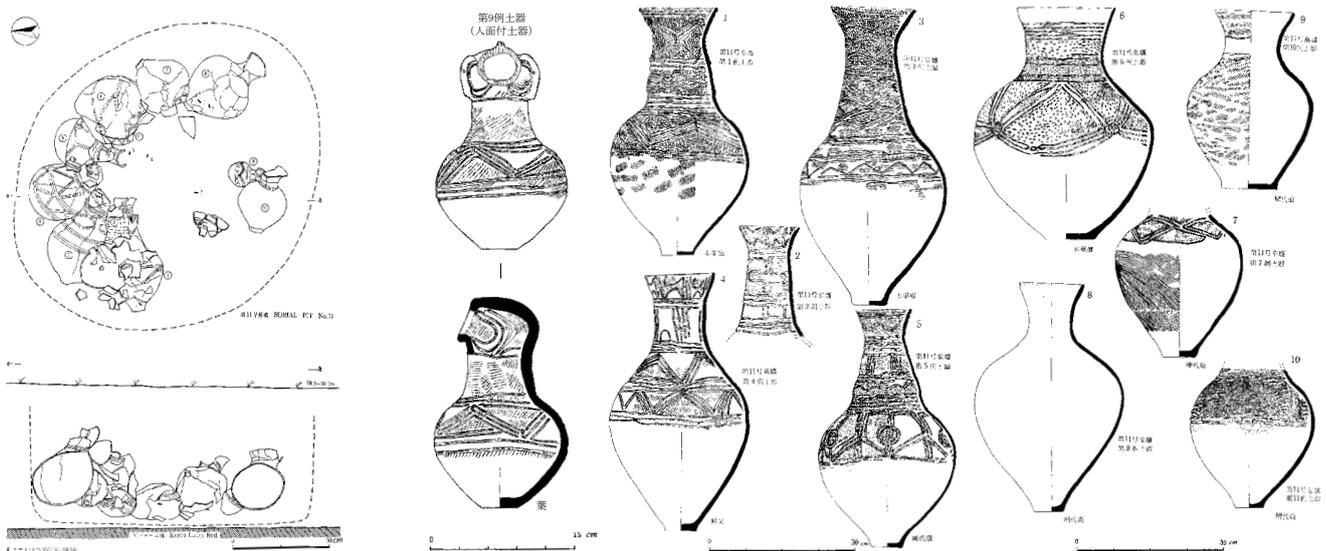
土器2の文様構成については、次の2つを類例として示す。4は塙台のSE26、5はSE25に単体で埋設されていた。4は、残存高533mm、口頸部を加えれば器高65cmほどと推定され、胴部比率Aが0.63、Bが0.60の長胴である。底径は9.5cmほどで、底面は木葉痕。沈線区画の磨消縄文により、4は菱形連繋文、5は三角形連繋文が構成されており、施文部位は異なるものの、特に三角形連繋文が土器2によく似ている。文様の単位数は、2単位が残存して3単位であったことが推定されており、土器2の4単位よりは少ない。頸部が磨消縄文という文様構成は、女方の9号土壇の瓢形壺形土器に検索されたが、これは胴部比率Aが0.89、Bが0.66で胴部形態が異なり、長胴ではない。

以上、土器1・2・7の類例として抽出した土器は、茨城県西部～栃木県南東部の北原・清六Ⅲ、千葉県北東部の塙台という離れた2つの地域に遺跡が分布する。しかしながら、塙台の4・5などは、胎土に白雲母を多量に含むことが異質で、在地の胎土とは異なる。現在までの経験知では、茨城県の筑波山周辺の地域にこのような胎土は特徴的である。製作地の特定は難しいものの、茨城県西部～栃木県南東部の方面に系統を求めておきたい。

その胎土から、土器1は搬入された土器、土器2は在地で製作された土器と推定される。線描画の人面付など泉坂下、小野天神前とは異なる属性の多くも、この方面の系統に由来するのかもしれない。但し、土器12・13の隆帯などは、茨城県西部～栃木県南東部の方面には見られず、小野天神前の人面付土器によく似ている。全てが外来の系統で占められるわけではなく、在地の系統と共通する属性も確かに認められる。

## 7 編年の位置

茨城県北部における弥生時代前期～中期後葉の土器群のうち、渦状文の壺形土器は、渦巻の形象から、逆方向の2つが組合う「双対渦文」と、単一方向を繰返す「同相渦文」とに大別(鈴木正1978)され、中期の中葉以前は「双対渦文」、中葉以後は「同相渦文」を構成する。2つの「渦文」はそれぞれに、描出の方法から細別される。前期の「双対渦文」は、福島県島内遺跡(目黒他1998、第46図1)にあり、2本の沈線文で描出され狭い沈線間の縄文が磨消されている。日立市大沼遺跡(川崎他1977、鈴木2014)の小型鉢形土器の胴下部に施文された太い沈線文、女方(田中1944)の28号土坑の小型壺形土器の胴上部に施文された凹線文に「双対渦文」の変遷を窺うことで、中期前葉の泉坂下第4号墓壙土器2(鈴木編2011、第46図2)の成立に至る。この段階で磨消縄文は、文様の形象に対応して回転方向を変える充填縄文に変化している。渦状文の末端は凹線で、撫で～磨き調整の無文帯が「双対渦文」を構成する。この個体を含む土器群を「泉坂下Ⅰ期」と呼んでいる。泉坂下第6号墓壙土器3(鈴木編2011、



第47図 栃木県出流原遺跡第11号墓墳 (杉原1984より引用)

第46図3)は、渦状文の末端まで幅広の無文帯で、この磨消縄文で「双対渦文」を構成する。この個体を含む土器群を「泉坂下Ⅱ期」と呼んでいる。小野天神前第16号土坑土器9も同じ描出方法による「双対渦文」である(中林2021)。2単位の「双対渦文」にもう1つ渦状文を付加した部分が作図されたことにより、実測図ではS字文のように見えている。次の段階に、沈線区画の磨消縄文帯による「双対渦文」が位置付けられる。大洗町髭釜遺跡の土器(佐藤・井上・宮田1978, 第46図4)を示したが、これは実測図が公表されているものの、詳細が明らかでない。埴台には、沈線区画の「双対渦文」が複数報告されており、これらは、胎土に骨針を多量に含むことが異質で、在地の胎土とは異なる。現在までの経験知では、茨城県の大沼の土器のほとんどは、胎土に多量の骨針を含んでいた(鈴木2014)。日立市十王堂遺跡(清水・齋藤2010)のSK365から破碎管玉とともに出土した土器も胎土に多量の骨針を含み、この土器は、埴台SE9の小型壺形土器に形態と文様の特徴が一致する。埴台へは、茨城県北部から搬入されたと見てよいのであろう。「貉式」と呼ばれるこの段階には、それまで胴部の上部にあった最大径が中部に移動、頸部の括れが胴部との境界から口縁部との境界へと移動、口縁部が外反から内湾に変化など、形態に大きな相異が認められる。また、ひたちなか市貉遺跡(藤本1983)や泉坂下第220号土坑では条痕文が組成せず、付加条縄文、偽縄文の多用など、文様にも

大きな相異が認められる。「泉坂下Ⅱ期」から「貉式」までの変遷には、いくつかの土器群が介在すると考えられる。泉坂下第60号土坑はその有力な候補の1つである(中林2021)が、土器を含めて埋没保存されたことから、詳細を分析することができない。

城里町北方遺跡(川上1976)には、「貉式」の小型壺形土器と条痕文の壺形土器が報告されている。確実とは言い難いものの、共伴であるらしい。「貉式」の小型壺形土器は、沈線区画の「双対渦文」。条痕文の壺形土器は、胴部比率Aが0.65、Bが0.59と長胴で、胎土は白雲母が特徴的である。また、土器1・2の類例を示した埴台遺跡は、「貉式」を含む再葬墓群であった。渦状文の壺形土器を組成しないことから、直接組み込むことはできないが、宿尻遺跡第1号土坑の土器群は、「泉坂下Ⅱ期」より新しく「貉式」までの間に位置付けられる。那珂川流域の近接した小野天神前との関係では、人面付土器を出土した第16号墓墳の土器群より確実に新しい。関東地方における並行関係については、類例を示した清六Ⅲ遺跡SK300の土器群が道標となろう。

#### おわりに

宿尻遺跡第1号土坑には、15～18個体の壺形土器が馬蹄形～環状に埋置されていた。土器群の配置について類例を検索してみると、栃木県出流原遺跡(杉原1981)の第11号墓墳がよく似ている(第47図)。2m×1.5mの範囲から11個体の壺形土器が出土し、土器1～8・11

の8個体が弧状に並ぶ。口頸部のみの土器2が土器1にのり状態、土器1と土器10の間にある個体番号の明らかでない破片などから攪乱も考えられ、本来は11個体以上の土器群がほぼ環状に埋置されていたことも想定される。そのうち土器9は、人面付土器であった。土器群の中央部から管玉が検出されることまでが共通している。これらもまた、栃木県南東部の方面に類例が認められたことになる。

泉坂下遺跡第6号墓壙の土器1内に副葬されていたのは、滑石製の管玉・白玉であった。これが宿尻遺跡第1号土坑では、碧玉を主体とした管玉、翡翠製の白玉に交替している。茨城県北部において土壙墓という墓制に交替する弥生時代中期中葉までの推移を段階的に把握する、そのための事例を宿尻遺跡の調査は追加した。

本稿の成立にあたり、資料の観察では猪狩俊哉氏(日立市郷土博物館)、小澤重雄氏・小川貴行氏(茨城県立歴史館)、戸村勝司朗氏(多古町教育委員会)、文献等の提供では植木雅博氏、品川欣也氏、挿図の製作では西野陽子氏にお世話をいただきました。心より感謝を申し上げます。

#### 参考文献

- 阿久津久 1977『茨城県大宮町小野天神前遺跡(資料編)』学術調査報告書1 茨城県歴史館
- 荒井世志紀 2006『志摩城跡 ―多古町内遺跡群発掘調査報告書―』多古町教育委員会
- 荒井世志紀・鬼澤昭夫・黒沢哲郎・戸村勝司朗 2006『志摩城跡・二ノ台遺跡Ⅰ ―経営体育成基盤整備事業島地区に伴う発掘調査報告書―』(第99集)香取郡市文化財センター
- 石川日出志 2004「茨城県北原遺跡再葬墓の研究」『明治大学人文科学研究所紀要』第54冊 4-45頁
- 井上義安 1966「勝田市薬師台における弥生式遺跡」『ひたちじ』No.4 1-2頁
- 植木雅博 2021『仮称天神前式土器と周辺資料の現状整理』弥生時代研究会 Online 学習会
- 上原康子・篠原祐一 1999『清六Ⅲ遺跡Ⅰ ―渡良瀬川下流域及び思川流域下水道処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査―』(第226集)栃木県教育委員会
- 川上博義 1976「桂村北方出土の古式弥生式土器」『常総台地』7 47頁
- 川崎志郎・佐藤政則・大平達雄・小室 勉 1977『日立市大沼遺跡発掘調査報告書』(第3集)日立市教育委員会
- 川崎純徳・川上博義・瀧田 宏 1970「茨城県海後遺跡出土の人面土器」『常総台地』5号 20-22頁
- 黒沢晴彦・川井正一・市毛美津子 1988『浜山古墳群発掘調査報

- 告書 ―1号墳・2号墳―』旭村教育委員会
- 佐藤次男・井上義安・宮田 毅 1978「入門講座 弥生土器 ―関東 東関東1―」『考古学ジャーナル』No.146 15-22頁
- 清水 哲・齋藤貴史 2010『十王堂遺跡 ―主要地方道日立笠間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書―』(第332集)茨城県教育財団
- 杉原荘介 1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓』明治大学文学部研究報告考古学第8冊 明治大学
- 杉原荘介・大塚初重 1974『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部研究報告考古学第4冊 明治大学
- 鈴木正博 1978「赤浜覚書」『常総台地』9 1-23頁
- 鈴木素行 2010「続・部田野のオオツタノハ ―茨城県域における弥生時代「再葬墓後」の墓制について―」『古代』第123号 1-51頁
- 鈴木素行編 2011『泉坂下遺跡の研究 ―人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について―』(私家版)
- 鈴木素行 2014「縄文時代とのつながり 始まりと終わりの弥生土器」『ミッション!!「東日本の弥生時代を解明せよ!!」』常陸大宮市歴史民俗資料館 10-12頁
- 鈴木素行編 2021『泉坂下遺跡Ⅶ ―保存整備事業に伴う第6次確認調査報告―』(第35集)常陸大宮市教育委員会
- 田中中国男 1944『弥生式縄文式接触文化の研究』(1972年大塚工藝社の復刻による)
- 中林香澄 2021「弥生時代 ―第220号土坑発掘に伴う再葬墓以外の土坑に関する考察―」『泉坂下遺跡Ⅶ』(第35集)常陸大宮市教育委員会 121-129頁
- 藤本弥城 1983『常陸那珂川下流の弥生土器』Ⅲ (私家版)
- 目黒吉明他 1998『鳥内遺跡発掘調査報告書』(第16集)石川町教育委員会

## 2 宿尻遺跡第1号土坑の管玉について

### はじめに

宿尻遺跡の第1号土坑からは、15点の土器が口縁を中心にに向けた状態で略馬蹄状に並んで出土し、その中央に破碎された状態の管玉や碎片が多く出土している(第48図)。全国の弥生時代の再葬墓に副葬されるものとして代表的な遺物に管玉が存在するのは、過去の多くの調査によって周知の事実であると思う。先程まで紐で繋がっていたかのように整然と並んだものや、数点の管玉が土器内に収められるなど、出土状況は様々だ。その中でも特徴的なものが、故意に破壊された状態で出土する管玉である。このような破碎された管玉(以下、「破碎管玉」とする)が確認されている遺跡は、福島県を中心に北関東に多く所在しているようだ。今回調査された宿尻遺跡は、新たに確認された破碎管玉を伴う再葬墓である。

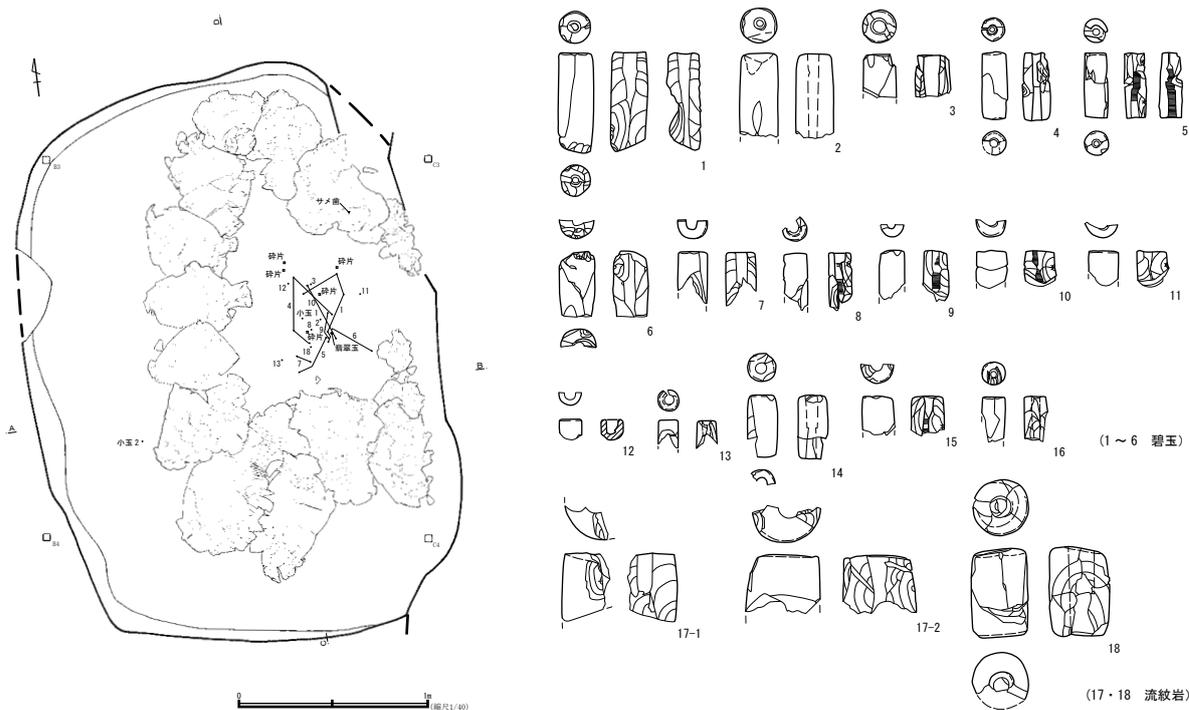
本稿では、破碎管玉について確認できた特徴を報告するとともに、茨城県を中心に弥生時代再葬墓での破碎管玉出土例をあげ、その特徴を考察するものである。

### 1 破碎管玉の概要

第1号土坑で出土した管玉の碎片は、出土位置がわか

る資料33点、覆土や出土位置が不明な資料が6点、土坑内で採取した土壌の水洗選別より抽出されたものが108点となり、合計147点が確認されている。その中で接合し図示できたものが18点(第48図)、水洗資料で小さく図示はできなかったが、一単位として数えることができるものが1点の合計19点の管玉が存在することがわかっている。図示できた18点の管玉の石材は、16点が碧玉<sup>註1</sup>、2点が流紋岩<sup>註2</sup>である。

碧玉製管玉16点のうち、直径が9~10mmの大型のものが4点(第48図-1~3・6)、7~8mmの中型が5点(第48図7・10・11・14・15)、5~6.5mmの小型が7点(第48図4・5・8・9・12・13・16)となる。接合が全てできなかったため、全体の大きさがつかめない資料が多いが、直径8mm以下の中型と小型の管玉が半数以上であり、直径が9mm以上で長さが20mmを超えるものは2点である。2点の流紋岩製管玉は、灰色と青みが強い薄青緑色でどちらも直径が15mmを超える。碧玉製管玉と比べるとこの2点が異様に太い。水洗選別から抽出された流紋岩の碎片もこの2つの色のもので、この土坑に伴う流紋岩製の管玉はこの2点のみと考えられる。これらの管玉には破碎の時の打



第48図 第1号土坑玉類出土状況と出土管玉

点が観察できるものがあり、その打点が管玉の側面にあること、割れた破面のリングの広がりから横位の状態で打撃を加え破碎されていると考えられる。

## 2 管玉の穿孔痕跡について

完形の管玉であると、穿孔状況を確認するのはなかなか難しいが、全てが破碎された管玉であったため、中の様子を詳しく観察することができた。その結果、穿孔方法に特徴があることが判明した。

**穿孔方法①** 比較的残りが良い碧玉製管玉の断面をみると、上下の孔径がほぼ同じであり、中心に向かうほど孔が細くなっていくのが観察できた。また、中心で孔がずれてうまく交わっていないものも数点確認できた(第49図)。第49図1は第48図9の穿孔部分を写したものである。孔が交わらずに少し食い違っていることがわかる。このことから、管玉は製作時に両側から穿孔されたと考えられる。第49図2は、第48図8を撮影したものである。穿孔方向に対して垂直に走るスジが多く見受けられる。このような穿孔部にスジがある破碎管玉は碧玉製の資料に、一部だけ痕跡がみられるものを含め7点確認された。これは穿孔を行うときについたスジではないだろうか。このように穿孔の痕跡を残すには、穿孔具が石材よりも硬くなければならないだろう。管玉の製作遺跡で知られる石川県小松市の八日市地方遺跡では、安山岩製と瑪瑙製の石針が出土している(下濱他2014)。安山岩製の石針は硬い碧玉の穿孔に、瑪瑙製は比較的柔らかい緑色凝灰岩の穿孔に使用したとされている。穿孔には金剛砂のような媒体を使用し、石針の回転運動の摩擦によって孔を穿つと考えられており、錐のような役割というよりは、砥石のように使用したのではないかと報告書には記されている。宿尻遺跡の管玉の穿孔痕と八日市地方遺跡の遺物を比較できていないため、断言はできないが、このような方法で穿孔され穿孔痕がスジ状に残ったのではないだろうか。

**穿孔方法②** 流紋岩製管玉の第48図18は中心に向かって細くなり、中心で合流しているため両側穿孔であることは間違いないだろう。しかし、穿孔の痕跡を観察すると、うまく合流せず貫通できなかった部分に、中心が突出しその周りが溝状にへこんでいるような痕跡が確認された(第49図3)。これは棒状のような工具ではなく、

中心に孔の空いた管状の工具で穿孔した痕跡であると考えられる。碧玉製管玉の穿孔がうまく交わらなかった部分は、平らになっており、この流紋岩製管玉にしかない特徴である。第48図17は中心部分が残っていないため、穿孔具の痕跡は確認できないが、18とほとんど同じ大きさで色は違うが石材も同じであるため、管状の穿孔具を使用している可能性もあるだろう。

**光沢を帯びる穿孔部** 穿孔部にスジがある碧玉製の破碎管玉は7点確認されたと前述したが、残りの9点には穿孔部分に光沢を帯びていることが確認された。第49図4は第48図1を拡大したものである。穿孔痕が残らず、光沢を帯びて艶がある。これは、管玉が紐に通されて使用されていた紐ずれの痕跡ではないかと考えられる。孔径が大きくても4.5mmの中を磨いたと考えるのは難しいだろう。また、第49図5は光沢を帯びた部分と穿孔痕が残る破碎管玉の例である。全体が光沢を帯びる穿孔痕と、一部に穿孔痕が残る破碎管玉には使用年月が関係しているのではないだろうか。穿孔痕が残らず全体的に光沢がある資料は例えば、代々引き継いで大事に使用された後に破碎され、スジ状の穿孔痕が残る資料はあまり長くは使用されずに、破碎されてしまったのかもしれない。しかし、今の段階では紐ずれということは断言できない。管玉が出土する遺跡の穿孔内を観察し、消費遺跡と生産遺跡で痕跡に違いがないか検討する必要がある。今後の課題としておきたい。

## 3 茨城県における破碎管玉について

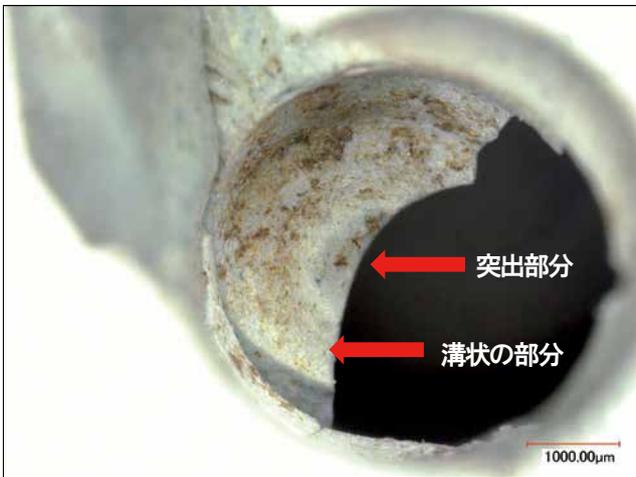
東日本では、弥生時代の再埋葬から破碎管玉の出土例が多く確認されている。茨城県内で知られている、弥生時代の再埋葬は、常陸大宮市の中台遺跡・小野天神前遺跡・泉坂下遺跡、城里町北方遺跡、那珂市海後遺跡、筑西市北原遺跡・女方遺跡、稲敷市殿内遺跡があるが、そのうち破碎された管玉が出土しているのは、宿尻遺跡と女方遺跡のみである。泉坂下遺跡からは遺構外のトレンチから管玉が1点出土しているが、破碎はされていなかった(後藤他2015)。その他に再埋葬ではないが、破碎管玉が出土する遺跡が2ヵ所確認できた。今回は、宿尻遺跡の破碎管玉と比較するため調査した茨城県内の破碎管玉についてここで述べておく。また、栃木県佐野市の出流原遺跡から出土した破碎管玉についても実見するこ



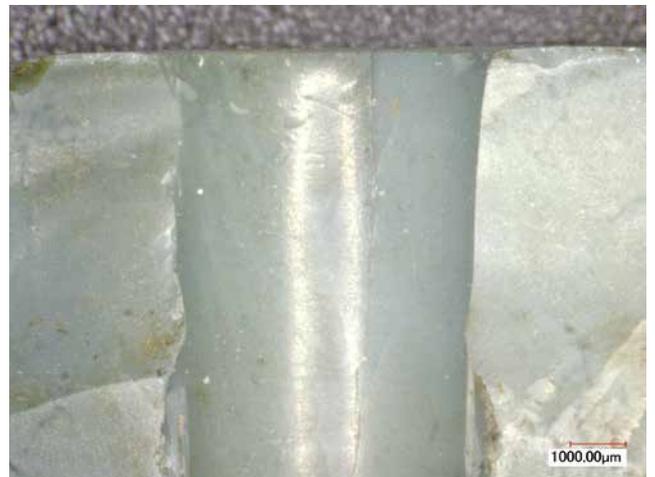
1. 両側穿孔での食い違い (第 48 図 9)



2. 穿孔時についたスジ状の痕跡 (第 48 図 8)



3. 管状の穿孔具の痕跡 (第 48 図 18)

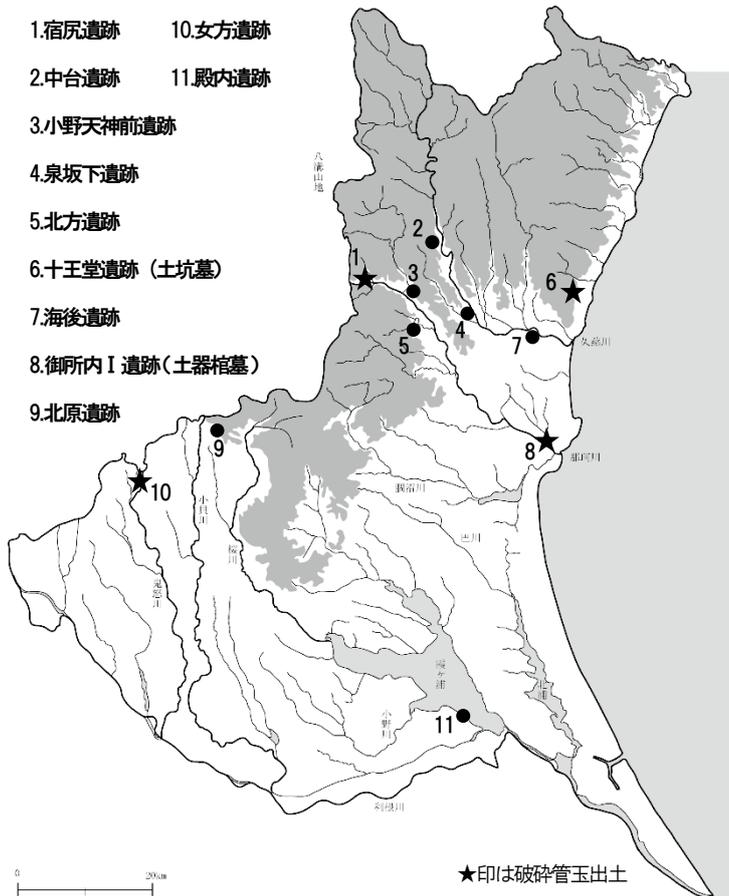


4. 光沢を帯びた穿孔内 (第 48 図 1)



5. 光沢部分とスジ状の痕跡が残る穿孔部 (第 48 図 1)

第49図 管玉穿孔部の顕微鏡拡大写真



第50図 茨城県の再葬墓と破砕管玉出土遺跡の分布

とができたので、参考として触れておく。今回観察した管玉についての計測値や観察内容は第5表を参照していただきたい。

**女方遺跡** 筑西市の鬼怒川を臨む右河岸段丘状に位置する弥生時代中期の再葬墓で顔面付壺形土器が出土している。1939年に田中國男によって行われた調査では38点の管玉が出土し、そのうち33点が土器内で5点は土坑内や表面採集したものと報告されている(田中1944)。33点の管玉のうち11点が破砕された管玉である(第51図、第52図1~11)。破砕管玉は7カ所の竪穴から出土しており、全てその中の出土土器内から検出されている。顔面付壺形土器からは2点管玉が出土しているが、破砕はされていない。土器内から検出される管玉は多くて3点であり、完形の管玉が検出される土器に破砕管玉は含まれない。破砕管玉11点のうち6点は縦方向、2点は横方向に割れていた。残り3点は碎片であったため割れた方向は不明である。報告では石材は碧玉とあり、目視での観察ではあるが、宿尻遺跡の碧玉製破砕管玉と比べると、色調がとてもよく似ている。さらに、宿尻遺跡

で確認されたスジ状の穿孔痕が4点の資料に確認された。完形の管玉を含めて基本的には碧玉が使用されているようだが、破砕管玉11点中1点、おそらく碧玉ではない碎片があった(第51図-11)。色調が他のものよりも明るく薄い青みが強い青緑色である、宿尻遺跡の流紋岩製の資料と似ているが、確証はない。

**十王堂遺跡** 日立市の多賀山地麓の海岸台地上に位置し、縄文時代晚期や平安時代の竪穴住居が確認されている。その中に弥生時代中期と考えられる土坑墓が検出されている(清水他2010)。長軸1.45m、短軸1.32mの土坑墓からは器高27.4cmの壺形土器と8点の破砕管玉が出土し、土器は土圧で潰れた状態でその状況から正位で据えて置かれていたと考えられている。破砕管玉は土器よりも離れた西側の狭い範囲で出土し、その周辺には微量のベンガラも検出されている。8点の破砕管玉のうち5点が碧玉、2点が流紋岩、1点が変成岩<sup>註3</sup>、最大は直径19.0mmの碧玉製管玉である(第52図12~19)。流紋岩製の破砕管玉1点は灰色で、宿尻遺跡の

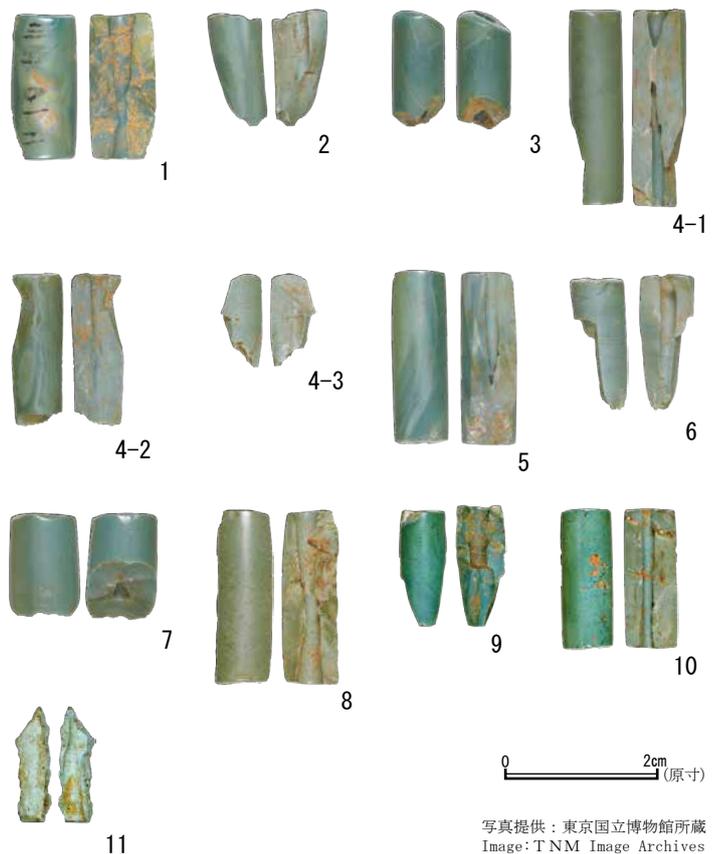
ものと色調が似ているが大きさは宿尻が直径18.0mmに対して13.0mmと少し小さい。かなり破砕され、接合し復元された状態だったため破面の観察はできなかったが、最大径の破砕管玉は側部に打点と思われる痕跡があり、横から破砕している可能性がある。接合された破砕管玉以外に、多くの碎片が検出されている。

**御所内I遺跡(柳沢遺跡)** ひたちなか市の那珂川と中丸川に挟まれた三反田丘陵の台地上にあり、1971年に実施された発掘調査では柳沢遺跡とされているが、現在は遺跡名が変わり御所内I遺跡と呼ばれている。遺跡からは土器棺が4点出土しており、その中の第3号甕棺内から管玉が1点(第52図20)出土している(井上・佐藤1972)。報告では碧玉製で表面に自然か人工によるものか不明の傷があるとされる。管玉の所在が不明のため傷が破砕行為によるものなのか、現在は判断ができないが、参考としてここに記しておく。

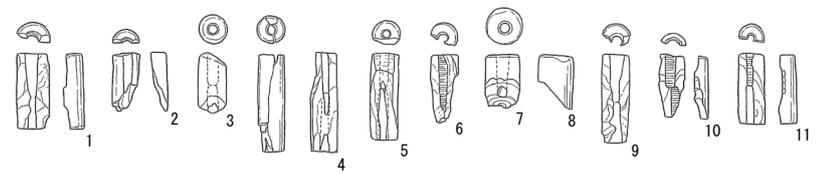
**出流原遺跡** 栃木県佐野市の足尾山地最南端の標高60mの台地上に位置する弥生時代中期の再葬墓である。遺跡からは、顔面のような口縁部をもつ壺形土器が出土

し、出土品は管玉を含め国指定重要文化財となっている。管玉は50点出土しており、そのうち破砕の痕跡が見られた管玉は9点である（第52図-21～29）<sup>註4</sup>。破砕管玉は4基の墓壙から確認されている。破砕管玉について報告書をもとに、次のように出土状況を整理した（杉原1981）。第2号墓壙からは8点の管玉が出土し、うち1点が破砕管玉で墓壙内の覆土からでている。第6号墓壙からは4点の管玉が出土し全て破砕されている。1点は土器の間に挟まるように出土し、2点は墓壙の下層に分布している。第11号墓壙は、顔面付壺形土器が出土している遺構で、7点の管玉が出土し1点が破砕管玉である。この墓壙の土器は9個体が弧状に並び、破砕管玉はその中央付近から出土している。6点の完形管玉のうち4点は土器内からの出土である。第23号墓壙からは3点の管玉が出土し、2点が破砕管玉である。2点とも土器片の上に位置するように出土している。以上の出土状況をみると、土器近くや破片の上に位置するものが多く、土器内にあったものの可能性も高いが、攪乱をうけている墓壙もあるようなので、実態は不明である。管玉の破砕は割れた破面の観察から縦方向の打撃によって行われていると考えられる。穿孔部分のスジ状の痕跡はみられず、光沢がある資料が6点確認できた。管玉の一部は産地同定が行われており、分析の結果石川県小松市の菩提・滝ヶ原産地のものの可能性が高いと推定されている（中村他2017）。

以上の宿尻遺跡を含めた4遺跡の破砕管玉のうち、女  
方・出流原は破砕管玉が土器  
内から出土し、宿尻・十王堂  
は土坑内から出土するとい  
うことがわかった。しかし、女  
方遺跡と出流原遺跡の調査は



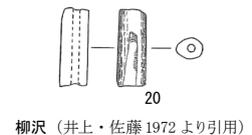
第51図 女方遺跡出土破砕管玉写真



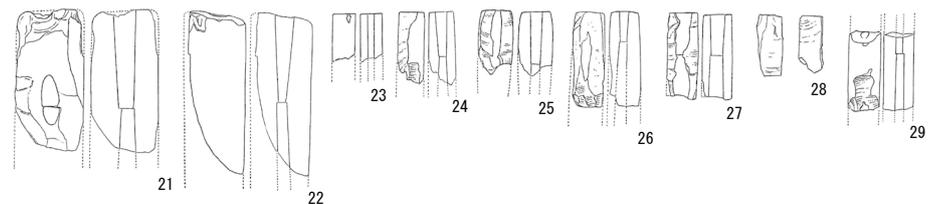
1～11 女方（設楽 2008 より引用し構成）



12～19 十王堂（清水他 2010 より引用し構成）



柳沢（井上・佐藤 1972 より引用）



21～29 出流原（杉原 1981 より引用し構成）



第52図 茨城県内と栃木県出流原遺跡出土破砕管玉

第5表 各遺跡の破碎管玉計測・観察表

女方遺跡

第51図	出土位置	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	石材	状態	備考
1	第10号竪穴-58号土器	—	—	19.0	8.5	—	碧玉	縦半分	①
2	第14号竪穴-76号土器	—	—	15.0	7.0	—	碧玉	縦半分の一部	②
3	第19号竪穴-113号土器	8.0	3.0	15.0	7.0	—	碧玉	横半分以上	①
4-1	第20号竪穴-118号土器	—	—	25.5	7.0	—	碧玉	縦半分	①
4-2	第20号竪穴-118号土器	—	—	20.0	6.5	—	碧玉	縦半分	①・③
4-3	第20号竪穴-118号土器	—	—	12.0	6.0	—	碧玉	碎片	①・③
5	第20号竪穴-118号土器	7.5	3.0	22.5	7.0	—	碧玉	縦半分	①
6	第20号竪穴-118号土器	—	—	18.0	7.0	—	碧玉	縦半分の一部	①・③
7	第20号竪穴-118号土器?	9.5	4.5	13.0	14.0	—	碧玉	横半分	②・④
8	第20号竪穴-118号土器?	—	—	23.0	7.0	—	碧玉	縦半分	①・④
9	第25号竪穴-163号土器	—	—	15.0	6.0	—	碧玉	縦半分の一部	①・③
10	—	—	—	18.0	6.5	—	碧玉	縦半分	①・③
11	第38号竪穴-218号土器	—	—	15.0	4.0	—	?	碎片	②

\*計測値については破碎資料のため最大部分を計測したものである。  
\*石材は田中國男の報告によるものである。(備考項目)  
①両側穿孔 ②穿孔方法不明 ③穿孔痕が残る ④穿孔部に光沢がある

出流原遺跡

第52図	出土位置	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	石材	状態	備考
21	第11号墓塚	16.5	6.0	35.0	17.0	9.6	碧玉	縦半分	①
22	第23号墓塚	—	6.0	42.0	14.0	7.6	碧玉	縦半分の一部	①・④
23	第2号墓塚	(2.0)	13.0	6.0	0.9	—	碧玉	横半分以上	②・③
24	第6号墓塚	—	2.5	19.0	6.5	1.0	碧玉	縦半分	①・④
25	第6号墓塚	—	3.0	17.0	8.0	0.9	碧玉	縦半分	①・④
26	第6号墓塚	—	2.5	25.0	7.5	1.2	碧玉	碎片	①・④
27	第6号墓塚	7.5	—	23.0	7.5	1.1	碧玉	縦半分	①・④
28	第23号墓塚	—	—	16.0	6.0	0.5	碧玉	縦半分の一部	②・④
29	—	9.5	4.5	13.0	14.0	—	—	—	—

\*計測値については破碎資料のため最大部分を計測したものである。  
\* ( )内は推定値。  
\*28は未確認のため報告実測図をもとに計測。  
\*石材は杉原壮介の報告によるものである。  
(備考項目)  
①両側穿孔 ②穿孔方法不明 ③穿孔痕が残る ④穿孔部に光沢がある

かなり前のものであり、土坑内に他の碎片がないとはいえない。宿尻遺跡については、土坑内覆土を水洗選別し多くの碎片が検出され、十王堂遺跡は管玉が固まって狭い範囲に出土したため碎片も多く取り上げられたという事実のみしか今の段階では言えない。これから見つかるかもしれない破碎管玉を伴う再葬墓で覆土中も調査する類例が増えれば、出土状況の傾向が掴めるだろう。一つ確かなことは、管玉の破碎方法としては、縦方向と横方向の違いはあるが、管玉がおおよそ半分の状態まで破碎されているということだ。

4 破碎行為と石材について

**管玉の破碎行為** 前述で、宿尻遺跡と十王堂遺跡の破碎管玉は土坑内から出土していることをあげた。十王堂遺跡は、土坑の端寄りに狭い範囲で出土し、土坑底面から浮いた覆土中から検出されている。宿尻遺跡はこの出土状況と類似しており、略馬蹄状の土器列の中央の狭い範囲に土坑底面から浮いた覆土中から出土している。両

十王堂遺跡

第52図	出土位置	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	石材	状態	備考
12	第365土坑	19.0	2.0	28.0	18.0	16.1	碧玉	接合資料	両側穿孔
13	第365土坑	11.0	4.5 3.5	36.0	10.5	6.0	碧玉	接合資料	両側穿孔
14	第365土坑	13.0	4.0	28.0	13.0	6.9	碧玉	接合資料	両側穿孔
15	第365土坑	13.0	6.5 3.5	24.0	13.0	5.3	流紋岩	接合資料	両側穿孔
16	第365土坑	13.0	5.5	25.0	13.0	2.5	流紋岩	接合資料	両側穿孔
17	第365土坑	9.0	2.5 1.5	21.0	8.5	2.2	碧玉	接合資料	両側穿孔
18	第365土坑	8.0	2.5 3.0	22.0	8.0	2.4	碧玉	接合資料	両側穿孔
19	第365土坑	11.0	(4.5)	21.0	11.0	2.0	変成岩	接合資料	両側穿孔

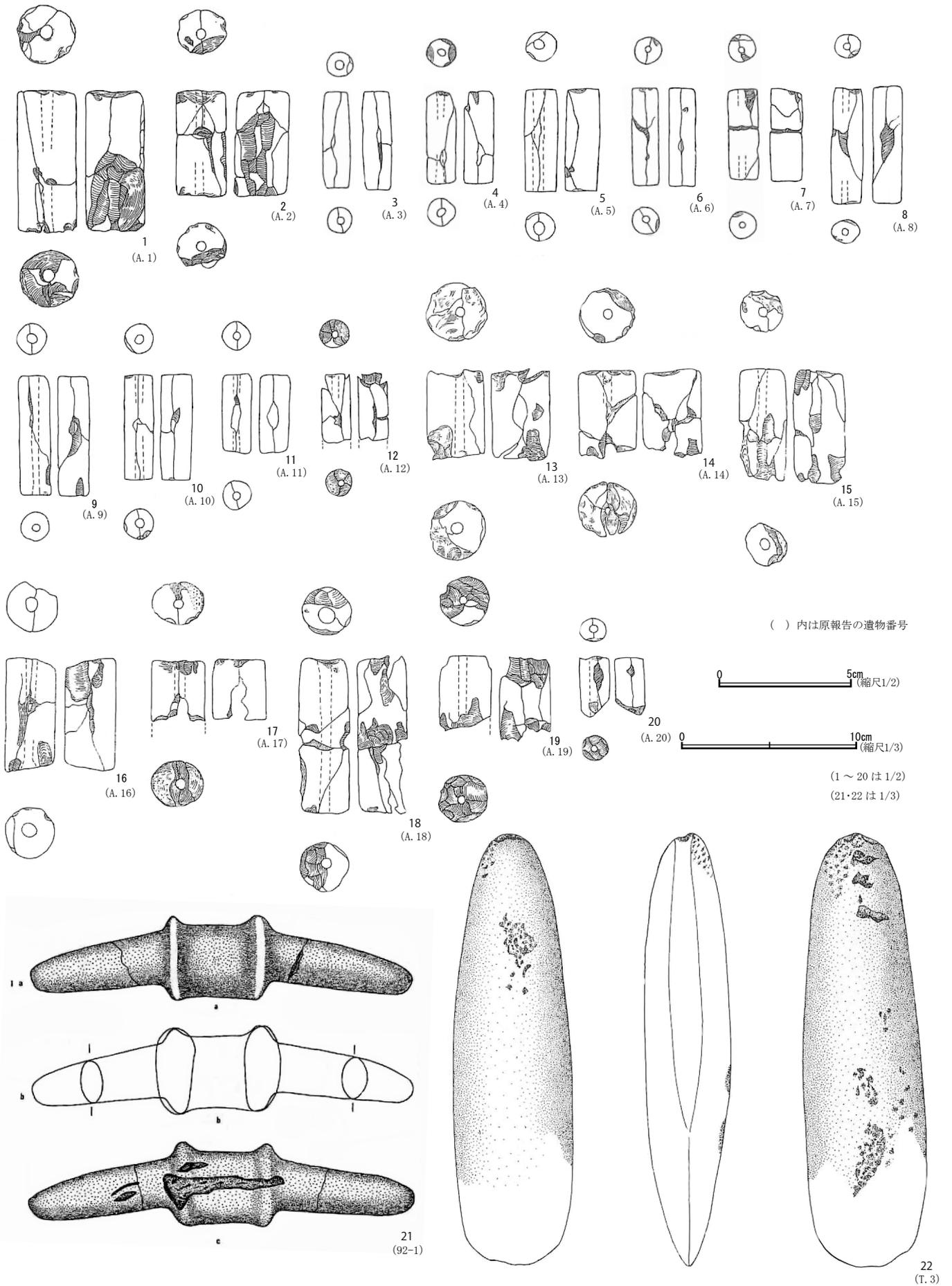
\*計測値は孔径と幅を新規で計測、その他は報告書を参考にした。  
\*石材は田切美智雄氏の鑑定によるものである。  
\* ( )内は推定値。

御所内 I (柳沢) 遺跡

第52図	出土位置	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	石材	状態	備考
20	A トレンチ4区-3号喪棺	7.0 5.5	1.6	20.0	4.0	—	碧玉	ほぼ完形	—

\*管玉の所在が不明のため、報告書から数値を割り出した。

遺跡とも多くの碎片が検出されていることをみると、土坑を少し埋めた段階で破碎された管玉が撒かれたのではないかと考えられる。管玉を破碎してそれを撒いたという事例の一つとして、破碎管玉の出土状況が良く示されているのが、福島県金山町の宮崎遺跡である。宮崎遺跡は、福島県の西部に流れる只見川の中流域の河岸段丘上に位置する。遺跡からは土器が置ける程度に掘られた土坑に土器が正位に置かれたものが多く出土し、その状況から再葬墓と考えられている(周東1977)。土器の近くからは、細かく破碎された管玉のほかに、破碎された独鈷石と破碎に使用された敲石と考えられる石器が出土している(第53図)。報告文には、上記の遺物が出土している層が、福島県の西部に位置する沼沢火山の噴火によって堆積した火山噴出物であり、その層内に遺物があることから、火山灰等が降下してきている最中に管玉や独鈷石を破碎する祭祀行為が行われたのではないかと考察されている。宿尻遺跡や十王堂遺跡がどのような状況下で破碎行為が行われたか判断することは難しいが、墓という



第53図 福島県宮崎遺跡出土破碎管玉と石器 (周東1977より引用し構成)

性格から祭祀が行われた可能性が高い。現在東日本で確認される再葬墓における破碎管玉については、祭祀が行われた跡と考えられていることが一般的なようだ。

**流紋岩製の管玉について** 宿尻遺跡と十王堂遺跡では、流紋岩製の管玉が確認されていることは前述したとおりである。しかし、流紋岩の管玉の出土例は非常に少なく、この2遺跡以外確認が取れていない。弥生時代中期に一般的に普及している管玉は碧玉や緑色凝灰岩であり、それらの石材を使用した製作遺跡も多く確認されている(寺村2004)。田切氏によれば、流紋岩自体は茨城県の久慈川周辺でも採取することは可能であるという。しかし、今のところ流紋岩を使用した管玉製作遺跡は確認されていない。流紋岩を使用した玉製作の遺跡には、福島県福島市の勝口前畑遺跡があるが、管玉は製作されておらず、勾玉を主として製作していたようである。遺跡からは勾玉未製品や流紋岩の角柱体や砥石など、製作に関連する遺物が多く出土している(今野1997)。流紋岩を使用した管玉については不明な点が多く、今後出土例を集成し、検討する必要がある。

## まとめ

宿尻遺跡の破碎管玉について分析するにあたり、茨城県内の出土例を中心に検討してきたが、破碎行為が行われる分布圏や性格を検討するには、東日本を広く集成する必要がある。また、流紋岩製の管玉も不明な点が多く今後出土例が増えることを期待したい。今回の宿尻遺跡の破碎管玉の分析を第一歩とし、今後各遺跡の破碎管玉を検討し、さらに土器とも関連付けて分析するのが今後の課題である。(田中美智)

**謝辞** 本稿の執筆にあたり、資料観察や鑑定でお世話になりました、田切美智雄氏・猪狩俊哉氏(日立市郷土博物館)、品川欣也氏・飯田茂雄氏・菊池望氏(東京国立博物館)、忽那敬三氏(明治大学博物館)、石材に関してご助言いただきました、荒木隆氏(じょーもびあ宮畑)、斎藤あや氏(大田区立郷土博物館)、並びに調査に参加させていただき、ご指導いただきました鈴木素行氏に心より感謝申し上げます。

**註1** 宿尻遺跡の破碎管玉は全て茨城大学名誉教授の田切美智雄氏に鑑定していただいた。

**註2** 破碎資料のため直径の大きさは推定したものも含まれている。

**註3** 宿尻遺跡の石材を日立市郷土博物館にて鑑定していただい

た際に、十王堂遺跡の管玉を拝見し、同時に石材も鑑定していただいた。

**註4** 第52図29は明治大学博物館で所蔵しておらず、実見できなかった。

## 参考文献

- 石川日出志 2008「⑥再葬の儀礼」『儀礼と権力』弥生時代の考古学7 同成社 85-97頁
- 井上義安・佐藤次男 1972『柳沢遺跡調査報告』那珂湊市文化財調査報告1 那珂湊市教育委員会
- 茨城県立歴史館 1991『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県
- 今野賀章 1997『勝口前畑遺跡7 一福島西土地地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告IV一』福島市埋蔵文化財報告書 第99集 福島市教育委員会
- 白井万紀 1989「再葬墓における管玉について」『専修史学』第21号 90-115頁
- 河村好光 2010『倭の玉器 一玉つくりと倭国の時代一』青木書店
- 後藤俊一他 2015『泉坂下遺跡IV 一保存整備事業に伴う第3次確認調査報告一』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書23集 常陸大宮市教育委員会
- 杉原荘介 1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告 考古学 第8冊
- 設楽博巳 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 清水哲他 2010『十王堂遺跡 一主要地方道日立笠間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書一』茨城県教育財団文化財調査報告第332集 財団法人茨城県教育財団
- 下濱貴子他 2014『八日市地方遺跡II 一小松駅東土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一 第3部製玉編 第4部木器編』石川県小松市教育委員会
- 周東一也 1977『岩代国宮崎遺跡』金山町教育委員会
- 田中國男 1942「常陸国女方遺跡の発掘について」『古代文化』第13巻第5号 28-39頁
- 田中國男 1944『彌生式縄文式 接触文化の研究』
- 寺村光晴 2004『日本玉作大観』吉川弘文館
- 中村大介他 2017「明治大学博物館所蔵の碧玉製玉類の産地同定」『明治大学博物館研究報告』第22号 11-22頁
- 藁科哲男他 2016「福島県金山町宮崎遺跡再葬墓出土弥生時代玉類の産地分析」『福島県立博物館紀要』第30号 29-61頁

### 3 宿尻遺跡第1号土坑のサメ歯について

#### はじめに

宿尻遺跡の第1号土坑では、再葬墓に埋置された土器の内部からサメ歯が1点出土した。状況は、重複する縄文時代の遺物が混入した可能性を否定できないものの、本稿では、弥生時代の日本列島におけるサメ歯出土の事例分析から、墓壙に伴う可能性を検討する。

#### 1 宿尻遺跡のサメ歯

第1号土坑に埋置された壺形土器(土器9)から出土したサメ歯(第54図)は、歯冠部表面のエナメル質部分のみが残存する。歯根部は存在せず、歯冠内部は空洞であった。歯根部が形成されない段階の予備歯であったのかについては、骨を納めたと考えられている土器内に埋葬人骨が遺存しないような条件の土壤中に包含されていたことから、判断ができない。残存する長さ(歯冠高方向)10.5mm、幅(歯冠幅方向)7.5mm、厚さ2.5mmで、空洞内に土壌が付着した状態でも重さは0.1g未満である。先端は摩滅して丸みを帯び、切縁も摩滅して鋸歯の不明瞭な部分がある。唇側面の左よりも右の切縁の方に摩滅が進行している。脱落後の水摩によりもたらされた摩滅と考えられることから、捕獲したサメの顎骨から引き抜いたというようなものではない。歯冠部の形態と切縁に鋸歯を有することから、メジロザメ属(*Carcharhinus* sp.)の上顎歯であり、歯列の近位に相当する。

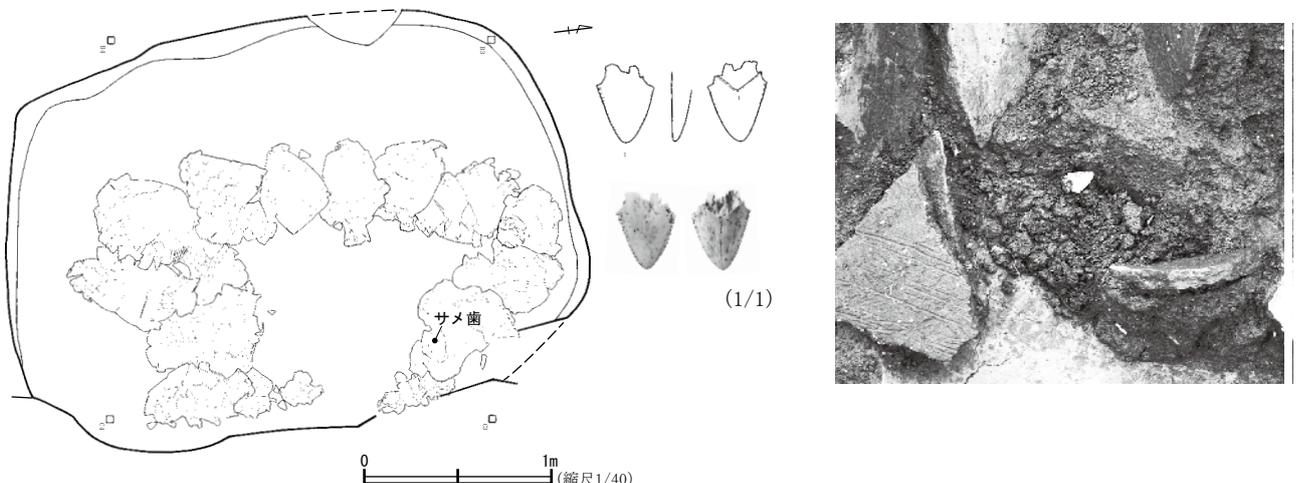
#### 2 遺跡の分布と出土したサメ歯

資料の集成は、弥生時代の日本列島という括りではあるが、併行する続縄文時代の北海道、貝塚時代後期の沖縄諸島、南琉球新石器時代後期の先島諸島についても参考として掲げた。九州については、過去に縄文時代晩期として報告された遺跡のうち「弥生早期」(藤尾2021)に相当する時期を含む。網羅にはほど遠いと思われるが、北海道から沖縄県までに、20遺跡を抽出した(第55図)。7遺跡が九州北部に集中している。

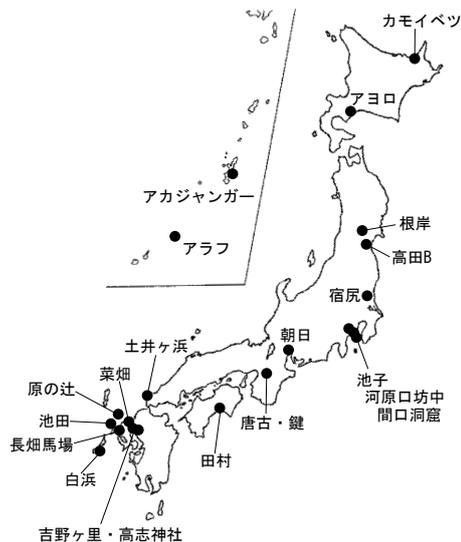
以下には、所在地の北から南へと向かう順序で各遺跡における事例の概要を記述するが、遺跡の所在地については第55図付表を、個々のサメ歯の計測値については第6表を参照されたい。サメ歯は、加工の有無と遺存の状態から、加工の有るサメ歯製品、加工の無いサメ歯、加工の有無が不明なサメ歯の破片に大別され、サメ歯製品は加工の仕様により細別できる。本稿での画像の掲載は、サメ歯製品の牙鏃及びその可能性が考えられるサメ歯の破片(第57図)は歯冠の先端を上向きに、その他(第56図)は歯冠の先端を下向きとしている。

**カモイベツ遺跡**(第56図1) 続縄文時代「宇津内Ⅱ式」の土坑墓GP-3(44号址)底面からサメ歯1点が出土した(阿部他2020)。「アオザメ属かシロワニ属、メジロザメのいずれかかである可能性が高い」(上2020)と記載され、歯冠のエナメル質部分のみが残存する。

**アヨロ遺跡**(第56図2) 続縄文時代「恵山式」の土坑



第54図 宿尻遺跡第1号土坑のサメ歯



遺跡名	所在地	出土遺構	時代時期	文献
カモイベツ遺跡	北海道斜里町	土坑墓	縄文時代	阿部他2020
アヨロ遺跡	北海道白老町	土坑墓	縄文時代	高橋1980
根岸遺跡	宮城県大崎市	土坑墓	弥生時代前期	澁谷1981
高田B遺跡	宮城県仙台市	遺物包含層	弥生時代中期	菅原他1994
宿尻遺跡	茨城県常陸大宮市	再葬墓	弥生時代中期	本書
池子遺跡群	神奈川県逗子市	旧河道	弥生時代中期	山本他1999
河原口坊中遺跡	神奈川県海老名市	竪穴住居跡	弥生時代中-後期	飯塚他2014
間口洞窟遺跡	神奈川県三浦市	遺物包含層		神沢1974
朝日遺跡	愛知県清洲町他	溝	弥生時代中期	宮腰他2000
唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	溝	弥生時代後期	藤田他1992
土井ヶ浜遺跡	山口県下関市	土坑墓	弥生時代前-中期	沖田2013
田村遺跡群	高知県南国市	竪穴住居跡、土坑	弥生時代前-中-後-後期	丸山他2004
菜畑遺跡	佐賀県唐津市	遺物包含層	弥生時代前期	中島他1982
吉野ヶ里遺跡	佐賀県神埼市	甕棺墓	弥生時代中期	澁谷他2016
高志神社遺跡	佐賀県神埼市	甕棺墓	弥生時代中期	堤2000
白浜貝塚	長崎県五島市	遺物包含層(貝層)	弥生時代早-前期	安楽他1980
池田遺跡	長崎県松浦市	遺物包含層	弥生時代早-前期	中田1990
長畑馬場遺跡	長崎県平戸市	不明	弥生時代中期カ	本田他2000
原の辻遺跡	長崎県壱岐市	竪穴住居跡、旧河道	弥生時代中期	福田他2006他
アカジャンガー貝塚	沖縄県うるま市	遺物包含層	貝塚時代後期	金武編1980
アラフ遺跡	沖縄県宮古島市	遺物包含層	南琉球新石器時代後期	松葉編2003

第55図 サメ歯出土の弥生時代遺跡

墓「墓26」底面からサメ歯1点が出土した(高橋1980)。ホホジロザメの上顎歯であり、歯冠のエナメル質部分のみが残存する。先端部が丸みを持ち、切縁の鋸歯も著しく摩滅している。また、表面にはゴカイ類のような海棲生物の生痕が観察された(鈴木2021)。

**根岸遺跡** 前期「山王IV上層式」のBM101-12号土壇覆土から白玉15点、小玉2点とともに「サメ歯」が検出されたことが記載されている(澁谷他1981, 相原・飯塚2020)。サメ歯の詳細は明らかでない。

**高田B遺跡**(第56図3) 中期「榊形囲式」の遺物包含層からサメ歯1点が出土した(菅原他1994)。「アオザメの上顎歯」と記載され、歯冠のエナメル質部分のみが残存する。歯頸付近に2孔一対の穿孔が施され、垂飾と考えられている。

**池子遺跡群**(第56図5) 旧河道のC-IX-88グリッドから中期後半の遺物とともに出土した(飯塚他2014)。ホホジロザメの上顎歯であり、歯根が残る。カラー写真図版では、他の骨角製品と色調が異なり灰色を帯びる。歯根部に2孔が穿孔され、垂飾と考えられている。

**河原口坊中遺跡**(第56図6~11) P19地区YH21号、P20地区YH2・13号、P25地区YH4・12・13号の竪穴建物址、P27地区遺構外から合計8点のサメ歯が出土した(飯塚他2014)。全て歯冠のエナメル質部分のみが残存する。そのうち4点が「アオザメ属?」(6~9)、2点が「メジロザメ科」(10・11)と同定されている(中村2014)。P25地区YH12号のメジロザメ(10)は、歯頸付近に1孔が穿孔され、垂飾と考えられている。これは中

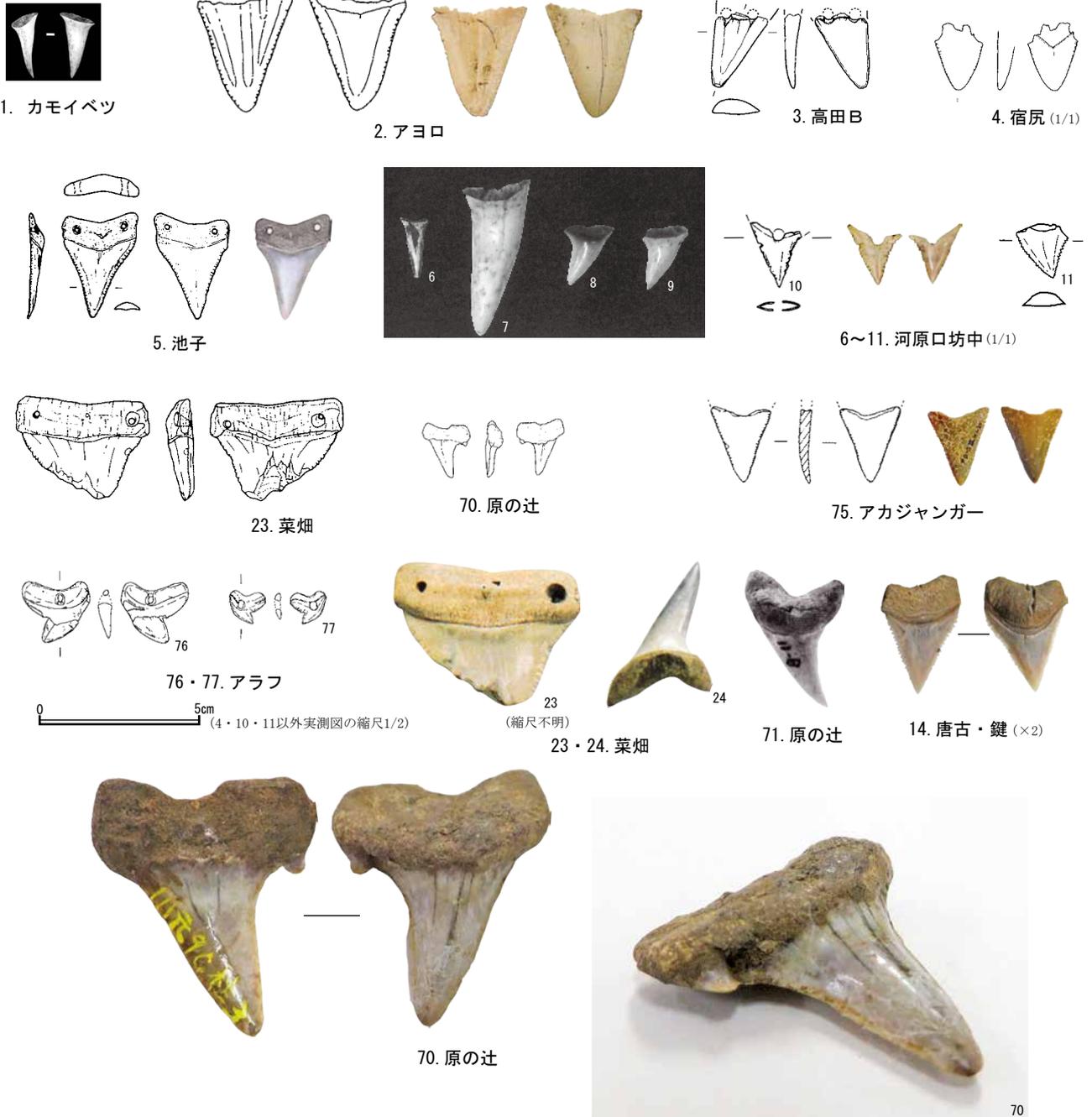
期、もう1点のP20地区YH13号のメジロザメ(11)は、後期に位置付けられている。

**間口洞窟遺跡**(第57図12) 後期「久ヶ原式」等に伴いⅡ区8層(第1混貝灰層)から出土した(神沢1974)。「サメ(種類不詳)」と記載されたが、メジロザメ属の下顎歯と見られ、歯根部までが残る。歯根部中央に1孔が穿孔され、実測図からは歯根部が整形されているようにも窺える。神沢勇一は、「器形は鏝に類似するが、離頭銛形角器の先端に装着する銛先ではないか」と想定している。

**朝日遺跡**(第57図13) 中期「貝田町式」の溝SD104上層1からサメ歯1点が出土した(宮腰他2000)。メジロザメ属の下顎歯と見られ、歯根部までが残る。「歯牙製刺突具」に分類され、「歯の先端を鋭利にしたもので、鏝として使われた」と想定されている。

**唐古・鍵遺跡**(第56図14) 第47次調査で後期の溝SD-2101からサメ歯1点が出土した<sup>註2</sup>。歯根部まで残り、カラー写真では、歯冠の色調が灰褐色を呈する。メジロザメ属の上顎歯に相当する<sup>註3</sup>。

**土井ヶ浜遺跡**(第57図15~18) 第2次調査では熟年男性の124号人骨に伴い2点(15・16)、第14次調査では土坑墓ST1405とST1406からそれぞれ熟年男性人骨に伴い1点ずつのサメ歯が出土した(沖田2013)。前-中期の埋葬と捉えられている。全てが「メジロザメ科」と同定され、1点(15)が下顎歯、3点が上顎歯で、歯根部までが残る。沖田絵麻は、歯根部の研磨を「ふくらみを削り取る」加工と捉え、「歯根部の厚みを減じる加工は、根ばさみに装着するためとも考えられ、素材が本来もつ



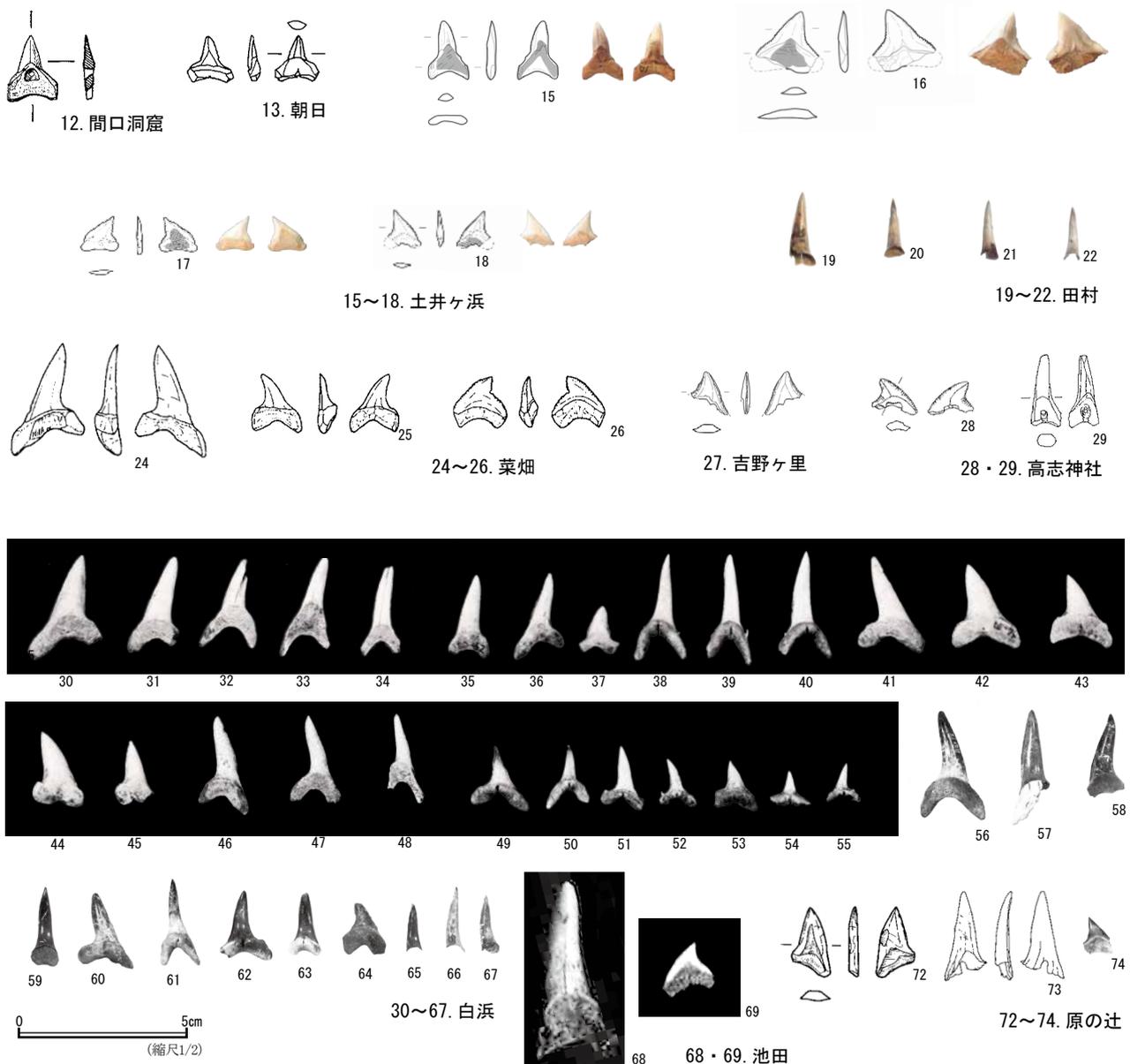
(14：田原本町教育委員会提供，70：壱岐市教育委員会提供)

**第56図 弥生時代のサメ歯集成(1)** (2・10・14・70の写真以外は各報告より引用)

丈夫さと鋭利さを生かして鎌として利用することは十分に可能であろう」と指摘している。

**田村遺跡群** (第57図19~22) 前期の環濠内土坑<sup>註4</sup> SK4018・4025・4107・4149から各1点，中・後期(第IV~V様式)の住居跡 ST722から1点，後期(第V様式)の住居跡 ST214から3点，合計8点のサメ歯が出土した(丸山・松井2004)。全て歯冠のエナメル質部分のみが残存し，「いずれも火熱を受け赤みを帯びた白色を呈する」。そのうち5点が「ネズミザメ?」と同定されている。

**菜畑遺跡** (第56図23・24，第57図24~26) C地区8層に1点，E地区8層に3点，前期の遺物包含層からサメ歯製品が出土した(中島他1982)。C地区の1点(23)は，ホホジロザメの上顎歯であり，歯根部までが残る。カラー写真図版では歯冠が灰褐色を呈する。歯根部に2孔が穿孔され，垂飾と考えられている。E地区の3点は，2点がアオザメ属(24・25)，1点がイタチザメ(26)と見られる。全て歯根部までが残る。カラー写真図版のアオザメ(24)は歯冠が灰色を帯びる。「基部研磨整形」の加工



第57図 弥生時代のサメ歯集成(2) (各報告より引用)

があり、「骨鏃？」と記載されている。

**吉野ヶ里遺跡** (第57図27) 丘陵地区Ⅱ区で検出された中期の甕棺墓 SJ0312からサメ歯が出土した(渋谷他2015)。壮年男性と推定された遺存状態の悪い人骨に伴い、打製石鏃3点、磨製石鏃6点とともに「サメ歯鏃」1点が報告されている。「メジロザメ科」と同定されており、歯冠部のみが残る。「サメ歯を加工した鏃」(渋谷他2015)という記載と、「鋸刃状の歯冠部分がそのまま使用されたとみられる」(渡部編2019)という記載とがあり、実際が明らかでない。「調査時の所見から、鏃の一部は人骨に嵌入していた可能性が高い」という。

**高志神社遺跡** (第57図28・29) 中期の甕棺墓 SJ018からサメ歯が出土した(堤2000)。壮年男性と推定された遺

存状態の悪い人骨に伴い、完形の細形銅剣1点、細形銅剣の切先破片1点、磨製石剣の破片1点、打製石鏃1点とともに「サメ歯鏃」2点が報告されている。1点(28)はメジロザメ属の上顎歯で、歯冠部のみ。「サメの歯をそのまま使い、胸骨に突き刺さった状態で検出した」と記載されている。もう1点(29)はアオザメ属で、歯根部までが残る。歯根部中央に1孔の穿孔があり、基部両面と先端部が研磨されている。

**白浜貝塚** (第57図30~67) 早期(報告書では「縄文時代晩期」)・前期の貝層から多数のサメ歯が出土した(安楽他1980)。アオザメ属の他に、シロワニ属などのネズミザメ目が主体と見られる。「骨角器」(41~48)と「未加工」(30~40, 49~55)に分けられ、「製品は歯根部のコブ状

の高まりを研磨し平坦にし、「鏃」と考えられている。変色(56~67)については「黒く焼けたもの」という記載がある。

**池田遺跡** (第57図68・69) 早期(報告書では「縄文時代晩期」)・前期の遺物包含層(貝層)から2点のサメ歯が出土した(中田1990)。A7トレンチのアオザメ属(68)は、「歯根部は扁平に研磨の「牙鏃」。B9トレンチのメジロザメ属の上顎歯は、「自然遺物」として報告されていることから、加工は認められないらしい。

**長畑馬場遺跡** 動物遺存体の報告に「アオザメの歯」(西本他2000)が記載されている。加工は認められないらしい。

**原の辻遺跡** (第56図70・71, 第57図72~74) 芦辺町教育委員会の調査では、9-C区の7号住居跡から1点、14-B区から1点、他に「11-B」の注記がある1点が出土した(松永他1995)。原の辻遺跡調査事務所の調査では、石田高原地区環濠部から2点(中尾2003)、1号河川跡から1点(福田他2006)が出土し、住居跡SC2にも「サメ歯等が出土」(福田他2005)という記載のみがある。遺構の時期が明らかなものは、中期に伴う。7号住居跡(70)はクレトラムナ(*Cretolamna* sp.), 「11-B」(71)はパロトダス(*Parotodus* sp.), とともに絶滅種で化石と見られる。1号河川跡(72)は、「基部の部分のみ表裏ともに厚さを薄くする目的で研磨が行われ、平坦な面を作り出している」「歯鏃」と報告されている。「サメの鋸歯を研磨して作り出した」という記載、「サメの歯の鋭利な部分をそのまま残し」という記載が混在するが、アオザメ属なのであろう。14-B区(73)はアオザメ属で、「歯根部片方に0.21cmの穿孔が見られ、また片方は研磨痕が残る」。環濠部(74)は「ネズミザメ科」と同定されている(丸山・松井2003)。モノクロ写真であっても、歯冠の変色が窺える。

**アカジャンガー貝塚** (第56図75) 貝塚時代後期「アカジャンガー式」<sup>註5</sup>に伴い、D-5区IV層から1点のサメ歯が出土した。ホホジロザメの下顎歯であり、歯冠部のみが残る。歯冠の色調が灰褐色を呈し、化石と観察している(鈴木2018)。

**アラフ遺跡** (第56図76・77) V層から2点のサメ歯が出土した(松葉編2003)。南琉球新石器時代後期は「約2000年前~12世紀」と時代幅があるが、V層の年代は「cal.BC355」「cal.BC390」と測定されている(江上・

松葉2003)。2点ともにイタチザメで、歯根部中央に1孔が穿孔されている。

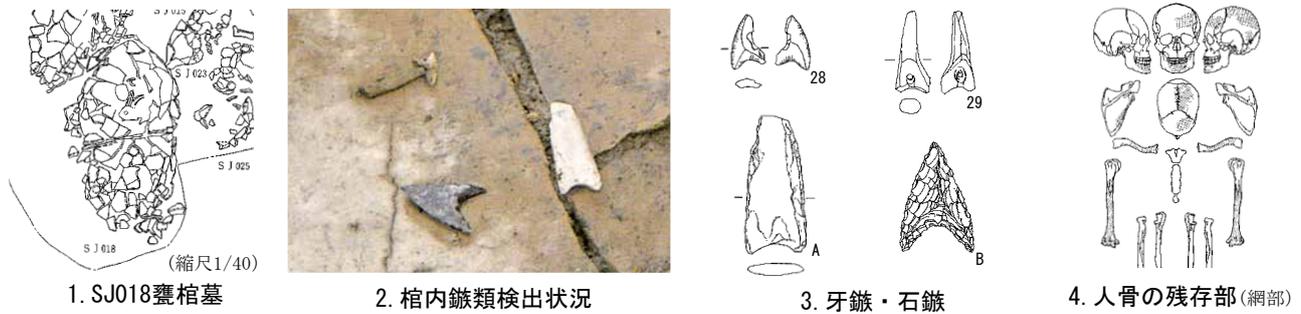
### 3 サメ歯の由来

原の辻遺跡から出土したサメ歯には、確実に化石と判断できる2点が含まれていた。1つは、クレトラムナ(*Cretolamna* sp.)。中生代白亜紀に生息していたサメであり、九州では熊本県上天草市竜ヶ岳町で姫ノ浦層群樋之島層下部から産出した*Cretolamna appendiculata*の歯化石が佐賀県立宇宙科学館、御船町恐竜博物館(第58図1)に所蔵されている。もう1つは、パロトダス(*Parotodus* sp.)。新生代古第三紀に生息していたサメであり、九州では福岡県北九州市で芦屋層群から産出した*Parotodus benedeni*の歯化石が報告されており(第58図2, 久志本・田中2014)、佐賀県伊万里市多津町の杵島層群行合野層から産出した*Parotodus benedeni*の歯化石が佐賀県立宇宙科学館に所蔵されている。これらは絶滅種であり、弥生時代に生体を捕獲することはできない。ともに歯根部まで残存する状態で、クレトラムナについては歯冠の色調が灰褐色を呈することを確認した。1万年よりも古い第四紀までを化石とするならば、現生種の全てに化石の可能性があり、骨を保存する条件を持たない遺跡において歯根部までが残存する事例については、これを考慮すべきと考えている。希少な遺物であるため破壊を伴う年代測定が実施できず、化石と判断することが難しい資料も少なくない。アヨロ遺跡や宿尻遺跡のサメ歯については、実際に観察することで、表面の摩滅を確認した。これらは捕獲したサメから歯を取り出したものではなく、遊離歯を採集したものである。サメ歯の出土が「海でサメを捕獲した」と無条件で直結することはあり得ない。

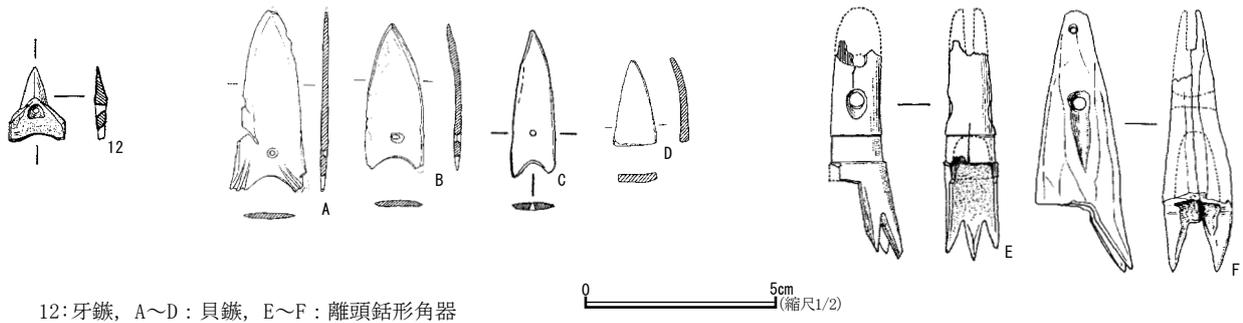


1. *Cretolamna appendiculata* (御船町恐竜博物館提供)  
2. *Parotodus benedeni* (久志本・田中2014より引用)

第58図 絶滅種化石の参考



第59図 高志神社遺跡の牙鏃(堤2000より引用)



第60図 間口洞窟遺跡の牙鏃(神沢1974より引用)

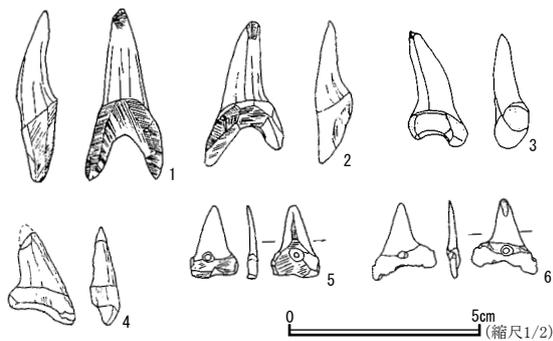
#### 4 牙鏃の検討

九州を中心として、牙鏃の事例が集中する。この牙鏃について、高志神社遺跡甕棺墓 SJ018の事例を再検討する(第59図1)。報告で奇妙に思えたのは、分部哲秋等による人骨の分析に記載がないことであった。分部等は「武器が直接人骨に嵌入した状態で発掘された例」に関心を寄せて分析に臨み、SJ018号人骨の左寛骨に細形銅剣の切先が嵌入した状態の観察所見に加えて、右寛骨にも利器による嵌入の痕跡を見出したが、牙鏃については一切触れられていない。そもそも分部等が示した「人骨の残存部」(4)に、胸骨は残存しないのである。「棺内鏃類検出状況」(2)を見る限りでは、「胸骨」は「肋骨」の誤りと考えざるを得ない。歯冠の先端を上にするのが一般的であるのに、これを下向きに図示(3-28)したのは、「突き刺さった状態」の先端を上に向けたのであろう。牙鏃をのせる面が肋骨の外側であっても内側であっても、そこに先端が「突き刺さった状態」というのは、想像することすら難しい。高志神社遺跡の「胸骨に突き刺さった状態で検出した」という記述が類例として引用され、吉野ケ里遺跡甕棺墓 SJ0312でも、「調査時の所見から、鏃の一部は人骨に嵌入していた可能性が高い」

と考えられている。しかし、「この調査時の所見」の詳細は明らかにされていない。したがって、牙鏃として使用されたと考えるべき確かな根拠は、現在のところ認められないのである。弥生時代の牙鏃は、先端部が残存するものがほとんどであり、石鏃のような衝撃剥離による欠損が観察されない。

神沢勇一が間口洞窟遺跡の牙鏃(第60図12)を「離頭鉾形角器の先端に装着する鉾先」と考えたのは、離頭鉾形角器(E・F)の先端部に彫られた溝と牙鏃の厚さがほぼ一致し、離頭鉾形角器先端部の穿孔と牙鏃の穿孔に、刀剣と柄を固定するための目釘孔のような機能を考へてのことなのであろう。但し、離頭鉾形角器に対して牙鏃は小さく、鏃形貝器(A～D)が大きさとして相応である。矢柄の先端部に同様の加工があったとすれば、装着するサメ歯には基部の整形が施されたはずである。「研磨」と表現されることも多いが、沖田絵麻による「ふくらみを削り取る」ための加工が的を射ている。その削られた歯根部中央に、矢柄へ固定するための1孔が加えられることもあった。

さて、矢柄に装着されながら、実際には使用されていないとするならば、その目的には儀礼が考えられてく



1～6：佐賀貝塚（正林他1989より引用）

## 第61図 九州における縄文時代後期の牙鏃

る。埋葬に伴う事例は副葬品であり、土井ヶ浜遺跡では熟年男性に、吉野ヶ里・高志神社遺跡では壮年男性に、石鏃とともに伴う。また、牙鏃は弥生時代に成立するのではなく、九州では縄文時代後期に既に出現している（第61図）。サメ歯に付与された物語（鈴木2018）が、形を変え継承されていたことも考慮する必要があるにちがいない。

### おわりに — 「東のサメ歯」としての宿尻遺跡 —

東日本では、高田B・池子・川原口坊中遺跡など弥生時代中期までの穿孔された製品が垂飾と考えられるのに対して、西日本では、前期の菜畑遺跡のみが垂飾、九州北部に集中する製品のほとんどが牙鏃と考えられた。関東地方では、後期の間口洞窟遺跡に牙鏃が出現している。垂飾はホホジロザメ、メジロザメ、アオザメの歯を素材としており、ホホジロザメは東西日本で共通する。牙鏃は専らアオザメ、メジロザメの歯を素材としている。墓壙から出土した事例では、東日本の根岸遺跡において白玉・小玉と共伴し、西日本では吉野ヶ里遺跡において打製・磨製の石鏃と共伴することが対照的である。但し、牙鏃については、高志神社遺跡の事例を再検討し、埋葬者を致死傷させた実用の武器ではなく、副葬品として遺体に添えられた可能性を指摘した。

宿尻遺跡のサメ歯は、東日本におけるサメ歯の事例から、弥生時代中期の第1号土坑という再埋葬に伴うものではないかと考えることができる。但し、埋置された土器内であってもその底面から検出されたわけではなく、土壌とともに包含されていたことから、土器群中央に集中する管玉等に関連するのかもしれない。

本稿の成立にあたり、遺跡出土のサメ歯の写真を提供いただいた奈良県田原本町教育委員会、長崎県壱岐市教育委員会、参考資料の写真を提供いただいた熊本県御船町恐竜博物館、宿尻遺跡のサメ歯の同定等御教示をいただいた高栗祐司氏（群馬立自然史博物館）、富田武照氏（沖縄美ら島財団）に心より感謝いたします。

- 註1 ドタバカ(*C. obscurus*)、オグロメジロザメ(*C. amblyrhynchus*)などが種の候補になると、高栗祐司氏に御教示いただいた。
- 註2 『平成8年度 唐古・鍵遺跡 第61次発掘調査概報』(1997、田原本町教育委員会)では、第40次調査にサメ歯が記載されているが、これは第47次調査の誤りである。
- 註3 ホホジロザメの上顎歯のようにも見えるが、そうすると歯冠幅から全長は1mほどの胎仔相当と推定されることになる（鈴木2021）。しかし、副咬頭状の突起がないことがホホジロザメの胎仔(満期)～幼体の特徴には一致しない。
- 註4 土坑の形態と構造から「水汲みに関連する遺構」と考えられている。
- 註5 旧稿（鈴木2018）では、「沖縄県史考古編年表」（安里2003）に基づき「アカジャンガー式」を「弥生後期」併行とした。しかし、これを「貝塚時代後期」の「後Ⅲ期」として「古墳時代～平安時代」併行（沖縄県立埋蔵文化財センター編2008）、「後2期」として「奈良～平安時代」併行（新里編2016）など編年の位置が下ってきている。本稿では、弥生時代以降の資料として理解されたい。

### 参考文献

- 相原淳一・飯塚義之 2020「宮城県栗原市上堤遺跡出土「の」字状石製品と大崎市根岸遺跡出土の管玉ほか玉類」『東北歴史博物館研究紀要』21 45-55頁
- 安里嗣淳 2003「先史・グスク時代の編年」『沖縄県史 各論編』第2巻(考古) 沖縄県教育委員会 22-41頁
- 阿部明義・笠原 興・直江康雄 2020『斜里町 カモイベツ遺跡 —一般国道334号斜里町日の出事故対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(第364集)北海道埋蔵文化財センター
- 安楽 勉他 1980『白浜貝塚』(第2集)福江市教育委員会
- 飯塚美保・高橋 香・加藤久美 2014『河原口坊中遺跡 第1次調査 —首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に伴う発掘調査—』(第304集)かながわ考古学財団
- 上奈穂美 2020「カモイベツ遺跡(2008年調査)出土の魚類・哺乳類遺体」『斜里町 カモイベツ遺跡』(第364集)北海道埋蔵文化財センター 327-340頁
- 江上幹久・松葉 崇 2003「アラフ遺跡」『考古学ジャーナル』No. 497 28-32頁
- 沖田絵麻 2013「山口県土井ヶ浜遺跡第14次調査出土のサメ歯製品」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第8号 43-50頁
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2008『企画展 原始人の知恵と工夫 —天然素材(貝殻・骨・角・牙)の活用—』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 神沢勇一 1974『間口洞窟遺跡(2)』神奈川県立博物館発掘調査報

第6表 弥生時代サメ歯一覧表

番号	挿図	遺跡名	サメの種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	加工	文献	備考
1	第56図	カモイベツ遺跡	アオザメ カ	*21.0	*11.0	*7.5	—	なし	阿部他2020	
2	第56図	アヨロ遺跡	ホホジロザメ	36	31	8	1.1	なし	高橋1980	歯冠部摩滅
3	第56図	高田B遺跡	アオザメ カ	26	18	5	—	穿孔(2孔)	菅原他1994	
4	第56図	宿尻遺跡	メジロザメ	10.5	7.5	2.5	<0.1	なし	本書	歯冠部摩滅
5	第56図	池子遺跡群	ホホジロザメ	32	23	2	—	穿孔(2孔)	山本他1999	化石カ
6	第56図	河原口坊中遺跡	アオザメ カ	*9.5	*4.5	—	—	なし	中村2014	
7	第56図	河原口坊中遺跡	アオザメ カ	*24.5	*10.5	—	—	なし	中村2014	
8	第56図	河原口坊中遺跡	アオザメ カ	*9.0	*7.5	—	—	なし	中村2014	
9	第56図	河原口坊中遺跡	アオザメ カ	*9.0	*7.0	—	—	なし	中村2014	
10	第56図	河原口坊中遺跡	メジロザメ	10	8	2	<0.1	穿孔(1孔)	飯塚他2014	
11	第56図	河原口坊中遺跡	メジロザメ	8.5	8	2.5	<0.1	なし	飯塚他2014	
12	第57図	間口洞窟遺跡	メジロザメ カ	20	15	4	—	研磨カ・穿孔(1孔)	神沢1974	
13	第57図	朝日遺跡	メジロザメ カ	12	4	3	—	先端部加工?	宮腰他2000	
14	第56図	唐古・鋸遺跡	ホホジロザメ	*10.0	*7.0	—	—	なし	藤田他1992	化石カ
15	第57図	土井ヶ浜遺跡	メジロザメ	17.3	11.9	2.6	0.28	基部表裏を研磨	沖田2013	
16	第57図	土井ヶ浜遺跡	メジロザメ	18.6	18.4	2.9	0.42	基部表裏を研磨	沖田2013	
17	第57図	土井ヶ浜遺跡	メジロザメ	10.0	11.0	1.6	0.10	基部表裏を研磨	沖田2013	
18	第57図	土井ヶ浜遺跡	メジロザメ	11.5	10.0	1.8	0.08	基部表裏を研磨	沖田2013	
19	第57図	田村遺跡群	アオザメ カ	*24.5	*8.0	—	—	なし	丸山他2004	
20	第57図	田村遺跡群	アオザメ カ	*19.0	*7.0	—	—	なし	丸山他2004	
21	第57図	田村遺跡群	アオザメ カ	*19.0	*6.0	—	—	なし	丸山他2004	
22	第57図	田村遺跡群	アオザメ カ	*17.5	*6.0	—	—	なし	丸山他2004	
23	第56図	菜畑遺跡	ホホジロザメ	30	41	8	—	穿孔(2孔)	中島他1982	化石カ
24	第56・57図	菜畑遺跡	アオザメ	37	22.0	6.5	—	基部を研磨	中島他1982	化石カ
25	第57図	菜畑遺跡	アオザメ	17	14.0	5	—	基部を研磨	中島他1982	
26	第57図	菜畑遺跡	イタチザメ	15	15.5	5.5	—	基部を研磨	中島他1982	
27	第57図	吉野ヶ里遺跡	メジロザメ	37	17	2	1.8	なし	渋谷他2016	
28	第57図	高志神社遺跡	メジロザメ	15	9	2.0	0.1	なし	堤2000	
29	第57図	高志神社遺跡	アオザメ	22	9	2.5	0.45	研磨, 穿孔(1孔)	堤2000	
30~67	第57図	白浜貝塚	アオザメ, シロワニ	—	—	—	—	41~48「加工品」	安楽他1980	化石カ
68	第57図	池田遺跡	アオザメ	—	—	—	—	基部を研磨	中田1990	
69	第57図	池田遺跡	メジロザメ カ	—	—	—	—	なし	中田1990	
70	第56図	原の辻遺跡	化石種	16.9	14.2	4.8	—	なし	松永他1995	化石
71	第56図	原の辻遺跡	化石種	—	—	—	—	なし	松永他1995	化石
72	第57図	原の辻遺跡	アオザメ	22	12	3	—	基部表裏を研磨	福田他2006	
73	第57図	原の辻遺跡	アオザメ カ	25.8	11.5	3.8	—	研磨, 穿孔(1孔)	松永他1995	
74	第57図	原の辻遺跡	メジロザメ カ	*11.5	*9.0	—	—	なし	藤村他2003	
75	第56図	アカジャンガー貝塚	ホホジロザメ	24	20	3.5	—	なし	金武編1980	化石
76	第56図	アラフ遺跡	イタチザメ	24	22	9	1.5	穿孔(1孔)	松葉編2003	
77	第56図	アラフ遺跡	イタチザメ	12	12	4.5	0.5	穿孔(1孔)	松葉編2003	

\*計測値は全て残存値, 「\*」付数値は写真を計測。

告書第8号 神奈川県立博物館  
 金武正紀他 1980『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』具志川市教育委員会  
 渋谷 格・渡部芳久 2016『吉野ヶ里遺跡 ―弥生時代の墓地―』(第214集)佐賀県教育委員会  
 澁谷正三他 1981『宮城県営園場整備関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和55年度)』(第75集)宮城県教育委員会  
 正林 護他 1989『佐賀貝塚』(第9集)峰町教育委員会  
 菅原弘樹他 1994『高田B遺跡 ―第2次・3次調査―』(第164集)宮城県教育委員会  
 鈴木素行 2018『ムカシオホホジロザメの考古学 ―サメ歯化石と、サメ歯製垂飾、サメ歯模造垂飾の成立について―』『筑波大学先史学・考古学研究』第30号 1-26頁  
 鈴木素行 2018『南のサメ歯 資料編 ―沖縄地域のサメ歯化石と、サメ歯製垂飾、サメ歯模造垂飾―』『茨城県考古学協会誌』第30号 31-64頁  
 鈴木素行 2021『北のサメ歯 補訂編 ―歯冠の計測値から推定するホホジロザメ、イタチザメの全長―』『茨城県考古学協会誌』第33号 31-56頁  
 副島和明他 1995『原の辻遺跡 ―幡針川流域総合整備計画(園場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書I―』(第124集)長崎県教育委員会  
 高橋正勝 1980『アヨロ遺跡 ―統縄文(恵山式土器)文化の墓と住

居址―』北海道先史学協会  
 堤 安信 2000『高志神社遺跡』(第27集)千代田町教育委員会  
 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編 2014『土井ヶ浜遺跡 第1次―第12次発掘調査報告書』下関市文化財調査報告書35 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム・下関市教育委員会  
 中尾篤志 2003『原の辻遺跡 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書』(事務所第26集)長崎県教育委員会  
 中島直幸・田島龍太他 1982『菜畑遺跡 ―唐津市菜畑字松円寺所在の縄文・弥生時代稲作遺跡の調査―』(第5集)唐津市教育委員会  
 中田敦之 1990『池田遺跡』(第6集)松浦市教育委員会  
 中村賢太郎 2014『河原口坊中遺跡から出土した動物遺体』『河原口坊中遺跡 第1次調査―』かながわ考古学財団 27-36頁  
 新里亮人編 2016『面縄貝塚 総括報告書 ―平成19~平成27年度町内遺跡発掘調査等事業に係る発掘調査報告書―』(第16号)伊仙町教育委員会  
 西本豊弘・鶴沢和宏・姉崎智子 2000『長畑馬場遺跡出土の動物遺体』『長畑馬場遺跡』大島村教育委員会 93-94頁  
 福田一志・中尾篤志 2005『原の辻遺跡 総集編I ―平成16年度までの調査成果―』(事務所第30集)長崎県教育委員会  
 福田一志・寺田正剛・溝上貴稔 2006『原の辻遺跡 ―原の辻遺跡調査研究事業報告書―』(事務所第33集)長崎県教育委員会  
 藤尾慎一郎 2021『日本の先史時代 ―旧石器・縄文・弥生・古墳

- 時代を読み直す―』中公新書2654 中央公論新社
- 藤田三郎他 1992『田原本町埋蔵文化財調査年報』3(平成3年度) 田原本町教育委員会
- 本田秀樹他 2000『長畑馬場遺跡』(第13集) 大島村教育委員会
- 前田光雄他 2006『田村遺跡群Ⅱ ―高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9分冊―』(第85集) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松永泰彦・松井 章・古環境研究所 1995『原の辻遺跡 ―高元地区範囲確認発掘調査―』(第9集) 芦辺町教育委員会
- 松葉 嵩編 2003『アラフ遺跡調査研究Ⅰ ―沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告―』アラフ遺跡発掘調査団
- 丸山真史・松井 章 2003「原の辻遺跡高元石田高原地区(2002年度)出土動物遺存体」『原の辻遺跡』長崎県教育委員会 188-195頁
- 丸山真史・松井 章 2004「田村遺跡群出土の動物遺存体」『田村遺跡群Ⅱ ―高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8分冊 写真図版―遺物編―自然科学編―』(第85集) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 316-322頁
- 三島 格 1989「九州および南島出土の鯨歯製垂飾について」『南島考古学』南島文化叢書10 第一書房 217-245頁
- 宮腰健司他 2000『朝日遺跡Ⅵ ―新資料館地点の調査―』(第83集) 愛知県埋蔵文化財センター
- 山本暉久・谷口 肇 1999『池子遺跡群 No.1 - A地点』(第46集) かながわ考古学財団
- 分部哲秋・佐伯和信・長島聖司 2000「佐賀県千代田町高志神社遺跡出土の弥生時代人骨」『高志神社遺跡』(第27集) 千代田町教育委員会 52-60頁
- 渡部芳久編 2019『吉野ヶ里遺跡 ―平成13～23年度の発掘調査・弥生時代墓地総括・補遺編―』(第222集) 佐賀県教育委員会

報告書抄録

ふりがな	しゅくじりいせき
書名	宿尻遺跡
副書名	久慈川・那珂川流域の再葬墓
巻次	I
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	鈴木素行, 吹野富美夫, 佐々木義則, 田中美零
編集機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
発行機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
発行年月日	2022(令和4)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゅくじりいせき 宿尻遺跡	ひたち おおみや しながくらあざしゅくじり 常陸大宮市長倉字宿尻 907番地の2	08225	御005	36° 34' 03"	140° 16' 49"	20190801 ～ 20190906	98	太陽光発電施設整備の 開発に伴う発掘事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿尻遺跡	集落跡	縄文時代	掘立柱建物跡 1基 土坑 3基	縄文式土器(中～晩期) 土製品(土偶) 石器(石鏃, 石匙, 石錐等) 石製品(垂飾り等) 骨角器(珥形製品) 動物遺存体(獣魚骨等) 植物遺存体(堅果類殻等)	弥生時代中期の再葬墓 1基に, 最少で15個体, 最多で18個体の壺形土 器が馬蹄形あるいは環 状に埋設されていた。土 器群の中央部覆土中から は, 破碎された管玉等 が検出された。土器内か らはサメ歯も出土してい る。
	墓跡	弥生時代	再葬墓 1基	弥生式土器(中期), 管玉, 小玉, サメ歯	
	不明	不明	土坑 29基		

## 仕様

【紙質】 本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用している。

表紙	マットポスト	125kg
見返し	上質紙	70.5kg
巻頭図版	マットコート	90kg
本扉・序文・例言・目次・本文・抄録・奥付	書籍用紙クリーム	70kg

## 【印刷】

オフセット印刷(黒)

# 宿 屍 遺 跡

— 久慈川・那珂川流域の再葬墓 I —

発行日 2022(令和4)年3月31日

編著者 鈴木 素行

編集・発行 常陸大宮市教育委員会

所在地 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6

電話番号 0295-52-1111

印刷 コトブキ印刷株式会社



*syukuziri ruins*